幕府隠密帳

ばくふおんみつちょう

南原幹雄

GAKKEN M BUNKO

幕府隠密帳

ばくふおんみつちょう

南原幹雄

GAKKEN M BUNKO

著者紹介

南原 幹雄（なんばら みきお）

一九三八年、東京生まれ。
早稲田大学政治経済学部卒業。
七三年、「女絵地獄」で小説現代新人賞、
八一年、『闇と影の百年戦争』で吉川英治文学新人賞、
九七年、『銭五の海』で日本文芸大賞をそれぞれ受賞。
秀抜な構想力をもとに流麗な筆致で数多くの時代小説の快作を精力的に発表、多くのファンを集めている。
近刊に『徳川四天王』『豪商伝』『王城の忍者』『名将佐竹義宣』など。

幕府隠密帳

南原幹雄

学研M文庫

な10−8
¥629

9784059004813

1920193006292

ISBN978-4-05-900481-3

C0193 ¥629E

1B1653

定価：本体629円
※税が別に加算されます。

享保元年、熾烈な暗闘の末、八代将軍の座についた徳川吉宗は、その地位を不動のものとすべく、直属の諜報機関「御庭番」を新設する。ところがそれが、幕府隠密役復帰を悲願とする伊賀・甲賀の忍者との軋轢を生み、ついには紀州・尾張両藩の存亡を賭けた闘争へと突き進む。かくして秘術が尽くされ、血で血を洗う壮絶な闘いが江戸の闇の奥で繰り広げられる。その死闘のゆきつく果ては……

GAKKEN M BUNKO

南原幹雄の本

- 情炎くノ一系図
- 情炎くノ一殺法
- 吉原おんな繁昌記
- 吉原おんな市場
- 江戸妻お紺
- 幕府隠密帳

好評発売中
時代小説シリーズ

- 霊岸島捕物控　新川河岸迷い酒　千野 隆司
- 三毛猫先生事件帖　愛染桜 花地獄　書き下ろし　風間 九郎
- 撃剣　鞘走り暮鐘　武藤 大成　書き下ろし
- 濡れ事師春快　みだれ肌　天宮 響一郎　書き下ろし
- 用心棒三十郎　はぐれ鷹　永岡 慶之助　オリジナル
- 平八捕物帳　待ち伏せ　宮城 賢秀　書き下ろし
- 手当て師佐平　恋肌夢慕情　北山 悦史　書き下ろし
- 鉄太郎日暮れ剣　月もおぼろに　笛吹 明生　書き下ろし
- 希代くノ一忍法帖　雲の彼方に　高妻 秀樹　書き下ろし
- 湯島坂下狂騒記　煮売屋の入り婿　書き下ろし　山中 公男
- ふろしき同心御用帳　花供養　井川 香四郎　書き下ろし
- 蜜猟人朧十三郎　化粧鳥　睦月 影郎　書き下ろし
- 戻り舟同心　長谷川 卓　書き下ろし
- 隠し目付植木屋陣蔵　消えた密書状　書き下ろし　乾 荘次郎
- 夜桜乙女捕物帳　殺し屋　和久田 正明　書き下ろし
- 鬼役矢背蔵人介　冬木立の月　坂岡 真　書き下ろし

カバーイラスト：村上 豊
カバーデザイン：妹尾 浩也
ブックデザイン：中谷 匡児

幕府隠密帳

南原幹雄

学研M文庫

幕府隠密帳

南原幹雄

学研M文庫

幕府隠密帳

南原 幹雄

学研M文庫

目次

甲賀の挑戦　5
三月の風に散る　49
決闘増上寺　90
顔のない男　127
伊賀忍法空蟬　165
忍法〈花の匂い〉　206
御庭番秘伝　258

甲賀の挑戦

一

宵闇の、生あたたかい風が吹きおこってきた。

夏の夕暮れは長いので、月はあかるいころからでていた。今は江戸城富士見櫓のなめ上空に、卵色にややにごった月がかかっている。

地上にはいまだに昼の暑さのほてりがのこっている。

相楽十平次は御長屋の縁側で、宵闇の風に頬をなぶらせていた。

こころのうちに、おちつかぬ思いがめばえてきた。日がおちて宵闇にいたるころから、十平次のうちに魔がしのびこんでくるようだ。生あたたかい風に吹かれると、もういけない。

十平次の体から魂がぬけでていって、そわそわとした気持にかりたてられた。自制心はほとんどうしなわれてしまう。体が自然にうごいて、御長屋をしのびでていった。

十平次の住む御長屋は桜田御用屋敷のなかにある。桜田御用屋敷といえば、虎ノ門、

清水門、雉子橋御用屋敷とともに、前将軍の中臈（側妾）がすまう邸宅である。といっても前将軍の家継は八歳で歿しているので、現在御用屋敷には前々将軍家宣の中臈たちがすまっている。

この四カ所の御用屋敷の御長屋には、このたび新設された御庭番たちが住んでいるのである。相楽十平次らの御庭番はこの年の四月までは紀州藩の御庭方であった。藩主吉宗が八代将軍となって徳川宗家をついだために、紀州藩御庭方から藪田助八以下十七人をよりすぐって、将軍直属の隠密役御庭番としたのである。

その御庭番たちが御用屋敷の御長屋にすみだして、まだ半月ほどしかたっていない。十平次の足はしぜんに前中臈たちが住んでいる御殿のほうへむかっていた。

桜田御用屋敷の御殿にはお須免の方と美和の方が髪を切りさげ、法体となって、前々将軍家宣の菩提を供養しながらしずかな暮しをおくっている。御長屋と御殿とのあいだには木戸と築地塀があるだけである。

木戸番はおかれていない。おかれていたとしても、十平次が木戸をくぐるための障害にはならなかったであろう。彼は紀州藩でも屈指の剣の使い手だったばかりでなく、御庭方時代に紀州藩につたわる根来流の武術をも修得していた。

木戸をあけて、十平次は御殿へちかづいていった。御用屋敷の御殿はそう贅沢なつくりではなく、建物も内部もわりあい簡素にできている。御用屋敷の門には一応門番

所があり、番士がいるが、屋敷内の警備はとくにおこなわれていない。しいていえば、御長屋の御庭番がそれにあたる。

十平次は昨夜も、木戸をとおって御殿にちかづいた。

御殿の横は数寄屋造りの庭になっている。瓢箪形の池があり、石組がおかれ、植込みが配置されている。

十平次は池のちかくの植込みにちかづいていった。そして植込みの後ろに身をかくし、前方をうかがった。

前方には御殿の廊下が見える。さらによくうかがえば、廊下のむこうにあけはなたれた座敷が見とおせる。

廊下はくらいが、座敷の中は行灯がともされている。座敷の位置からすれば、そこは御殿の主がいるところである。

あいにくなことに、座敷は無人である。昨夜はこの植込みにかくれて、前中臈美和の方のなやましげな姿態をおもう存分のぞき見した。十平次は時がたつのもわすれ、蚊に食われるのも我慢しとおし、一刻（約二時間）はここですごした。一昨日は十平次の仕事が夜おそくまでかかって、のぞき見はできなかったが、一昨々日はやはり宵の六つ半（夜七時）ごろから五つ半（夜九時）ごろまで、おもわぬ果報の眼福に浴した。それいらい宵闇がおとずれると、生ぐさい男ごころが疼きだすのである。

十平次は植込みの陰でしばらく待った。行灯がともっている以上、すぐに美和の方は座敷に戻ってくるだろうとおもった。頭こそまるめてはいないものの仏門に入っても同然の暮しをしているのだから、よほどのことでもないかぎり御用屋敷から外出することはないはずである。

座敷と廊下とのあいだには御簾があるが、それをたらさず捲きあげてある。美和の方は風をさえぎる御簾があまり好きではないようだ。ほとんどいつも、この御簾はあがっている。御用屋敷の内ならばのぞき見などするような不埒な者はいないはずだとおもっているのだろう。

予期したとおり、やがて座敷の奥の襖がひらいて、白い打掛のような部屋着を羽織った美和の方が入ってきた。

障子の前にちいさな文机がある。美和の方はその前にすわった。

切り下げ髪を耳の下までたらした優婉な容顔はまだ二十五、六歳の若さに見える。この年齢での仏門暮しははた目にも堪えがたさがしのばれる。前々将軍家宣に乙女の蕾を散らされたのは、おそらく七、八年前のことであろう。それから何年もたたずに家宣は病歿した。将軍の死によって美和の方は自分の意志によらず、仏門の暮しを余儀なくされた。家宣のお手のついた中臈はみなおなじ運命にしたがったのである。

美和の方は細筆をとり、慣れた手つきで中断していた筆をはしらせはじめた。

ときたまそばの手本をのぞきながら真剣な態度と眼差しでしきりに文字を書きつらねていった。

（写経であろう）

と十平次は想像していた。

つかえてきた将軍に他界されたお手付き中臈たちは、読経と写経によって亡き魂の成仏と菩提供養をつづけるのが余生の暮しである。しかし、若くして仏門に入った身としては、余生はあまりに長い。その退屈に堪えつづけていかなければならないのである。

十平次は美和の方の容顔、姿態を食い入るようにながめた。白い細面は憂愁にとざされているが、どことなくやるせなさを秘めている。白い部屋着につつまれた身体にはまだ二十代の若さがあるはずだ。開花もまたずに日蔭の暮しにうつされた身空には女の切ないうらみがにじんでいるように見えた。

美和の方の真剣な態度はそう長くはつづかなかった。やがて、筆をおき、両肘を文机にのせてもの憂そうに頬杖をついた。

辛抱しきれぬと見えた。深いため息が聞えてきそうである。行灯の明りだけではよくは見えぬが、眸の色にもなやみの深さが浮かんでいるように感じられる。

文机の前の両膝がわずかにひらいている。こころが弛緩している証しである。腰の

位置もこころもちしずんでいるようだ。その姿が十平次にはいかにもなやましげで、いろいろな想像や妄想をかきたてる。

十平次はしばらく妄想にひたって自分をあそばせた。

何をしようとたくらんでいるのではない。雲上の人ともいうべき、かつての将軍の中臈がいとも鬱然とした有様で憂悶する姿をのぞき見ているだけだ。御殿へしのびこんだり、これ以上ちかづこうという野心はなかった。せめて想像のうえで、美和の方の衣服をはがし、熟れて身もだえる裸身を瞼の裏に浮かべるだけのたのしみである。

美和の方があえぎ、甘え、陶酔し、歓喜してはてる姿を妄想し、あくことなくみだらな愉しみをつづけることが、このところ十平次の癖になっていた。

今夜も気づかぬうちに、一刻ほどの時間をついやした。美和の方が就寝のために座敷をたったので、十平次もこころをのこしながら植込みの陰をはなれた。

しかしまだ十平次は妄想の世界から脱しきれていなかった。妄想の切れっ端が脳裡を浮きつしずみつしていた。

十平次は御用屋敷の庭をあるいた。現実と妄想とが入りみだれていた。

そのとき、十平次ははっとなって足をとめた。

(……?)

十平次は池のかたわらの石組に視線をそそいだ。

小柄な人間の背丈くらいありそうな石がかすかにうごいた。ばかりではない、石の左右に人間の腕が生えでているのだ。

(馬鹿な……)

そうおもいつつ石組を凝視した。もう妄想は断ち切っていた。

(石の化物か、それとも妖怪か?)

十平次は相手をにらみすえた。さいわい腰に太刀を帯びている。相手しだいによってはこちらも抜き合わさなくてはならぬ。

そうおもったとき、石が揺れた。と同時に殺気がほとばしり、石が宙を飛んだ。十平次にはたしかにそう見えた。

十平次は二、三歩後退し、刀の柄に手をかけた。が、抜きはなつ前に強い衝撃をうけて、体は後方へとばされていた。

とっさのことで、十平次は何がおこったのかわからなかった。ともかく起きあがろうとした。けれどもどういう理由か、起きあがれない。必死でおきあがろうとしたが、体がいうことをきかぬ。利き腕で体をささえようとしたが、それもできない。

仕方なくただちに敵にそなえるために、太刀を抜こうとしたが、それも駄目だ。自分の右腕がないのだ。

十平次から二間ほどはなれた植込みの根方に人間の片腕がころがっているのが見え

た。十平次は愕然となった。自分の右の肩口からすっぱりと片腕がなくなっており、血が吹き出ているのだ。

そうとわかったとたんに目のくらむような激痛がおそってきた。けれどもそれどころではなかった。敵の二の太刀にそなえなければならなかった。

十平次は自分の武術にたいする自信がつよかっただけに、このような痛手をこうむったことが信じられなかった。

十平次は地に這ったまま、左手でようやく脇差をぬいた。そして必死に体をおこそうとした。

目前に敵がせまってきた。五尺くらいの小柄な男だ。尋常ならば、十平次がゆうにひねりつぶせるとおもえる貧弱な体軀の男である。この男が石の背後にかくれていたのだ。妄想がのこっていたので、石の化物と見えたのだろう。

十平次はこの期におよんで、まだおのれの腕への過信があった。片腕で十分この小男をたおせるとおもっていた。が、すぐにその過信は吹きとばされた。敵は音もなく、地を飛び、疾走してきた。

十平次は敵をむかえ討つ余裕がなかった。よろよろとおきあがりかけたところに敵をむかえた。

敵はそのまま疾走し去った。すれちがいざま、太刀風が十平次の耳もとをかすめた。

その瞬間、十平次の左手も脇差をにぎったまま肩口からすっぱりと斬りおとされていたのである。

十平次はふたたび二、三間飛ばされ、大地にたたきつけられた。激痛と苦悶が体中をかけめぐった。自分の無残な敗北が信じられなかった。

敵の正体をさぐる術も余裕もなかった。それでも十平次は最後までたたかう闘志をのこしていた。全力をふりしぼって懸命に体をおこそうとした。

疾走し去った敵が、ふたたび疾風のように駆けもどってきた。にぶい月光のもとに敵の手にする一尺余寸の直刀が見えた。

（やあっ！）

十平次は最後の気合を発して両足ではねおき、体当りをしたつもりだった。が、気合は、うう……という呻きをしぼりだしたにすぎなかった。体当りの前に体を三度はじき飛ばされ、意識をうしなった。

二

翌朝。四カ所の御用屋敷にある御庭番の御長屋と江戸城本丸御台所御門のそばの御庭番詰所は騒然となった。世にも無残な相楽十平次の死骸が発見されたからだ。

それは遺体というよりも死骸という言葉がふさわしいひどいものであった。はじめに発見した桜田御用屋敷の掃除番はすぐには人間の遺体だとはわからなかったそうである。四肢が根本から切りはなされた胴体と首だけの血まみれの異様な物体であった。周囲に散乱していた四本の手足を見てようやく人間の遺体だとわかったそうだ。

人をころすにしても、これだけ残酷な方法がもちいられたことは前代未聞である。

「藪田助八、この一件をどうかんがえる」

御庭番藪田助八にそういったのは、御側御用取次の加納角兵衛久通であった。

藪田は本丸笹の間で加納とむかい合ってすわっていた。御側御用取次が御庭番を呼んで秘密の話をするときは、かならず五十畳座敷の笹の間がつかわれた。この広さがあれば、周囲からぬすみ聴きされるおそれがないからだ。

藪田はすぐには返事をしなかった。即答できる事柄ではなかった。

「ころし方の残酷さも異様だが……、新設早々の御庭番がころされたことに問題がありそうだ」

と加納は言葉をついだ。

「相楽が御庭番だからころされたとおっしゃいますか」

藪田はそうこたえて、さすがに加納は勘がするどいとかんがえていた。藪田もまずはじめにそうおもった。

「もう一つ、相楽が新直参だという理由でねらわれたともかんがえられる」

加納は頭脳明晰な男である。明敏さで、かつては紀州家中に知られていた。

新直参ということでは、加納も藪田もおなじである。

吉宗が八代将軍位につく前、紀州家と尾張家とのあいだで、水面下のはげしい将軍位争奪の暗闘がくりひろげられた。紀州藩主吉宗、尾張藩主継友いずれも将軍への野心はつよく、双方とも御三家の面目をかけてあらゆる手段をつくして闘争した。結果は紀州家が尾張家を制して将軍位をものにした。吉宗は紀州家からでて宗家をつぐに際して、紀州藩士約百人を幕府直参にした。その筆頭が一万石で御側御用取次にとりたてられた加納と有馬四郎兵衛氏倫である。御側御用取次は君側第一の臣で、将軍を補佐する役柄である。将軍と老中のあいだに立って、諸事をとりあつかう。したがってその勢威は大きく、老中といえども一目おく。

「従来の直参とあたらしい直参とのあいだに多少溝はありましょうとも、これほどの事件をおこすようなものとはかんがえられません」

藪田は自分のかんがえを遠慮なくいった。たとえ直属の上役であろうとも、御庭番のような仕事にとって、遠慮はかえって禁物である。

「ともかくこの一件をすみやかにあきらかにいたさねばならぬ。これには容易でない深さが感じられる。藪田助八、その方にまかせる。すみやかにあきらかにいたせ」

加納は威儀をただして命令をくだした。

「受けたまわりましてございます」

藪田はかしこまって拝命した。御庭番は将軍に直属するとはいっても、実際に管轄するのは御側御用取次である。

「この一件によって、御庭番の力量が世に問われている。さらに御庭番をもうけた上様が鼎の軽重を問われることになろう。失敗はゆるさぬ」

加納の命令にはきびしい注文がついた。事件の糾明に成功しなければ、加納まで出処進退を問われるどころか、御庭番全員の運命にかかわってきそうな問題となった。

笹の間をさがって、藪田はもう一度相楽十平次の遺体を検視してみた。あざやかな斬り口で四肢が切断されている。いずれも一刀のもとに肉も骨も断っているのだ。

十平次は紀州家中でも使い手として知られていた。その男をまるで玩弄するように五つに切りはなした技は尋常とはいえぬ。世の中ひろしといえども、そう幾人もいないはずである。

しかも人をころすのにこのような異常なやり方をしたことに、事件の謎をとく鍵がかくされているような気がした。人々をおどろかす殺害方法をとって、世間の耳目をひきつけようとする意図があったのかもしれぬ。まるでみせしめのような形でころされたともかんがえられた。

藪田は若党の笠原三郎太をともなって、十平次が殺害された現場を仔細にあらためた。藪田の住居も桜田御用屋敷の御長屋である。御長屋から木戸をとおって、御殿の庭へ入った。

「どうして、相楽さんはこんなところでころされたのでしょう」

大男の三郎太がまずそういった。

藪田がはじめにいだいた疑問もそれであった。おなじ御用屋敷内とはいえ、御庭番が木戸のむこうの御殿の庭へ入っていくいわれはまずない。禁じられてはいないが、入っていくべき理由がない。

藪田が御殿の掃除番にたずねたところ、昨夜、御殿に異常なことは何もおこらなかった。御殿で何者かが助けをもとめたため、十平次が助けにむかったわけではなかった。

「三郎太、これは難問だ。ただ事ではないぞ」

事件の背後に巨大な問題がかくされている気がした。

「尾張藩はかかわりありませんでしょうか」

三郎太がきいた。

「あるやもしれぬ。が、今のところなんともいえぬ」

表面上はともかく、尾張、紀州両家は血みどろの暗闘をつづけてきた間柄だ。勝っ

た紀州家、すなわち今の将軍にたいする尾張家の仕返しがないとはいえぬ。しかも尾張家は御三家の中でも筆頭の地位にあり、禄高も高い。将軍位争奪戦の当初は、尾張家のほうが優位にたっていた。それを逆転されて、吉宗に名をなさしめた。尾張家側の悔しさは口にはできぬほど大きいにちがいないのだ。

吉宗の新政治にたいする反撃として、まず吉宗が新設した御庭番を血祭りにあげたともかんがえられる。だとすれば、事件はこれかぎりのものではない。今後もつぎつぎにおこる可能性がある。

藪田の前は濃い霧で埋めつくされている。この霧の中から藪田は手がかりを見つけていかなければならなかった。

三

藪田は日没を待った。

日が暮れて、宵闇がちかづいたころ、提灯もたずに御長屋をでた。

桜田御用屋敷は桜田門から日比谷門にいたる日比谷濠に面しており、長州藩毛利家と鍋島藩上屋敷にはさまれている。裏手は外桜田の大名小路で、その先は霞ヶ関。つまりこの一帯に大名屋敷が数多くあつまっている。

藪田は日比谷濠に面した道をぶらぶらとあるいていった。月はでているが、あたりは暗い。濠の水面は黒一色で、そのかなたは江戸城である。なにも見えぬ。

人通りもほとんどない。だいぶ先に上杉家の辻番所の明りがぼんやり見えるだけである。

音もきこえぬ。ときおり江戸城の森のほうから時鳥や筒鳥の鳴き声がきこえてくるだけだ。

藪田はときに卵色の月をながめながらあてどなくあるいた。生あたたかい風が濠の水面から吹いてくる。

十平次がころされたのも、こんな夜だった。時刻は宵であったか、夜中であったかわからない。藪田は十平次になったような気持であるきつづけた。藪田が夜あるきをはじめて今宵が三日目である。

（でてこい、曲者）

藪田は目に見えぬ敵にむかって胸中でつぶやき、井伊家の前を左へまがった。

ここも暗くて、長い道である。両側は井伊家と浅野家の塀が長々とつづいている。曲者があらわれてもおかしくない場所だ。

十平次が御庭番であるために、あるいは新直参であるがためにおそわれたのなら、藪田もおそわれてよいはずである。御庭番十七人のうちには頭領はいないが、藪田が

十七人を代表する組頭の立場にある。十平次以上に藪田はおそわれてもよいはずなのだ。

（曲者、相手をしてやる！）

藪田は前方の闇にむかって怒りをなげた。昼間は地道な探索をつづける一方、宵になると毎夜大名屋敷一帯を徘徊し、敵の姿をもとめている。つまり自分を囮にして敵の出現を待つ作戦である。

藪田は紀州藩時代から加納に目をかけられていた。御庭方をつとめるまでは、町廻横目、芸目付をやっていた。芸目付というのは、藩士たちの武芸修練の状況をさぐる役目であるから、当人は当然武芸に熟達していなければならぬ。御庭方をつとめていたころは、加納の密命をおびて、尾張藩との情報戦争に従事し、いくつかの手柄をあげた。年齢はいまだ三十代であるが、隠密としての経歴は百戦の強者といっていい。

前方の闇の中にすっくと佇立して見えるのは、井伊家の火ノ見櫓である。いざというとき、この半鐘が打ち鳴らされて急をつげる。

藪田は火ノ見櫓の下をとおって霞ヶ関にでた。ここは四辻で、ここからどの方角へいっても大名屋敷があつまっている。そのまま南の裏霞ヶ関へむかった。

（藪田助八がここにおるぞ、曲者を待っている）

そう声にだして呼ばわりたかった。

（いるならでてこい、掛かってこい！）

もしや闇の中にひそんで、藪田の挙動をじっと見まもっている曲者がいるかもしれぬ。

昨日も一昨日も、一刻以上御用屋敷の周辺をあるきまわった。が、曲者には遭遇しなかった。

今宵もどうやら会えそうにない。この囮作戦は実をむすびそうにないとかんがえはじめた。

裏霞ヶ関へでて、さらに潮見坂にいたり、外桜田をまわって、むなしく御用屋敷にもどってきた。屋敷の門をあけ、くぐろうとしたとたん、

「あっ」

といって、藪田はその場に立ちすくんだ。

屋敷内から疾風がおこって、黒い影が猛然と突進してきた。

しかも近距離からの突進だ。帰宅した瞬間の油断を見事についた敵のたくみな作戦である。藪田は防禦の方法がなかった。むろん攻撃も不可能だ。

窮余の一策で、藪田は瞬間的にその場から垂直に跳躍した。屋敷の門よりも高くとんだ。

そして空中で一刀を抜きはなっていた。見事に敵の先制攻撃はかわした。が、垂直

にとんでかわした場合、とび下りる瞬間が生死の境目である。
案の定、敵は数間先へはしりぬけ、一転逆もどりしてきて、真下で藪田を待ちうけていた。鍛えあげた術の持主だ。まともに着地をこころみれば、胴を薙ぎはらわれる。
藪田は空中で足をまるめて一回転して、飛びおりた。敵の横薙ぎの一刀をわずか紙一重の差でかわしていた。回転した時間だけ敵の攻撃に誤差を生じた。
藪田は着地と同時に、一刀をするどくふるった。
今度は敵がとんだ。黒い影が高々と空に舞いあがり、そのままおりてこなかった。
藪田は上を見あげた。
門の松の枝に黒い影が鳥のようにとまっていた。
「おぬし、忍者だな」
藪田は影にむかっていった。
「御庭番もなかなかやるではないか」
影は藪田の言葉を否定しなかった。
「伊賀か、甲賀か？」
「こたえるいわれはない。御庭番ご一同、命を大切にいたすことだ」
答のかわりに不敵な言葉がかえってきた。御庭番全員を敵にしようというのだ。
「何故、御庭番に恨みをいだく」

「恨みはないが、御庭番には全員死んでもらう」
「尾張の忍者か？」
松の枝の上と下とで問答がかわされた。が、最後の返事はなかった。
枝の間から黒い影はとつぜん身をひるがえした。数間はなれたとなりの松の太い枝にとびうつり、そこからふたたび空中高く飛翔し、毛利家の塀の外へ舞いおりた。
惚れぼれするような身のこなしと、術の正確さだ。
もう追っても、追いつく可能性はない。黒い影は地上をひくく、鳥が翔ぶように疾って桜田御門のほうへ消えた。
藪田はしばし見とれて、その場に立ちつくした。
（こんな忍者が、まだこの世にいるのか……）
驚愕のおもいで、影の消え去った闇の中を見つめた。今までいだいていた概念がつきやぶられた。
伊賀、甲賀の山岳地から発生した忍者が究極まできたえあげた肉体に精密な技を修得し、情報戦略や暗殺、後方攪乱などで、さかんに活躍したのは戦国期から元和、寛永のころのことである。徳川幕府のもとに天下泰平の世になるとともに、忍者の活躍の場はめっきりすくなくなった。伊賀者、甲賀者は幕府だけではなく、御三家以下の諸大名にも召しかかえられ、隠密役として重要な役目をはたしてきたが、世の推移に

したがい、このほうもすたれてきた。

かつて幕府の隠密役として活躍した伊賀者、甲賀者たちは今では江戸城諸門と大奥の門番として番衛をつとめるだけの退屈な役目に落ちぶれてしまった。今では役目の退屈さをのろう伊賀者、甲賀者すらめっきりすくなくなった。諸門の番衛ていどには、きたえあげた肉体も、精妙をきわめた技も必要ではなくなった。したがって、このごろではもう卓越した忍者はほとんど世にいなくなったと見られていたのである。

四

五日後の朝、藪田が本丸の詰所に出仕するとほとんど同時に、変報がもたらされた。詰所の中はその一報で騒然となった。

「柏平内がころされた」

そうつたえたのは雉子橋御用屋敷の御長屋で柏平内のとなりに住む春日井右京である。

柏家の軒下に昨夜おそくなって平内が飼いならした鳩がもどっていたのを、平内の妻女おこんが見つけたのであった。

平内は紀州藩御庭方から御庭番にとりたてられた後、尾張藩上屋敷の中間に召しかかえられ、同藩に潜入した。尾張藩の動静をさぐるために、もっとも危険な敵中に身をおいたのだ。

紀尾両家は激烈な暗闘をつづけてきた間柄である。将軍位争奪戦の決着はついたとはいえ、そのしこりがのこらぬはずはなかった。争いの種子は紀尾両家から幕府と尾張家との確執にうつされたといってもいい。

平内は尾張藩上屋敷の中間部屋にくらしながらひそかに鳩を飼っていた。鳩は鳥類のなかではいちじるしく帰巣本能が発達している。それを利用して、戦や情報伝達につかわれた例は昔からある。

おこんは鳩をしらべたが、平内からの伝達の文書はついていなかった。伝達文を書いて鳩にとりつける暇もなく、巣箱からはなつだけで平内はころされたものとかんがえられた。

「相楽についで、二人目だ」

加納は藪田だけを呼んでそういった。

「わたしもふくめて、おそわれたのは三人目でございます」

藪田は加納の言葉をそうあらためた。

「やったのは尾張の忍者か」

「忍者がおりますのは尾張藩だけではございません」

「左様、ほかにもおる。はやい話が、幕府にもおる。忍者の末裔が」

「その忍者の末裔でございます。今江戸城や大奥の門番をいたし、逼塞はいたしておりますが、ゆめゆめ油断はなりませぬ」

藪田は昨夜平内をころしたのは、尾張藩の刺客ではなく、幕府の伊賀者か甲賀者ではないかとかんがえていた。十平次を殺ったのも、藪田におそいかかってきた忍者も同様だとおもった。

「今は日がな一日門番ぐらしをしているが、あの者たちの父や祖父、曾祖父の中には忍者の名人、達人が幾人もいたことだろう。そして立派に幕府の隠密役もつとめていたのだ。あの者たちはまちがいなくその血筋をひいておる。その誇りももっているだろう。中には父や祖父たちの秘術を立派にうけついでいる者もいるかもしれぬ」

加納が藪田のいうべき言葉を察していってくれた。加納の言辞はなかなか老獪である。

「いかにも左様にございます。あの伊賀者、甲賀者たちはいつかふたたび門番から幕府の隠密役に復したいとねがっておるとききました。その運動が実際につづけられていることもわかりました」

藪田はこの数日間もっぱらその調査にあたっていたのである。

「たしかに幕府の伊賀者、甲賀者はそういう運動をひそかにずっとつづけておった。

前代、前々代の幕閣にもその案件がもちだされて、いくたびか老中たちで話し合われた記録も文書にのこっておった。伊賀者、甲賀者からのねがいが取りあげられたのだが、幕閣の中にもかの者たちの技と術を惜しむ者たちがいたのはたしかだ」

「けれども上様が紀州家から入りまして、かの者たちの望みはむなしくたち切られました。上様が御庭番をあらたにもうけ、幕府の隠密役に任じたからにほかなりません」

藪田は加納の言葉をついでいい、さらに十平次ごろし、平内ごろしの下手人についても遠まわしに答をだした。

「……」

加納は無言である。無言が加納の意志をあらわしている。

「伊賀者、甲賀者たちの怒りと恨みが御庭番にむけられたのはたしかです。しかも怒りや恨みばかりではありませぬ。あの者たちは御庭番をたおして、自分たちの力量をみとめさせようとしています。そしていつの日か、幕府の隠密役にかえり咲くことをねがっているのです」

藪田はそう言葉をつないだ。

伊賀者、甲賀者たちは本来の職場への復帰をこの数十年間ねがいつづけてきたことが、調査の結果わかってきた。綱吉、家宣、家継の時代にわたって継続してきた地道

な運動がここにきて断ち切られたのは事実である。これは伊賀者、甲賀者たちにとって恨んでもうらみきれることでなく、諦めようにもあきらめられることではなかった。

伊賀、甲賀の忍術にはおよそ三百年にわたる歴史があり、その旧先祖たちが切磋し、琢磨し合って完成させた術は精妙無類だ。後代の伊賀者、甲賀者にはその技と術を伝承し、さらに子孫たちへつたえていく使命があった。ところが四代将軍家綱のころから、伊賀者、甲賀者たちは伝来の秘術を発揮する場がなくなった。ということは自分たちの技をさらにみがき、子孫たちにつたえる機会がしだいにすくなくなってきた。今後の見通しも暗い。伊賀、甲賀の者たちは先祖から伝来した忍術の絶滅を予感して、隠密役への復帰をこころざしていたのである。

「悲願にもえる伊賀、甲賀者たちの前に立ちふさがり、望みを断ったのが御庭番だ。そういう筋道だったのだな」

加納はひくい抑揚のない声でいった。

「左様にござります。今後とも御庭番が幕府の隠密役にもちいられておりますかぎり、伊賀、甲賀者たちはわれわれを敵として、執拗に戦いをいどんでくるでしょう」

藪田はそうこたえたが、加納ならばすでにそれくらいの道理はわきまえているだろうと考えた。

「御庭番を廃止するかんがえは、上様にもわしにもない。ほかの役職は廃止したとしても、御庭番だけはそうはいかぬ。伊賀者、甲賀者たちに替えられぬ理由は、その方も存じておろう」

「存じております」

吉宗は将軍とはいえ、分家から本家へ入ったばかりの身である。将軍ながらも、新参である。旧来の本家の使用人たちよりも、自分がつれてきた子飼いのほうがずっと使いやすいわけである。ほかの役職はまだしも、将軍直属の秘密機関にだけは、子飼い家臣をおきたいのだ。

「御庭番と伊賀、甲賀の者たちとの戦いは今後もつづくとみなければならぬ」

「いたし方ありませぬ」

「こまったことだ。こんな争いに手をだせば火傷をいたすにきまっておる」

加納は不快な顔色を見せた。

いま吉宗の新政治ははじまったばかりだ。旧来の幕臣と新規直参との軋轢はつとめて避けなければいけない時期なのである。またそれを承知して、伊賀、甲賀者たちは御庭番に戦いをいどんできているとみたほうがいい。

「厄介な戦いでございます。むこうには一族の興廃と秘術伝承の使命をかけた大義名分がございます。こちらには新政治の屋台骨を裏と陰でささえる使命がございます。どちらもひくにひけませぬ」

「今後は、伊賀、甲賀者たちがねらわれるかもしれぬ。やられたらやり返すのが、武士本来の道理であろう」

加納は先を読んでいた。それで一層頭が痛いのであろう。

「……」

「いちばんはじめにもいったとおりだ。この一件、その方の力量でなるべくはやく埒をつけよ。手立はまかせる」

加納は窮余の策を藪田におしつけてきた。

「かしこまりましてござります」

藪田は命令をうけるしかなかった。

五

大手濠と桔梗濠とをわける大手橋の正面に大手門がいかめしくそびえている。いうまでもなく、大手門は江戸城の正門である。江戸城諸門のうちでももっとも厳重に警固されている。

すなわち大手門は十万石以上の譜代大名が勤仕し、番待十人がつねに肩衣を着し、平侍は羽織、袴で威儀をただしている。警固の武具は鉄砲三十挺、弓十張、長柄槍二十筋、持筒（小型の大砲）二挺、持弓二組をそろえるのがしきたりである。その上、甲賀百人組が大手三門に分属しており、つねに警戒をしている。

この大手門は元和六年（一六二〇）、伊達政宗が左右十三丁にわたる石塁と門の桝形石垣を工事した。それに要した人夫四十二万三千人、黄金二千六百八十枚といわれる。これがために雄藩伊達の台所がかたむいた。

炎暑灼熱のふりそそぐ中に、大手門は黒い門扉をあけている。このところ、江戸はただれるような猛暑がつづいて、雨が降らない。曇り空さえ見たことがない。

今日も、江戸の空は白熱して、一片の雨翳さえ見えぬ。往来をいく者は日蔭をえらんでも止めどなく汗がながれ、野良犬などは口をあけ、舌をたらしてあえぎながらあるいているのを見かける。

大手門で威儀をただす番侍たちの額も首筋も、腕も汗で濡れている。

天下は泰平で、江戸は繁昌をきわめている。幕府の威令は天下にいきわたり、江戸城にむけて叛旗をひるがえそうとする諸大名はこの百年以上絶えてない。

大手門の守りとはいっても、天下に敵はいない。肩衣や羽織、袴で威儀をただしている番士たちも、ほとんど敵を予想していない。警固は形式にながれているといってもいい。落雷や火事などのほか、大手門が危険に瀕したことは完成いらい一度もなかった。

しかも炎天の昼下りとあって、番士たちにも警戒心が失せているのは仕方がなかった。

そのとき、桔梗濠の柳並木に荷をつんだ大八車があらわれた。めずらしいことだ。荷は大根、茄子、蓮根、胡瓜、真桑瓜など畑でとれるものをつんでおり、農夫の父子が車をひいている。

江戸の近郊砂村は野菜栽培の地として知られ、江戸の人々の野菜類を供給している。夏などは朝はやく、野菜類をいっぱいに積んだ車をひいて、江戸に売りにくる。

大名屋敷や旗本屋敷などにも砂村の野菜売りはやってくるが、江戸城大手門へやってくることはない。はじめて江戸へ野菜を売りにきた車なのかもしれない。道にまよって場所もあろうに、大手門の前にでてしまったとしかかんがえられぬ。

けれども、それにしては大八車をひく農夫の父子はいやにおちついている。あわてる様子もなく、江戸城の濠の風景や大手門をのんびりながめながら車をひいている。

大手門の番士も大八車に気づいた。

身ぶりや手ぶりで番士たちは大八車を追いかえそうとした。

ところが、農夫の父子はそれにまったく気づかぬ様子だ。番士たちの身ぶり手ぶりをまるで自分たちへの挨拶とでも錯覚しているようである。三十代後半くらいの年ごろの父親のほうが手をふって番士たちにこたえた。息子は十二、三歳の子供だ。

それればかりではない。父子は大八車をひいて濠にかかる大手橋をわたりはじめた。

なんと、江戸城に野菜を売りにいくつもりのようだ。

「これっ、さがれ！」

「むこうへいけっ、お前たちのくるところではない」

番士たちがあわててさけんだ。

声はとどいているはずだが、父子は一向にあわてる気配がない。番士たちの制止にも頓着なく、そのまま車をすすめていった。

「くるなっ、くるなというのがわからんのか」

「これ以上ちか寄ると、たたっ斬るぞ！」

番士たちがさけびながら飛んできた。

これでようやく農夫父子は大八車をとめた。けれどももう大手橋の半分ほどきてしまった。

「今朝とれたばかりの地野菜をつんできたんで、お侍さんがた買ってくれんかね」

そういったのは、筒袖の野良着に草鞋をはいた百姓姿ながら、実際は藪田助八の変装である。

「馬鹿者っ、ここを何処とこころえる。江戸城の大手門だ！」

「野菜を売りにくるところではないっ、命のあるうちにさっさと消えろ」

番士たちは怒鳴りつけた。
「江戸城では野菜を買わんかね。安くまけてやるが」
藪田はあくまでもとぼけていった。
「こいつ、正気か」
「気がふれてるんだろう。今度だけはゆるしてやるから、すぐに立ちのけ」
番士がいったが、
「おら、いっぺんお城へ入ってみたかった。今日はいい折だから、門をとおしてもらうべ」
藪田はそういって、ふたたび大八車を前へすすめた。
「いい加減にしないか、性懲りのないやつめ」
そういうや、番士の一人が六尺棒をふるった。
六尺棒はまともに藪田の正面をおそった。あわや顔面を打たれるかと見えたとき、藪田はほんのすこしだけ、顔をそらした。これで六尺棒は空を切り、橋の欄干をしたたかにたたいた。
「お侍さん、あぶないことするでねえ」
そういったついでに藪田は体勢のくずれた番士の腰をぽんと蹴った。
「ああっ」

声をあげ、たまらず番士は前方へつんのめって欄干の足もとにひっくりかえった。
「この野郎っ、何をする。太いやつだ」
もう一人が今度は六尺棒で突いてきた。
藪田は一間ばかり飛びのいて、相手の体がながれた瞬間、六尺棒を素手でつかんだ。相手がおもいきり六尺棒を手前に引こうとしたとき、藪田が突きはなしたからたまらない。相手は自分の力がくわわって後ろへ尻餅をついた。
「乱暴するねえ」
簡単に二人をあしらって、藪田が大八車にもどろうとしたとき、大手門のほうからばらばらと十数人の者たちがとびだしてきた。羽織、袴に身をかためた者とそうでない男たちだ。勤仕にあたっている譜代大名の家来と大手三門に分属している甲賀者たちだ。甲賀者は大手三門をまもり、伊賀者は大奥をまもる。これが旧来のきまりである。
「曲者っ、神妙にしろ」
「不届者、そこへなおれ！」
みなは怒鳴りながら殺到してきた。
「もう逃げるわけにはいかねえ。これ、息子。ひとつ相手をすっか」
藪田は息子と顔を見合わしていった。助市といい、藪田の本当の息子である。紅顔

の助市はたのもしくうなずいた。

「肩衣や羽織、袴の者は適当にあしらえ。門番の甲賀者をきびしく痛めつけよ」

藪田はそういうなり、大八車の荷台から長さ三尺くらいの樫の根棒をとりだした。助市はそれよりややみじかい棍棒をとった。

十数人が一団となっておそいかかってきた。一同はそれぞれ一刀をぬきはなっていた。

藪田は臆せず、ふみこんだ。

「やっ」

と地をはらうがごとく棍棒をふると、正面の甲賀者が臑をかかえて仰むけにたおれた。

相手の向こう臑をしたたかはらったのだ。ついでもう一度低い位置から棍棒をふるった。

「うわっ」

悲鳴をあげて、もう一人の甲賀者も前のめりにたおれた。これも臑攻撃だ。臑の骨がくだけた。

四方から白刃がおそってきたが、ひょい、ひょいと藪田はたくみに身をかわした。その動作がいかにも軽快である。相手を翻弄するような身ごなしである。

助市も果敢に敵へむかっていった。相手の白刃にもおそれることなく、正面から棍棒をふるって攻めこんだ。

敵が子供とあなどる油断につけこんで、

「やあっ」

少年らしい気合とともにけれんなく打ちこんでいった。

相手は一撃で太刀を飛ばされた。

「やっ」

すかさず二の太刀をふるって、相手の面を真っ向から打ちすえた。

たまらず甲賀者は地にたおれ、苦悶を発した。少年ながら十分修練をつんでいる。

そのあいだに、藪田もさらに敵をたおしていた。甲賀者が斬りこんできた一刀をはずし、肩口を打ちすえると、相手はそのまま地にくずれおちていった。手ごたえからして、肩の骨がくだけていたのはたしかなようだ。

そのとき、大手門のほうにさけび声があがった。さらに十数人の者たちが殺到してくるのが見えた。

「長居は無用だ。あと一人たおせ」

藪田は助市にそう命じ、自分も最後の獲物をさがした。

恰好の者がいた。大兵肥満の甲賀者だ。かつてはこんな甲賀者は世にいなかった。

大兵肥満では技も術もつかえぬ。いるわけがなかった。こんなところにも、伊賀、甲賀者の没落と堕落がしめされていた。

そやつが勢いにまかせて白刃をかざし突進してきた。

藪田はあえてその前に全身をさらしていった。

白刃が唸りを生じておそってきた。

藪田はかるくかわした。

勢いこんでさらにかかってきた。

またかわし、もう一度さそって、斬りこんできたところを、力いっぱい眉間を打った。

眉間から血を一筋吹きあげて、大兵肥満の甲賀者は朽木がたおれるようにくずれ落ち、その場にのたうちまわった。

助市ははやくも、あと一人をたおしていた。

「いくぞ」

合図をして、父子とも脱兎のごとくその場を逃げた。

後ろも見ずに、大八車をのこして、二人ははしった。炎暑の日ざしが降りそそぐ中を辰之口へぬけ、さらに道三橋へむかってまっしぐらに駆けた。

追いすがってくる者が十数人はいたが、辰之口から道三橋のあいだでふり切った。

脚力でも門番の甲賀者たちはおとろえていた。

六

便意をもよおして、藪田は夜中に目ざめた。

助市と大手門荒しをやった五日後である。まだ暁までに半刻ほどあった。

厠へ立ち、しゃがんだ瞬間、

（……？）

藪田の脳裡をふっと不吉な影がかすめた。が、もう中断する状態ではなかった。

（ままよ）

藪田は行為をつづけた。

と……、またもや脳裡をかすめたものがある。しかもそれはすでに現実の音となり、気配となっていた。

気配は頭上からつたわってきた。すでに藪田よりも先にそこにひそんでいたといっていい。

「何用だ」

藪田はしずかに天井の来客に問うた。

「藪田どのに用があって、参上いたした」
待つまでもなく、天井から低い声が降ってきた。
「甲賀者か？」
「甲賀毘沙門天、というても知るまいが、甲賀最高の技量を身につけた者をいう称号がそれだ。当代の毘沙門天は望月道源が名乗っておる。その道源の使いだ」
答がかえってきた。が、その声の位置は微妙に変化していた。藪田の攻撃をさけて、曲者は天井の位置をすこしずつずらしているのだ。
「ぼつぼつくるころだろうとおもっていた」
「先だっては、大手門の甲賀者をたっぷり可愛がってもらった。御庭番の力量はたいしたものだ。しかし、甲賀者がみな先だってのような腰抜けばかりとはかぎらぬ。骨のある者が大勢はおらぬが、いくらかはおる」
「用件をいうてもらおう。いつまでもこうした恰好ではおれぬ」
天井板をはさんで上と下とで問答をつづけた。
藪田はしゃがんではいても、懐中に短刀と礫を用意している。これは常時かならず身につけているのだ。
「泥沼の中でいつまでも争っているのはおたがいになんの益もない。この際、頭領同士でけりをつけるのはいかが、と毘沙門天はいうておる」

「こちらが仕かけた戦ではない。まして益などもとめておらぬ」
「そうはいうても、今われらと御庭番とは争いの渦中だ。ほどよいところで決着をつけてはどうか」
「争いがおさまるのは結構なことだ。それでなくては御庭番は本来の仕事につけぬ。で、どうする」
「明後十五日子の刻（午前零時）、江戸城富士見櫓にて勝負をおこないたいと毘沙門天は申しておる」
「承知した」
「では、おこころ変わりあるな」
毘沙門天の使者は念をおして、厠の天井から退場していった。

六月十五日の朝があけた。
この日は江戸の武士、町人にとって、まったく特別な一日である。武士は前夜から丸一日外出を禁止されて家にとじこもり、町人たちは天下御免の祭りのにぎわいに興じる。それがために山王祭を〈天下祭り〉という。
産子の町は百六十余町。南は芝口、西は麹町、東は霊巌島、小網町、境町、北は神田にいたる江戸中心部のひろい領域にわたる。山車の番組四十五番。文字どおり天下

第一の祭礼である。

年番の町々では往来の道路をつくろい、小砂利をしきつめ、両側に籬をつくり、そこに高張提灯をならべ立て、各家々では軒に提灯をつるし、造花でかざり、幕をかける。町々で囃屋台をくみ、神楽、手踊りをもよおし、酒樽、菓子、蒸籠、魚の盤台、桶などを屋根よりも高く積みかざってその上に茶船、天満船などをのせ、造花でかざり、数百もの提灯を絢爛とともす騒ぎである。

山車は小屋をかけてその中にかざり、手踊りの屋台、地走りの手踊り、町内の娘たちは金棒引きのいでたち、地主家主たちは上布帷子をまとい、紗の袴に脇差をおび、花笠をかぶってでてくる。職人の親方たちは肌ぬぎの威勢で山車や手踊りの屋台などを警固する。山車の警固は第一に金棒引き、つぎに拍子木、さらに娘たちの男仕立ての金棒引き、ついで割竹引き、つぎに町内の若い者、地主家主、ついで手古舞、そろいの祭袢纏を着た鳶の者……といったにぎやかさだ。

暁のころから人々は祭り支度も十分に外にくりだし、山車をひきだし、威勢よく山下御門へむかう。将軍の上覧に供するために四十五台の山車が江戸城内へくりこむのである。一番、大伝馬町の諫鼓鶏、二番は南伝馬町の猿舞、三番、麹町の騎射人形……、と山車の順番は毎年きまっている。

山車の行列は延々長蛇をなして山下御門を入って、日比谷御門の濠端にそって桜田

御門前から霞ヶ関、番付坂をのぼる。山王権現社の前より右へむかい、永田町、梨の木坂をくだって、濠端をとおり、半蔵御門から江戸城内へくりこんでいく。昼餉は大体、半蔵御門の外でとる。

城内において将軍の上覧にあずかり、竹橋御門へむかう。そこから城外へでて、大手門前の酒井家、小笠原家にそって常盤橋御門をでるのである。

ともかくこの日一日、江戸は町人の天下となる。老若男女、江戸の町々は町人たちに占拠され、武士は屋敷の中に逼塞する。どうしても祭見物をしたい武士は装いを町人にやつして、町にでてくる。江戸中が町人色一色に塗りこめられる。町人たちはわがもの顔で往来をのしあるき、こわいものとてない。

さしもさかんににぎわった笛、太鼓、鼓なども宵がすぎ、夜がふかまるにつれて潮騒の遠いひびきのようになり、栄枯盛衰、ついにはおわりをつげる。

後には祭りのあとの異様なしずけさがはびこってくる。

そのころ……、

江戸城本丸、玄関前にそびえる富士見櫓の石垣上に、二つの影が対峙していた。

この櫓は本丸の東南隅にあり、八方正面のお櫓と呼ばれている。四方どの方角から見てもほぼおなじ形をしているからだ。明暦の大火で天守閣が焼けおちてからは、この櫓が天守閣のかわりをなしている。将軍が品川の海や両国の花火を眺めるときは、

富士見櫓に登るのである。

藪田は櫓の石垣の縁に立ち、すぐ背後には蓮池濠をひかえている。石垣は高く、濠の水面までは、深い。石垣上には大きな松が立ちならんでおり、昼間であれば、水面に松の緑と櫓の白壁がうつって見事な景観となる。

毘沙門天は忍装束に身をかためて、藪田の前方十余間の闇の中に立っている。おたがいの姿をみとめ合ったときが、勝負の開始だ。

両者はほとんど同時に疾走した。藪田は脇差をぬいて地をすべるように駆けた。前方からは、忍び刀をぬいた毘沙門天が地表すれすれを飛ぶ怪鳥のように疾走してきた。藪田は地を飛ぶ毘沙門天の足をねらった。

たちまち接近し、藪田は体をおもいきりひくく前傾させ、毘沙門天の体の下をはしりぬけた。はしりぬける瞬間、脇差をするどく一閃した。

が、一瞬の遅速で手ごたえはなかった。毘沙門天は交差する直前、ふわりと身を浮かし、怪鳥が飛び立つように空をとんだ。

毘沙門天の体はあたかも翼が生えたようである。そのまま高く飛翔し、富士見櫓の一層の屋根へ舞いあがった。じつにおどろくべき身の軽さと飛翔力だ。

それを追って藪田も高く跳躍し、一層の屋根へ飛びあがった。と同時に、毘沙門天は二層の屋根へ飛びうつっていた。

一層の屋根とはいえ、おそろしく高い。まして軒は石垣の外へ張りだしているので、真下はふかい濠の水面である。各階に敵が攻めのぼってきたときの石落しの石がつみあげてある。

藪田はさらに飛んだ。二層の屋根に飛びあがると時をおなじくして、毘沙門天は三層の屋根に飛びうつっていた。

藪田は呼吸もつがずに、毘沙門天を追い、三層の屋根へ飛んだ。

ついに、三層の大屋根上で二人は対峙した。両者のあいだには大棟がよこたわり、その両端には雄大な鯱が尾を空にはねあげてとまっている。

星はでているが、月は雲にかくれている。

二人の姿はほとんど闇の中に溶けているが、両者とも夜目をきかせて、相手の姿をみとめている。

屋根の勾配は急であるし、地上からはおそろしく高い。まして濠の水面となると千尋の谷のようだ。

今度は毘沙門天のほうが先に仕かけた。急勾配をものともせずに全速でおそってきた。忍び刀が一瞬、星明りに白くきらめいた。

藪田はからくも身をかわした。そして前方へ駆けあがった。藪田を追って毘沙門天も駆けあがってきた。毘沙門天は高所での勝負に自信があるようだ。

藪田はすかさず大棟から駆けくだっていった。ふたたび両者はほぼ中間地点で交錯した。鋼と鋼がはげしく打ち合う音と鉄の焼けるにおいがした。

藪田は三層の軒先まで駆けくだり、あやうくふみとどまった。

かわって毘沙門天が大棟へ駆けのぼった。

(……?)

けれどもどうしたわけか、そのとき毘沙門天の姿が視界から消えた。精いっぱい夜目をこらしたが、敵の姿は見えなくなった。

(おかしい……)

大棟からもし足をふみすべらしたとしたら、それらしい物音と気配がしたはずである。

藪田は軒先に立って、感覚をとぎすまし、毘沙門天の位置をさぐった。

が、わからぬ。本当に忽然と、毘沙門天は消えてしまった。視覚にも聴覚にもとらえることができぬ。

藪田のうちにややあせりが生まれた。冷汗が腋の下あたりに生じた。

藪田はなおも必死で見わたした。

屋根の上には一対の鯱が逆立っているだけだ。そのほかには何もない。

(鶉隠れ……)

そのときとっさにひらめいた。伊賀、甲賀の忍術の奥儀に〈鶉隠れ〉という秘伝がある。

藪田は一対の鯱に感覚を集中した。

本来、忍術は天地自然の現象、静と動、森羅万象への透徹した観察から出発する。袖でもって顔をかくし、手足をちぢめて石のようにうずくまる……。これが鶉隠れである。寒夜に霜を聞くように寂然と不動の姿勢をとりつづけると、本当に石に見えてくるというのである。

鶉隠れをやぶるには、それ以上の透徹した観察しかない。さもなくば、相手の不動の姿勢をくずすかである。

藪田は風向きをはかった。風のつよい夜ではなかったが、富士見櫓の大屋根となると、かなりの風がある。

藪田は西南に自分の位置をずらしていった。そして懐中から印籠をとりだし、蓋をとって大棟にむかって何度もふり撒いた。それは胡椒のうちでももっとも香辛性のつよい秘薬である。やがて、

(く、くくく……)

大棟の一方の先端で懸命にクシャミを我慢する呻き声がおこった。

クション!

我慢しきれずに一匹の鯱がクシャミを発したと同時に、背のトゲを逆立て、尾を捲きあげて鯱がおそってきた。

藪田は鯱にむかって脇差をおもいきり投じた。鯱の眉間に脇差はふかぶかと突き刺さった。が、鯱はそのまま勢いを駆って猛然とおそいかかってきた。

藪田は懸命に逃げた。軒先まで逃げたが、ふみとどまれずに、あっという間に二層の屋根へ転落していった。

二層の屋根でもふみこたえられず、さらに一層の屋根に落ち、勢いがついて空中へほうりだされた。あとは真っ逆さまに蓮池濠へむかって落下していった。

大きな水音がしじまの中におこった。

毘沙門天は三層の屋上で水音をきいて、安堵したようだ。いかなる不死身といえども櫓の上から濠へ落ちてたすかるはずがなかった。相討ちと察した毘沙門天はゆっくりくずおれていき、息をひきとった。

藪田はそのとき濠の石垣の松の枝にひっかかって、夜空の星をながめていた。

転落したとき、一層の石落しの石を濠に投じて、とっさの〈水遁の術〉をきめたのだ。

三月の風に散る

一

根岸六郎兵衛は、御台所御門の脇にある御庭番詰所をでて、中奥の〈笹の間〉へむかった。

かすかな緊張を根岸はおぼえていた。御庭番にとって〈笹の間〉はかくべつなところである。

御庭番は隠密御用をうけたまわるとき、御駕籠台の下に平伏して将軍か御側御用取次から命令をうける場合と、中奥〈笹の間〉に呼びだされる場合とある。

今朝、根岸は御側役某から、

「御側御用取次殿が笹の間にお呼びじゃ」

と命令をうけたのである。

根岸は御納戸口から中奥へすすんでいった。

いかなる用命がくだるのか想像することはできなかった。緊張とともに、期待感も

おぼえていた。

御庭番は新設の役職である。紀州藩主吉宗が将軍になった昨年こしらえた将軍直属の隠密機関だ。用命のないときは、吹上の宿直をし、内庭の巡察をつとめるいたって退屈な役職である。

根岸は根来流の武術をおさめ、腕におぼえがあるので、いくらかの功名心もあった。はやるこころをおさえて、根岸は中奥の大廊下をすすんだ。

大廊下のつきあたりは御側御用取次の部屋であり、右側のひっこんだところが御側衆の詰所である。

根岸はつきあたりを右へまわった廊下の正面にひかえた。廊下のむこうが五十畳座敷と呼ばれる〈笹の間〉なのである。

やがて、

「入れ」

ふとい声が襖のむこうからひびいた。

「ははっ」

こたえて根岸は襖をひらき、体を〈笹の間〉へすべりこませた。

さすがにひろい。この広さがあれば、周囲からぬすみ聴きされる心配はまずない。

周囲は壁と襖である。その中央に男が一人座している。

加納角兵衛久通、である。御側御用取次は君側第一の臣で、将軍を補佐する役目をもち、将軍と老中のあいだにたって諸事をとりあつかう。したがってその勢威は大きく、老中といえども一目おく。

加納は自分のすぐちかくまでくるよう根岸をまねいた。

根岸はするするとすすんで、加納の前に平伏した。

加納は根岸が面をあげるまで待ち、しばらく視線をそそいだ。

「根岸六郎兵衛、明日より、尾張名古屋へ潜入いたせ。尾張藩内部に将軍への異心がありや、なしや――。これをしっかりと見とどけてまいれ」

重大な命令がいきなり加納からくだった。

「うけたまわりました」

まずそうこたえてから、根岸は命令のおもみをずしりと肩に感じた。根岸の御庭番初仕事としては、厄介な任務であり、手ごわい相手である。それだけに、やり甲斐のある仕事である。

「尾張藩にはまた大きなしこりがのこっていよう。上様への異心があったとしても、あながち不思議ではなく、そのところの有無をしかと見きわめてきてもらいたい」

吉宗が八代将軍位につく前、紀州家と尾張家とのあいだで、水面下のはげしい将軍位争奪の戦いがくりひろげられた。

その経緯がいまだに尾をひいていると見るのは当然である。

「きっと見とどけてまいります」

こたえて根岸はもう一度平伏した。

「危険な仕事である。身辺に気をつけるよう」

「かしこまりましてございます」

「委細は藪田と相談いたすよう」

「承知つかまりました」

そうこたえて根岸は加納の前をさがった。

〈笹の間〉から廊下へでたとき、天井でことりと音がした。

瞬間、根岸の体を緊張感がはしった。根岸は立ちどまって、音がしたほうへ視線をそそいだ。

が……、場所は江戸城中奥の大廊下である。曲者のひそんでいるわけがなかった。どこよりもいちばん安全なはずの場所である。

根岸はおもいなおして大廊下をさがり、中奥をでた。

翌日。春まだあさい昼下り……。

日本橋通旅籠町の大店大丸呉服店の裏口を、根岸は旅商人の装いをこらしてでてきた。

御庭番が任務をおびて旅にでるときは、大丸呉服店の奥の一室で変装をこらし、路用を手にして裏口から大丸新道へでていくならわしである。

根岸は風呂敷包を背にかついで日本橋へむかい、東海道をめざした。

春とはいっても、寒明けから十日ばかりしかたっていない。まだ肌ざむい東風が背中に吹きつけてくる。

根岸はかつて紀州藩の敵国であった尾張藩名古屋についてかんがえながら足をはこんでいった。戦いにやぶれた尾張藩がただちに新将軍にたいして恭順したとはかんがえにくい。異心が渦まいていると想像するのはごくあたりまえだ。

高輪の大木戸から江戸をでて、品川、大森。

六郷から乗合にのって舟渡し。もう午後の日も西へかたむいたころだから、乗合の客はわずかだ。

対岸は川崎である。松並木のあいだに茅ぶき屋根の漁家がいくつかならんでいるのが見える。

ぎぎぎいっ、と棹さばきの音とともに舟は岸べの桟橋についた。

舟をおりた者から順に川原の道をすすんだ。

しばらくいくと、大師川原というところにでる。川崎大師へいたる道だが、にぎやかな道ではない。川原には枯れた芦や芒がのび放題につづいている。

人影はほとんどなくなった。

川原をあるきながら、根岸はそのとき、ふと足をとめた。

（……？）

枯れた芦原のなかに人のたおれているのが見えた。衣服から見ると、女である。

今ごろこんなところで昼寝をしている女もいないはずだ。だとすれば、行きだおれかもしれぬ。

根岸は芦原へ入っていった。

女がたおれているすこし後方に、松の木がある。

「どうしなさった、こんなところで、川原の風は冷えるよ」

根岸はそういってちかづいていった。

が、女は身うごきもしない。

女は顔だけ横にむけて俯せにころがっている。着物の裾からはみだした白い足がなまなましい。根岸は妙な気持をおぼえかけたくらいだ。

女は二十歳前後の、かなりの美形である。

「具合でもわるくしましたか」

もう一度いって、根岸は女の顔のほうへまわった。

女は返事もしないし、ぴくりともうごかない。

無頼者におそわれ失神しているのかもしれないとおもった。

根岸は女の額に手をあててみた。体のぬくもりはまだある。だが、いかにも呼吸がよわい。

根岸は胸の鼓動をたしかめようとして、女の体を仰むけにしかけた。

「ううん……」

女の口からかすかにくるしそうな呻きがもれた。

女の体が仰むけになったとたん、

「あっ……」

声をあげ、根岸はおもわず手をはなした。

女は胸を大きくひろげており、まぶしいばかりな白い乳房の隆起がまともに見えた。

外形からは想像できぬ豊満な乳房であった。

しかも死んだように目をとじていた女の眸がそのとき大きく見ひらかれ、根岸を見あげて、にこりとわらった。

根岸は動転して、その場に立ちすくんだ。

ゆたかな乳房が誇らしげにかすかに揺れた。

「どうしました？」

女はわらいながら問いかけた。

根岸はいっそう惑乱をおぼえていった。
何かいおうと根岸が口をうごかした。その瞬間、
シュッ
大気と風を切り裂くかわいた音がした。
「うっ……」
根岸は声をあげたが、ほとんど声にならなかった。つよい衝撃で根岸の首ががくんと後ろへそりかえった。その首の中央、喉笛に長さ一尺ほどもある吹き矢がつきたっていた。
吹き矢は正面の松の枝からとんできた。
根岸は両手で矢をにぎり、ぬきとろうとしたが激痛でできなかった。矢は喉から首の後ろへ突き抜けている。
松の枝から地上に飛びおりた人影が見えた。
(おのれっ……)
さけんだつもりだが、これも声にならなかった。苦痛が増すとともに、視界がうすらいでいった。視力が急速にうしなわれてきたのだ。
胸をひろげてたおれていた女はすばやくその場から姿を消した。
後には、亡骸になった根岸だけがのこった。

二

「尾張藩の忍者のしわざでございましょうか」
御庭番本庄三四郎がいったのにたいして、
「そうかもしれぬ。が、幕府内の者かもしれぬ」
藪田助八は暗然とした顔でこたえた。
道中奉行からの連絡があって、藪田と本庄は川崎の宿場役所に駆けつけたのである。
根岸の喉から後ろへ突きぬけた吹き矢が証拠物としてのこされていた。
やったのが尾張藩だとすると、事柄としては単純である。従来の暗闘の尾がひいているとかんがえればよい。
ところが、幕府内部に御庭番の敵がいるとすれば、厄介なことになる。
「幕府の伊賀、甲賀の者たちが……」
本庄も複雑な表情を見せていった。
「尾張藩の忍者が根岸のうごきを知っていたとはかんがえにくい。幕府の伊賀、甲賀の者たちなら、もしかすれば知る手立はあったかもしれぬ」
そういった藪田のなかに苦汁がじわじわとこみあげてきた。

御庭番新設の昨年、相楽十平次、柏平内の二人が甲賀者のためにころされた。そのときの記憶がよみがえってきた。

「やつらはまだ御庭番にたいする挑戦をつづけているのでしょうか」

「隠密役への復帰は伊賀者、甲賀者たちの悲願といえるだろう。悲願をはたすまで、やつらは挑戦をつづけるつもりだ。御庭番に勝って、自分たちのほうがすぐれていることを幕閣や世間にうったえようとしている」

「では、当分伊賀、甲賀の挑戦はつづきますね」

「そう見なくてはなるまい。厄介なことだが、挑戦をそのたびにしりぞけていかなければならぬ。根岸を殺ったのは、おそらく伊賀者か甲賀者のどちらかだろう」

憂悶を秘めた顔で藪田はいった。

本庄はしばし沈黙した。

沈黙のうちに憤りと闘志がこみあげてきたようだ。

「今度は誰がねらわれるかわかりませんね」

「そうだ。いつどこから魔の手がのびてくるやもしれぬ」

「こうしている今も……」

そういって本庄は周囲を見まわした。

枯れた芦の原をまだ肌につめたい東風が吹きぬけている。大師川原にはほとんど人

影はない。

二人は川崎の宿場役所から根岸がころされていた現場にきたのである。

「御庭番十七人が全員ねらわれている、と見たほうがいい」

「挑戦をされた以上、受けてやりましょう。伊賀者でも甲賀者でもやっつけてやりますよ」

本庄はややあつくなっていった。

「むこうもその気だ。逃げるわけにはいかぬ」

昨年にひきつづいてふたたび、藪田は戦いの決意をした。

枯れた芦が風の音をたてている。風の音をききながら藪田は覚悟をさだめた。

（目には目を……）

場合によっては、こちらから攻撃をしなければならぬとかんがえた。

この夜……。

藪田は二更から三更にうつるころ（夜中十一時前後）、桜田御用屋敷の中にある御長屋で眠りについた。

藪田は紀州藩御庭方のころから、夜着をもちいて寝たことがない。いつでもいかなる状況にでも対応できるよう、昼間の平常着のままで寝る。それが御庭番のこころえだと藪田はおもっている。

一刻（約二時間）ばかりたったころ、藪田はねむりながらなんとなく息ぐるしさをおぼえた。

（……？）

息ぐるしさとともに、体におもくるしさがくわわってきた。おもたいものを押しつけられているような感じになった。

（妙なことだ……）

と藪田はいぶかった。理由がよくわからない。

圧迫感はしだいにつよくなってきた。

藪田はそれを手で押しはらおうとした。

が、どうしたことか、手がうごかぬ。

反対の手をつかってみた。けれども、こちらの手もうごかない。

（こんなことがあってたまるか）

と何度もこころみたが、結果はおなじであった。右の手も左の手もうごかない。手ばかりでなく、足をうごかすこともできないのだ。

背をもたげようとしたが、これもできない。背中は夜具に張りついたままである。

藪田の体に冷汗がわいてきた。

（これが金縛りというやつだろうか）

と藪田はかんがえた。

ねむっていて金縛りにあうということは聞いたためしがあったが、自分の身におころうとはかんがえたこともなかった。

藪田は満身の力をこめてみた。けれども体はまったく自由がきかぬ。

何者かが呪縛をかけているのか、幻術をもちいているのかとうたがった。

藪田はこれまでこうした妖術めいたものに出会ったことがなかった。術ならば、かけた者がいるはずである。

（おのれっ！）

さけんだつもりだが、声にはならなかった。術は口にもかかっていたのだ。

藪田は生まれてはじめて、本当の恐怖感をおぼえた。今までに体験した恐怖は本当のそれではなかった。

今攻撃をしかけられたならば、反撃する余地がない。無抵抗なまま、敵の攻撃をうけるしかなかった。

（どうしよう）

必死に金縛りから脱出しようとこころみたが、効果はなかった。

そのとき、何者か音もなくちかづいてくる気配を察知した。とげとげしく、ひややかな殺気に似たものがちかくまでながれてきた。

藪田ははっきりと敵の存在を意識した。
敵はじわじわとせまってきた。
藪田は敵の存在を背で感じた。背中にぞくぞくとするものがつたわった。
敵は地の中からやってきたのか、床下を這ってちかづいてきた。
(伊賀者か、甲賀者か?)
忍者のつかう術には、幻術もあれば、妖術につうじるものもある。
かつて戦国期には、そういう忍術の達人がいくらでもいた。泰平の世の現在、彼等の子や孫、さらにその子孫たちの中にかつての名人、達人に匹敵する者がいたとしても不思議ではなかった。昨年、江戸城富士見櫓で雌雄をきそい合った甲賀毘沙門天などはその最たる例であろう。毘沙門天のほかにも、名人、達人はいるはずである。
殺気はますますちかづいてきた。
藪田はまず金縛りの術をやぶることからしなければならなかった。
敵は、藪田が寝ている部屋の床下に到達した。
あと数歩で藪田が寝ている真下にいたる。
床下にひそむ敵は根岸六郎兵衛を大師川原でおそってころした者と同一人物であろう。根岸につづいて自分も、おなじ敵にたおされるのだろうかと藪田はおもった。
ついに、敵は藪田の真下に到着した。そして、そこで息をひそめ、呼吸をととのえ

ているのがわかった。
(一、二……)
藪田も呼吸をかぞえた。
「やあっ!」
必死の念力をこめて、藪田は声をあげ、首をひねった。
藪田の首がうごいた。
今まで首があったところに、床下からほとんど直刀にちかい反りのすくない忍び刀が畳をやぶって、切っ先の五寸くらいが突きだされた。
藪田の念力が金縛りをやぶった。
身をひるがえすと同時に、藪田は夜具の横においた脇差をつかみとるなり、鞘をはらうよりもはやく、抜き身を畳にずぶりと突きおろしていた。
脇差はほとんど柄のあたりまで畳の下にもぐりこんだ。
手ごたえはわずかにあった。
脇差を抜きとるなり、ふたたび元の位置から一間ほど先にむかって突きおろした。
が、もう手ごたえはなかった。
藪田はすばやく、部屋の壁をつよく押した。すると壁全体がぐらりとうごいて、一間幅の戸口が外にむかってひらいた。壁は龕灯返しになっていた。

藪田はそこから庭へ身をひるがえした。
庭先の一角をかすめる黒い影が見えた。
藪田はそれを追って疾走した。
黒い影も翔ぶようにはしった。体のどこかを脇差でやられているはずだが、まるで鳥が地上すれすれを翔ぶように疾走していった。
黒い影は御用屋敷の塀を軽々とこえて、屋敷の外の闇の中に消えた。
外には、敵の伏兵がいるかもしれぬ。藪田は追跡をやめて、御長屋へもどった。
龕灯をたずさえてきて、床下にもぐってみると、藪田が脇差を突き刺したあたりに、点々と血の跡が見えた。

三

「伊賀、甲賀の者たちの執念はおそるべきものだ」
藪田が前夜襲撃をうけたことについて報告すると、加納はあらためてかんがえこんだ。
「異常なまでの執念と察しいたしまする。伊賀、甲賀の者たちは御庭番をみなごろしにするまでのはげしい執念に燃えているとみられます」

昨年、甲賀毘沙門天をたおしたことによって一応確執のけりをつけたつもりでいたのは、大いなるまちがいであった。毘沙門天をたおされたことによって御庭番にたいする敵意はいっそう燃えあがったとみていい。
「あくまでも御庭番にとってかわって、自分たちが幕府の隠密役をつとめようというつもりか」
加納はいささか暗然とした表情を見せた。
「左様でございましょう。自分たちのほかに、隠密役をつとめる者はいらぬというかんがえでございます」
「伊賀者、甲賀者を幕府に召しかかえて隠密役にしたのは、おそれおおくも権現様（家康）じゃ。権現様の亡き後、伊賀、甲賀者たちは隠密役を免じられて、門番や大奥番におちた。かの者たちにはおのれらが権現様の意を体しているという自負があるのかもしれぬ」
「左様でございましょう。でなければ将軍直属の役目に任ずる御庭番の命をとるまでのことはいたしますまい」
「いかにも大胆不敵な振舞じゃ、断じて、ゆるせぬ。おそれおおくも、御庭番十七家は吉宗公がじきじきに任じたまわれた。その御庭番の命をうかがう者は、上様に刃向うもおなじだ」

ふだんの加納らしくもなく、少々気色ばんだようすを見せた。

吉宗は将軍位についてからというもの、諸政を一新して、すべからく権現様の祖法にもどすべきことを新政の根幹にあげている。そして贅沢を廃して、質実剛健の幕府初世にならおうとしているにもかかわらず、御庭番を新設したことによって、とんだ戦いを幕府内部にもたらしたことになった。

幕臣たちの中には、吉宗が紀州藩からつれてきてあらたに幕臣にした者たちへの隔意があきらかにある。旧来の幕臣たちにすれば、吉宗さえも分家から本家に入りこんできた新参者だというかんがえがあるのだ。

「わたしどもにいたしますれば、お役目にしたがい任務をぬかりなくおこなうばかりでございます」

藪田は幕臣としての本論をのべた。

「左様、御庭番には御庭番の役目とつとめがある。それを今後ともおこたることなくつとめることだ」

現在、御庭番が直面しているもっとも火急な任務は、尾張藩の内偵である。この任務のために、根岸にかわる御庭番がすでに江戸をたって名古屋へむかった。

尾張藩をもっときびしく内偵しなければならぬ時期に、足もとで御庭番は伊賀、甲賀者の挑戦をうけたのである。

「今たいておきませぬと、将来手がつけられなくなる恐れもございます。攻撃をしりぞけるだけでなく、こちらから反撃していく必要もあるかと存じます」

藪田としては逆襲にでるについての諒解を得ておきたかった。

「反撃、逆襲、おおいにいたすがよかろう。弱みを見せたほうが負けだ。いためつけてやるとよい」

加納は少々荒っぽい返事をした。

「御庭番の面目にかけましても、伊賀、甲賀者におくれをとるわけにはまいりません」

そういって藪田は加納の前に手をついた。

加納の前をさがってから、藪田は本庄をともなって平河門へむかった。

平河門は江戸城三の丸の正門であるとともに大奥の通用門である。そのため、別名お局御門とも呼ばれている。

この平河門を入ると、正面に天神濠があり、右手は梅林坂である。

下梅林御門、上梅林御門をくぐって、御切手御門をくぐった。このあたりになると、大奥女中の姿がここかしこに見える。

正面が御広敷門、すなわち大奥の玄関口である。藪田と本庄はこの門をくぐった。

大奥御広敷までは役目によっては男でも出入りができるのである。御広敷は大奥の一

部に詰めている表役人の場所である。

御広敷門を入った右側に伊賀者と添番の詰所がある。

さらに大奥御玄関を入った中側に御錠口詰所とともに伊賀者と添番の詰所がある。

この二カ所に伊賀者たちは詰めて、大奥女中たちの風紀取締りをおこなっている。これが現在の伊賀者たちの職務である。

かつて隠密役として幕府をささえる陰のはたらきをしてきた伊賀者は今おちぶれて大奥女中たちの風紀の番人となっている。この姿を見れば、彼等が今の職場に満足せず、往時の隠密役としてふたたびはたらきたいとおもっていることが如実にわかる。

藪田は本庄とともに、まず御広敷門の右手の詰所をのぞいた。

詰所の中には、黒あるいは紺、灰色の無地の羽織、袴を着た伊賀者たちがおよそ二十人ばかりいかにも所在なげに詰めていた。床几にすわっている者もいれば、腰掛に腰をおろして朋輩たちと雑談をしている者もいる。さらに詰所の奥でぼんやりすごしている者が大勢いた。

これがかつて服部半蔵を頭領にいただいた伊賀の忍者のなれのはてだ。

ところが藪田と本庄が詰所の前に姿をあらわすと、すわと立ちあがったり、目をむいた伊賀者が数人あまりいた。

「拙者の姓名、役職をご存じの方々がおられるようだな」

藪田は詰所へむかっていった。

御庭番は秘密の役職であり、できてまだ一年の機関である。しかも仕事柄、御庭番の面々はつとめて人との交際をひかえている。藪田の面体を伊賀者たちの何人かが知っているのは、それなりの訳合があるからだ。

「何用あって御庭番の頭領がまいられたか」

伊賀者の一人が吠えるようにいった。

御庭番には組頭はあっても頭領といった地位はない。が、伊賀者たちは藪田を頭領と見なしているようだ。

「昨日、さる御用屋敷に曲者が侵入いたし、無体をはたらいた。役儀によってその詮議のためにまいった」

藪田はあえて正面から役儀をもちだした。

役儀をふりかざされた以上、伊賀者たちは藪田をこばむことはできなかった。かさねていうと、御庭番は将軍の直属機関だ。

「詮議なされたくば、好きになされよ」

反感をむきだしにして伊賀者の一人がこたえた。そのほかの全員が藪田と本庄に白い目をむけている。

藪田は伊賀者たちのむらがる詰所にちかづいていった。そして一人一人をねめるよ

うに見すえて詰所の中へ入っていった。
にらみかえしてくる伊賀者たちもいたが、さすがに手をだす者はいなかった。
「どいつもこいつも死んだような目をしているが、夜になると生き生きしてくるやつもいそうだな。体にあたらしい傷をうけている者はいないか。昨夜、畳ごしに拙者の脇差をうけた者はおらぬか」
そういって伊賀者たちに詮議の目をむけていった。
「小癪な。命を大切にしろよ。われわれを見くびると後悔いたすぞ」
小柄ながら気のつよそうな伊賀者が藪田にいった。
「昨日、桜田御用屋敷に侵入したばかりではない。川崎の大師川原において吹き矢で人をころしてもいる」
きめつけると、伊賀者たちは沈黙した。
しかしその沈黙はしばらくしかつづかなかった。
「詮議なさるは結構だが、勝手に濡れ衣をきせるのはやめてもらおう。人ごろし呼ばわりは御庭番といえどもゆるしてはおけぬ」
くだんの伊賀者がかみついてきた。
「濡れ衣かどうか、そのうちにわかるであろう。吹き矢などというものは尋常な者がつかう術ではあるまい」

藪田はいいながら詰所の奥まで入っていって伊賀者たちを仔細に検分した。
この中にはあいにく傷をうけている者はいないようだ。
「伊賀者が尋常な者でないというなら、御庭番とておなじではないか。目糞が鼻糞をわらうようなものだ」
くだんの伊賀者はなおも執拗にかみついた。
「お前たちが御庭番をうらむのは筋違いだ。伊賀、甲賀の者たちは御用の役にたたなくなったので、お役目をおろされたのだ。自分たちさえしっかりしておれば、御庭番に隠密役をとってかわられることはなかった」
藪田が手きびしくはねつけると、
「ほざくなっ、新参者めが」
べつの伊賀者が一歩前にでてきて、罵声をあびせた。
「新参であろうが、幕臣にかわらぬ。つまらぬことをいうな。新参者におとらぬ仕事をしてみせてはどうだ」
藪田はその伊賀者にいった。
「詮議はどうした。もうお手上げか」
さらにべつの伊賀者が愚弄していった。
「詮議はこれからもずっとつづけていく。まだ安心はいたすな」

藪田はぐいと睨みをくれて、この詰所をでていった。
そして本庄をともない大奥御玄関に入った。
つぎの目標は御玄関の奥の伊賀組詰所である。
「役儀によって少々検分をいたしたい。拙者、御庭番をつとめる藪田と申す」
藪田はここでもそういい、御錠口の前にある伊賀組詰所へむかった。
藪田の声がとどいたとみえ、ここでも詰所の伊賀者たちの中にはいきり立つ者がいた。
「ご一同、おしずかにねがいたい。これより少々詮議をいたしたい。昨日、体に手疵を負った者をさがしておる。ご一同の知り合いの中にもし昨日金創を負った者がいたらおしえてもらいたい。その者は昨夜、桜田御用屋敷に侵入いたした者であり、先日、川崎の大師川原で御庭番をおそってころした者だ」
藪田は約二十人ほど伊賀者がいる詰所にむかってしずかにいった。
詰所の中が騒然となった。
「ご検分なされるがよかろう。ご覧のとおり、ここには手負いの者はおらぬ。藪田殿、勘ちがいではあるまいか」
やや年輩の伊賀者がいった。
その者がいったとおり、詰所の中に手疵を負った伊賀者は見あたらなかった。

藪田と本庄は詰所の中を見まわった後、伊賀者たちのあからさまな非難の眼差しをうけてでていった。

四

春の月がおぼろにかすんでいる。
光も闇もともにやわらいで、万物が曖昧模糊と見える季節になった。風の音さえなぶるようにしずかである。
江戸城の濠端をいく影がある。平河門のほうから平河端をつたうように歩をすすめるのは、先だって伊賀組詰所において藪田に食ってかかった伊賀者笠置堪兵衛である。
堪兵衛の先祖は笠置の音丸という往時知られた伊賀の忍者であった。天正伊賀の乱を生きのびて徳川家につかえた。先祖たちはいくたびか勲功をたてた。
堪兵衛の体にもすぐれた忍者の血がながれ、かつての伊賀者の誇りがわずかにのこっている。それだけに大奥番におちぶれた現在の伊賀者の姿をなげく一人である。
堪兵衛の父も祖父も、伊賀者の隠密役復帰を悲願として死ぬまでその運動をつづけた。その一方で、昔、伊賀の国の地侍たちのあいだにつたわった特有の武術である忍術の修業も終世おこたらなかった。

堪兵衛はその祖父や父の薫陶をうけてそだったので、幼くして忍術の修業をはじめ、今では伊賀屈指の使い手になっていた。他流の武術とたたかっても遅れをとらぬ自信を持っていた。

〈御庭番なにするものぞ〉

の気概はつねにもっていた。だから、先日、藪田がいきなり伊賀詰所にあらわれて非礼な態度をとったことはゆるせないとおもっていた。いつか藪田と勝負する折があれば手合わせしたいとかんがえていた。

おぼろ月の光と霞のなかを堪兵衛はあるいていった。勤務がおわってから、所用をたしてのかえりである。

そのとき……堪兵衛より半丁ばかり後方の濠端の並木の陰に音もなく人影があらわれたが、彼はそれに気づかなかった。

その人影は月の光の中にでるとき、すばやく藍染めの布で頬かぶりをした。吉原がえりのあそび人がちょっと人目をはばかるようないでたちだ。

頬かむりの主こそ、藪田助八である。

藪田はこの数日、堪兵衛の行動をうかがっていた。堪兵衛が一人になるところをねらっていたのである。

今夜、ようやくその機会を見つけた。

しかも堪兵衛は尾行にまったく注意していなかった。よもやそんな危険が泰平の世にあるとはおもっていなかったのだ。

濠端の霞がゆるやかにながれ、並木の柳の枝がゆれた。微風が濠端をとおりぬけたのだ。

風とともに藪田は早足にかわった。

前方の堪兵衛の姿が見る見るうちにちかづいてきた。

堪兵衛はかんがえごとにふけるかのように黙然とあるいている。警戒の様子はまったくない。

霞が濠の水面からわきおこって、あたりにながれている。

ふたたび風が吹いてきた。

藪田は風とともに堪兵衛に追いついた。

その瞬間、堪兵衛は後ろをふりむいた。

「あ……」

藪田と顔を合わせたとき、堪兵衛がちいさな声をもらし、顔色をかえた。

藪田はなにもいわずにとおりこしていった。とおりすぎる瞬間、わずかに腰をひねった。

藪田は四、五間あるきつづけてから、手にした抜き身をゆっくりと鞘におさめた。

後方では、堪兵衛が声もたてずに地にくずれおちていた。あるきながらの抜き打ちの一撃で堪兵衛はたまらず絶命してしまった。

堪兵衛はそのままぴくりともうごかなくなった。

藪田は後ろをふりかえりもしないで、竹橋方面の闇に姿を消した。

墨堤の桜がひらいた。

春雨のあけた翌朝、はなやかな花見の人出が江戸のあちらこちらから隅田堤へむかっていった。

墨堤の桜は江戸の春の象徴である。墨堤に桜がひらいて、はじめて江戸は春爛漫の気分となる。

江戸に桜の名所は数々あるが、上野東叡山は霊地清浄の故をもって、山内の掟によって禁酒がさだめられており、花見につきものの酒が飲めない。王子飛鳥山の桜は古色はあって結構だが、江戸の中心からほど遠いため、帰途に日暮れてしまい、家にかえるころにはとっぷりと夜になる。道灌山は場所はちかくても、花の数がすくなく、さびしさがいなめない。

なんといっても花見は隅田堤にかぎるのである。ここならば隅田川の清流、船の便もよく、堤には客待ちの水茶屋がずらりとならび、川をわたれば浅草寺の賑わいがちかく、花見がえりの吉原もたのしめる。雅俗を兼ねたる名勝の花見場所だ。

昼もちかいころになると、墨堤のあちこちに毛氈がひろげられ、茣蓙がしかれ、宴がはじまった。はなやかなのは、踊り、浄瑠璃の師匠が弟子の娘たちを大勢ひきつれ、小袖幕といい、おのおの新調の目のさめるような羽織や小袖を花の木陰にかけならべて幔幕のかわりにして、その中でそろいの日傘、手拭をひろげ、重箱をひろげている光景である。

武士もいる。町人もいる。女房、娘たちもいる。文人、墨客たちもいる。花見の名所の随一である。

牛の御前の堤の一角には、今日非番の伊賀者たちが数人、茣蓙をしき、酒を入れた瓢箪、料理をつめた重箱をもち寄って、花見の宴をはじめていた。中には腰に矢立をさしてきた者もおり、画帖をひろげ、墨堤にひろがる絶景を写生している。

そのちかくでは、笛を吹き、鼓を鳴らしている一行もある。

なんともなごやかではなやかな花見の光景は、天下泰平、江戸繁昌をあますところなく象徴している。

かつて、伊賀、甲賀の山岳地で農耕のあいまに武芸や忍術の荒行や体の鍛錬に寸暇をおしみ、おたがいを切磋琢磨してきた忍者たちのこれが子孫たちとはおもわれぬ。

伊賀者たちは霞たなびく墨堤にひろがる桜をながめ、盃をくみかわし、料理をつつ

き合っている。彼等はすでに泰平になれきった大奥の番人たちだ。この伊賀者たちから往時の忍者をしのぶよすがもない。

大酒をくらって、大声でうたいわめく者もなければ、酔っぱらって女たちの毛氈へでかけていって悪さをしかける者もいない。きわめて行儀のよい連中だ。

駘蕩（たいとう）たる日ざしの中に笛の音がながれている。

その笛に合わせたような飄逸（ひょういつ）な足どりで、伊賀者たちの茣蓙ちかくにあらわれたひょっとこの面の道化者がいた。

尻っぱしょりに麻裏草履をひっかけた遊び人の風体である。

「ちょいとみなさまに申し上げまする。ヨヨイ、のヨイ」

ひょっとこ面は自分で合いの手を入れて、茣蓙に身を乗りだした。

「なんだい、ひょっとこさん。できることなら聞いてあげようじゃないか」

全員酒が入っており、中の一人が気軽に応じた。

「ちょいとみなさま、ヨイのヨイ。酒を一献いただきとうござる」

ひょっとこ面はもう尻を茣蓙におろしている。お面をつきだすようにして扇子で酒を飲む真似（まね）をした。

「なんだ、酒の無心か。ま、いいだろう。花見の宴だ」

体のいちばん大きな伊賀者がそういって、盃をさしだした。

「これはみなさま、有難き仕儀に存じまする。ヨヨイのヨイ、ヨイコのセ」

ひょっとこ面はうやうやしく盃をうけ、ふかぶかと腰を折った。

その盃に体の大きな伊賀者がなみなみと酒をついだ。

するとひょっとこ面はしばし、盃の酒をながめ、

「ちょいとみなさまに申しあげまする。ヨイ、ヨイ。この酒はくさくて、ちょいと飲めませぬ。きっと犬が飲む酒でござりましょ。ヨイのヨイ。人間が飲める酒をそそいでくださいな」

といって、盃の酒をさっとその場に捨てた。

「なにをいたす！」

さすがに伊賀者たちは顔色をかえた。

「こんな酒は飲めませぬ、ヨイヨイ」

ひょっとこ面はさらにいった。

「無礼なやつっ、もう一度酒をうけろ。さもなくば、面をとれ！」

体の大きな伊賀者は怒りたって声をあげた。

ひょっとこ面はおちつきはらって不敵に盃をだした。

その盃にふたたびなみなみと酒がつがれた。

伊賀者たちは全員、ひょっとこ面がどうするか見まもった。

「これは有難うござりまする。ヨヨイのヨイ」
ひょっとこ面は悠揚とうたうようにいい、盃を自分の顔にちかづけた。
「これまた大層くそうござる。とても飲めた酒ではござらん。ヨイのヨイ」
ひょっとこの鼻をつまむようにしていい、盃の酒をぱっと体の大きな伊賀者の顔にむかってぶちまけた。
「なにをいたすかっ、無礼者っ、もうゆるせぬ！」
その伊賀者は怒号を発して、茣蓙の上においた自分の太刀へ手をのばした。
「何者だっ、面体を見せろ！」
ほかの伊賀者たちもいきりたった。
こうなるとひょっとこ面の下の顔が一同は気になった。
「顔が見たくば見せてやろう。この顔を知っている者もあるだろう」
そういってひょっとこ面がお面をはずした。
「うぬっ、藪田……」
「藪田助八、よくも」
伊賀者たちはうめくような声を発した。
お面の下からあらわれたのは、まちがいなく藪田の顔である。
「おのれっ、ゆるさん！」

さけぶなり、体の大きな伊賀者は太刀をぬきはなった。
が、そう見えたのは間違いだった。ぬきはなつ途中で、大きな体が一瞬、静止した。そしてそのままうごきをうしなった。
伊賀者がぬきはなつよりもはやく、藪田はやや腰を浮かすようにして、尻に差していたスリコギをぬくなり、伊賀者の胸の下をぐいとついたのだ。
「うう……」
ひくい呻き声をあげるとともに、伊賀者の顔色が土気色に変じ、大きな体がどっと前のめりにたおれた。
宴の場が騒動にかわった。
「藪田、やったな！」
「取りおさえろっ」
伊賀者たちはいきりたったが、藪田のあまりにすごい手並みに呆気にとられ、怖じ気づいていた。
「死んではいない。しばらくすれば息を吹きかえすだろう。これは大師川原の返礼だ」
そういうなり、藪田はひょっとこの面をふたたびかぶった。
「伊賀者どもの頭領につたえておけ。藪田助八が相手をいたす。いつ何時でも結構だ。

勝負して、決着をつけるとな」

藪田はいいおわったときは、もう花見の酔客よろしく、墨堤のほうへ千鳥足をはこんでいた。

五

江戸城吹上——。

幕府創設のころ、吹上には尾張、紀州、水戸の御三家をはじめ、親藩、譜代の有力大名の屋敷がたちならんでおり、江戸城本丸、西の丸らを西側からまもる役割をもっていた。

けれども明暦の大火以後、火災防止の見地から一切の大名屋敷を徹去して、約十三万坪におよぶ広大な庭園とした。いわば巨大な火除地といえる。

太古のころは、草ぶかい武蔵野の突端に位置し、原住民が住んでいた。江戸氏の時代には、その居館は今の本丸の地につくられ、吹上はその外縁の防禦地であった。また太田道灌の時代においては、〈かがまの場〉すなわち伏兵をかくしておく場所であった。

吹上の西に半蔵門があって、往時は服部半蔵にひきいられた伊賀者たちが、この江

戸城西側の門をかためていた。半蔵門外、麴町の中ほどに服部半蔵の屋敷はあり、紀尾井坂の井伊邸のあるあたりはかつて半蔵山と呼ばれていた。これらは伊賀者たちがかがやけるはたらきをしていたころのことである……。

そして今、江戸城吹上の庭には三月のつよい風が吹いている。

その風が吹上に土埃を巻きあげている。土埃のために本丸や西の丸の石垣や櫓がかすんで見えなくなるときがあるほどだ。

落日がちかづいても、風はやまなかった。

夕日が半蔵門のかなたにしずんだとき、一人の男の姿が吹上の庭の一角にあらわれた。

黒っぽい地味な羽織と袴に、飾りの一切ない武骨な造りの大小を差している。体つきは中肉中背、年ごろは三十代。外形的にはきわだった特徴のない男だ。

藪田助八。彼が御庭番として吹上の巡察や宿直につくときの姿である。

だが、今日、藪田は吹上の巡察や宿直のためにきたのではなかった。

百地日向、という伊賀者の組頭から挑戦状をうけて、約束の刻限にここに姿をあらわしたのだ。正確にいうならば、先日藪田が隅田堤で伊賀者たちに発した挑戦にこたえて、百地日向が返書をおくりつけてきたのであった。

約束の刻限は、日没時である。

場所は吹上。そのほかについては条件をしるしていなかった。人数のさだめもない。それで藪田は一人できたのだ。

おたがいの姿を発見したときが、勝負の開始である。

吹上はいわば御庭番の職場である。そこをあえて決闘の場にえらんだ百地日向の度胸と自信は見上げたものだ。けれどもかつては、半蔵門へつづく吹上は伊賀者たちの守備するところであった。あながち伊賀者に無縁の場所ではないのである。

藪田はあえて姿をかくすことなく、吹上への御門から庭にあらわれた。

吹上には吹上奉行をはじめとして、吹上添奉行、役人目付、御庭入口番……などの役人がついているが、日没のころには少数の入口番や御庭番をのぞいてほとんどひきあげる。

藪田は相手のいかなる攻撃にも対応する覚悟で庭の中に歩をすすめた。

中は巨大な庭園であり、その内部に騎射馬場や鉄砲場、的場がある。樹木や植込み、池、石組、築山などが無数に配置されている。隅から隅まであるくだけでもかなりの時間がかかる。

藪田は四方に注意をくばって一歩一歩ゆっくりすすんだ。

日没の夕闇がせまっているが、吹上の中は十分あかるい。まだあかるいうちに藪田は勝負を決したかった。文句のないけりをつけたいとおもった。

百地日向はどこにひそんでいるのかわからぬ。まともに姿をあらわしてくるとはかんがえられなかった。

土埃が舞い、風が音をたてている。

五感を研ぎすまし、藪田は足をはこんだ。

鶯、ひばり、駒鳥などの鳴き声がきこえる。池からはときに蛙の声もきこえる。

百地の姿はまだ見えぬ。

藪田はあるきつづけた。

夕闇がしだいに濃くなってきた。

前方に人影が見えた。が、一目で御庭入口番だとわかった。むこうに二の御門がある。

御庭入口番も藪田をみとめても、なんら注意を呼びおこされなかったようだ。

藪田はそのままあるきつづけた。

が、その藪田にむかって、くだんの御庭入口番がとつじょ猛然と突進してきた。しかも手に一尺余寸の忍び刀をにぎっている。

藪田は気づくのが数瞬おくれた。

ふりむいたとき、もう御庭入口番は目前にせまっていた。

瞬時のうちに藪田は真横に飛んで植込みの陰に身をよけた。

忍び刀が植込みのもっとも太い一の枝をすっぱりと切りおとしていた。
今度は藪田が植込みの陰からおどりでた。
無言で相手の両膝めがけて太刀を一閃した。
入口番の両膝を切りはらったとおぼえたが、それは錯覚だった。
入口番はほとんど垂直に高々と跳躍していた。しかもそのままおりてこなかった。
藪田が見上げると入口番はちかくの松の高い枝に鳥のようにとまっていた。
「百地日向だな」
はじめて声をかけると、
「いかにも左様、藪田なかなかやるな」
百地は地上にむかってこたえた。
そして百地は両手で木をゆすった。すると、ぱらぱらと松葉がおち、藪田の上にも雨が降るように降りかかってきた。しかも一本一本の松葉がするどい針になっている。無数の吹き針がおそってきたのにほかならぬ。
「伊賀忍法〈松葉しぐれ〉だ」
百地の声が降ってきた。
藪田は扇子をとりだし、扇面をひらき、頭上にかざしながら逃げた。
それでも避けきれずに腕や手の甲につきささった松葉の跡から血が吹きだしていた。

藪田は今度は反撃にでた。ひらいた扇の骨を一本とるなり、
「やっ」
松の枝の百地へむかって投じた。扇子の骨は一本一本がすべて手裏剣になっていた。
「やっ、やっ、やっ……」
藪田はつづけざまに手裏剣を投じた。
百地はついに避けきれなくなって、松の枝から飛びおりた。そして、手の甲と腕にはめた鋼の手甲、腕当で手裏剣をたたきおとしていった。
ことごとく藪田が手裏剣を打ちおわった瞬後、百地がふたたび風を巻いて突進してきた。
その風と、土埃と、砂の目つぶしが藪田をおそった。地を這うように、地から吹雪が舞うごとく、風と土埃と砂が藪田の顔面にはげしく吹きつけた。
「うっ……」
藪田は顔を両手でおおったが、両目に焼けるような痛みがはしった。
「伊賀忍法〈砂吹雪〉。目が見えまい」
勝ちほこったように百地が声をあげた。
本当に目が見えぬ。目をあけようとすると激痛がはしった。
藪田は窮地におちいった。窮余の策で身をころがし、大きな植込みの下にもぐりこ

んだ。

すでに夕闇が一帯にひろがり、植込みの中の藪田の姿をかくしてくれた。

藪田が腰の印籠から白い粉末をとりだし、両目にこすりつけた。どくだみの地下茎から採った毒消し薬である。

しばらくするうちに、目がしだいにあいてきた。

そのとき、殺気を感じて、藪田は本能的に植込みの下から反対側にころがりでた。

目はようやくひらいたが、まだ視力はさだかでない。周囲が薄ら闇にかすんでぼんやりとしか見えぬ。

どこに百地がいるのかわからなかった。しかしすぐちかくから殺気がせまってきた。

あたりを凝視したが、敵の姿が見えぬ。

柘植の木が一本いちばんちかくに見えた。

「やあっ！」

藪田は身を高くおどらせ、空中で太刀をふりかぶり、渾身の力で振りおろした。

柘植の太い枝がほぼ中央から切りおとされた。そのとき、藪田は人間のかすかな悲鳴をきいていた。

地におちた枝はなんと、人の腕であった。

「やあっ」

もう一度、藪田は身をおどらせ、柘植の頭の枝を切りはなした。

「ぎゃあっ」

化物のような絶叫がきこえた。

と同時に、人間の生首が地におちてころがった。百地日向の首であった。

吹上には、つよい風がまだ吹きやまなかった。

決闘増上寺

一

灼熱の太陽がようやくしずみかけた。

西の空にはけんらんたる夕焼けが燃えている。あたかも空を焼きつくすがごとくである。

このところ酷暑がつづいている。雨はもうずっと降っていない。六月を水無月というのは、雨降りがたく水なし月という意味なのであろう。

真夏の夕暮れはながく、夕焼けがしずまるのとほとんど同時に、水浅黄色の空に卵色のややにごった月がのぼって来た。この時期の月は暑熱や人々の息吹きでにごった色をしている。あたりはまだ昼間の暑さのほてりがのこっているのだ。

そのころ、江戸城雉子橋門外にある御用屋敷の組屋敷の一角に、提灯の明りがいくつもともりだした。

今夕、雉子橋御用屋敷の組屋敷の門前に白い幔幕が張られ、門前、玄関、台所口に

紋付の提灯がいくつも燭をつらねて配置されている。しかもふだんめったに人の出入りなど見えぬ御用屋敷に、紋付小袖に袴を着けた武士やその家族の者たちが出たり入ったりしていた。御庭番春日井右京の婚儀がこれからおこなわれるのだ。平生は閑寂なうえにもしずかな御用屋敷の門前が、今夕はめずらしくにぎわいを見せている。

武家の婚儀は、ほとんど夕方から宵にかけておこなわれるものだ。

酉の刻（夕方六時）をかなりまわったころ、花嫁の輿を先頭にした輿入の行列がにぎにぎしく組屋敷の門前に到着した。この輿は虎ノ門御用屋敷からここにやってきた。御庭番は極秘を要する仕事にたずさわる者であるから、同役のうちでしか縁組をむすべないのである。

花嫁は虎ノ門御用屋敷に住む原田左馬助の娘おつゆである。長持、箪笥、挟箱などとともに新婦の両親原田左馬助夫婦やその家族、親類などが春日井家に入った。組屋敷であるからそうひろいわけはなく、たちまち家の中はいっぱいになった。

婚儀の式は座敷でおこなわれる。婿の右京が紋服裃の姿で上座につき、花嫁おつゆは白綾の小袖に綿帽子をふかくかぶって下座についた。飾り餅をのせた三方を床の間におき、松竹梅、鶴亀をあしらった飾り膳をすえている。

燭台の明りがきらびやかにかがやく中で、式三献がおこなわれ、さらに瓶子の役、三三九度の盃がかわされた。

婚儀は進行して、色直しの式にうつり、花嫁は白綾の小袖から紀の小袖にあらためて席についた。婿の右京は原田家から贈られた小袖、帯、扇などを身に着けて盃をかわし合い、これでいちおう婚儀は終了した。

ひと息ついたあと、花嫁は婚礼の座敷を出て、別室に用意された寝所へ向かった。なにぶんにも組屋敷は手狭であるので、一軒だけではことたりず、同棟の隣家に寝所を用意していた。隣家は同役柏平内の家であるが、平内は昨年の夏、職務上死をとげており、空屋敷になっていたのだ。

右京も花嫁の待つ寝所へ向かうべく、自分の家を出た。そのとき、門前にたむろしていた人々の中から町人ふうの男が、右京に近づいてきた。

「春日井家の若主人さま、大変おめでとうございました。わたしは先代ご主人さまにたいそうご面倒を見ていただいた者でございます」

男は愛想よく腰をかがめて挨拶をしてきた。

右京の父親は紀州家で御庭方をつとめており、三年前に病死し、それ以後右京が家督を継いでいたのである。紀州家御庭方といっても江戸屋敷詰めであったから、右京が育ったのは江戸であった。

「本日からわたし同様、家内もよろしくたのむ」

右京も辞儀をしてそう言った。

「ところで若主人さま、お取りこみのところですが、一言お耳に入れておきたいことがございます。お手間は取らせません。ちょっとそこまでお付き合いねがえませんか」

男は右京の手を取らんばかりにして言った。

そのころ、寝所の中では、もうおつゆが花嫁衣装から白無垢の夜着に着がえて、花婿を待っていた。

部屋は八畳間で、屏風が立てまわされ、その向こうに仕立て下ろしの夜具が敷きつめられている。それに真新しい枕が二つならべ置かれているのが枕元の行灯の明りに燦然と浮かびあがっていて、おつゆは正視しがたい羞恥をおぼえていた。

式三献からはじまる婚儀の式をおつゆは無我夢中のうちにつとめてきたが、これから行なわれる〈合歓の事〉を前にして、にわかに乙女のはじらいにせまられたのである。白い夜着につつまれた体が熱くほてり、気持がうわの空になりかけた。昨夜、実家の母に見せられた男女合歓の十二枚の絵がおつゆの脳裡を駆けめぐりだした。

およそ人間の男女がおこなう行為、姿態とも思えなかった。驚異、羞恥、さらに嫌悪の情がおつゆのうちに込みあげていた。

(いったい、人間はみな祝言を上げると、あのような獣じみた振舞をおこなうのだろうか……)

父も母も、嫁いだ姉もあのような振舞を平気でおこなっているのだろうか。世間のほかの夫婦もみなあんな恥知らずなことをやるのだろうか。おつゆは信じられない気持であった。生まれて十七年間のおつゆの概念のなかには、とても入ってくる余地のない行為であった。

右京が寝所に入ってくるのを待つあいだ、おつゆはおもいつめて、何度か頭の中が空白になりかけた。かといって、寝所を逃げ出して行く気持はなかった。驚異や羞恥、嫌悪の気持のなかにもいくらかの興味と好奇心とがまじっていた。

そのとき、かすかに人の気配をおぼえ、おつゆは身をかたくした。

「やあ、待たせてすまなかった」

わりあいにおちついた右京の声がして、行灯の明りが半分くらいの明るさに落ちた。右京が行灯の芯を小さくしたのだ。

おつゆは男の声を聞くなり、体がかたくなり、頭の中が熱くなっていた。

「ふつつかではございますが、今後よろしくお願い申しあげます」

おつゆは辞儀をしながら夢中で言った。

右京が行灯の明りを落としてくれたのがさいわいであった。とても右京を正視することはできなかった。男の顔がよく見えないのがせめてもおつゆの気持にいくらかの余裕をのこした。

「さあ、こちらに」

右京がおつゆを夜具にまねいた。右京はすでに夜着に着替えているようだ。

（はい）

と答えたが、言葉にはならなかった。おつゆはおずおずと膝をすすめた。ひと膝ひと膝に死ぬほどの勇気を要した。体中ががたがたとふるえていた。

「おつゆ、おいで」

男の声はおちついていた。態度もゆったりとしている。

おつゆの脳裡をもう一度、昨夜の男女の秘図がよぎった。

夜具の上にすわっている男の姿がぼおっと映じた。とてもこまかい観察をおこなう気持の余裕はなかった。

「わたしにまかしてくれ。おつゆは、言われたとおりにすればいい」

右京は嚙んでふくめるように言った。

おつゆはかすかにうなずいた。

おつゆの手が男に取られた。そして引き寄せられた。

男の両腕の中に抱かれたとき、おつゆはもう目を閉じていた。とても目を開けてはいられなかった。男の顔を正視できなかったし、自分のはずかしい姿態から目をはなしたかったのだ。

かかえこまれて、夜具の上に横たえられた。夜着の両衿を左右にひらかれた。

「いや……」

おもわず声をあげて、身をよじろうとしたが、もう体が動かなくなっていた。男の体がおつゆの上におおいかぶさってきていた。

男がおつゆの胸の上に顔をうずめてきた。

乳房をやわやわと両手で揉まれた、と思った刹那、体が火を発するように熱くなった。はずかしい男女の図柄がもう一度脳裡に浮かんだ。

つぎの瞬間、おつゆは乳首をくわえられていた。なんといえばよいのか、つうんと妙な感覚が背筋から脳天へ走り抜けた。

二度、三度おなじような感覚がつづいた。その感覚の中には嫌悪感や恐怖感だけではないものが、わずかにあった。

男は乳を吸いつづけた。そしていつの間にか、おつゆの体を二つに割っていた。

(いやだ)

と思ったが、もう自分の意志では体が動かなくなっていた。男の意志にあらがうことができなかった。夜着の裾がまくられ、太腿の上まであらわにされていた。

半ば以上あきらめの心境にあった。

が、ほんのわずかだがおつゆは違和感をいだいていた。男の態度や振舞の中から今

までのいたわりが消えたように思えた。

いちばんはずかしいところに男の手が伸びてきた。その指が秘所に触れまわった。腰をよじったが、男の手から逃れることはできなかった。

足を大きくひろげられた。おつゆにとって死にたくなるほど屈辱的な姿であった。

(どうしてこんなことをしなければならないのか)

とおもったが、さらに男の腰が股間に入りこんできた。

おもい圧迫感がおつゆを襲った。男の行為にはおもいやりが感じられなかった。

おつゆの心中にわずかな疑いがめばえていた。が、その疑いを吹き飛ばすような激痛が襲ってきた。

「ううううっ……」

おつゆは必死で激痛に耐えた。激痛は継続的に襲ってきた。

激痛の中で、おつゆはふたたび不審をいだいていた。

(別人ではないか……?)

という思いにとらえられたのだ。

二

前日、祝言でにぎわった雉子橋御用屋敷に、今朝、異常な事件がおこった。

真夏の朝ははやく明けたが、日がだいぶ高くなっても、隣家の寝所から花嫁、花婿が起きてこなかった。物音も聞えないのをいぶかって、春日井家の若党佐兵衛という者が様子を見にいき、戻ってきて異常を告げた。

「大変でございます。おつゆさまが懐剣で喉をお突きになってご自害をなさっております。右京さまは寝所にはいらっしゃいませんでした。とてもむごい有様でございます」

佐兵衛は血相を変え、唇をふるわせて訴えた。

組屋敷に泊まり込んでいた春日井家の親類の者たちは、とてもすぐには信じられなかった。ともかく佐兵衛にみちびかれて親類の数人が隣家へ出かけて行って、惨劇の場にのぞんだ。

おつゆは白い夜着を着たまま屏風の向こうに、うち伏すようにたおれていた。両手に血に濡れた懐剣をにぎりしめ、大量の血を畳に流していた。夜具はきちんとたたんで部屋の隅に置かれている。遺書はちかくに見えなかったが、覚悟の自害であることはあきらかである。祝言初夜での自害とはあまりに無残であるが、顔を畳に押しつけるように息たえているため、死に顔があからさまに見えぬのがせめてものすくいだった。

親類の者たちはすぐには声もでず、その場に立ちすくんだ。初夜の相手の右京の姿が見えぬのも異常である。

右京の叔父夫婦と姉夫婦、甥などが家の中をいちおうしらべまわった。

「妙な紙切れが玄関の式台に落ちていました」

そう言って右京の甥九八郎が二つ折りの書面を持ってきた。

一同がそれに見入った。

〈花嫁賞味つかまつり候　こう〉

書面には筆でそうはしり書きされている。

親類一同は二重の怒りが入りまじった顔を見合わせた。ここでもすぐに言葉を発する者はいなかった。

文字の意味はすぐに通じた。花嫁本人と花婿にとってはあまりにも屈辱的で非礼に満ちた文字である。おつゆが自害するにいたった理由がこれによって明瞭となった。

しかし、祝言の初夜で、どうしてこのような事態となったのかは理解しがたい。

「右京はいったいどうしたんだ。今どこにいるのだ」

叔父の九左衛門が息苦しそうに言った。

叔父が口にするまでもなく、右京の不在と行動は謎だ。

「文末のこうは署名であろうか。これだけではわからぬ」

九八郎が書面に見入ったままで言った。

「これが右京に宛てたものだとするならば、右京にはわかるのであろう」

九左衛門が応じた。

「こうとは人名を表わすものと考えられますが」

九八郎は思案したが、それ以上の推量は困難であった。

「ともかく、組頭どのに報告をいたすのが筋道であろう」

九左衛門も思案してそう言った。

九左衛門は今でも紀州藩士である。幕府新設の御庭番組頭が藪田助八であることを知っている。

九左衛門は、

「この場には一指も触れぬよう」

と言い、九八郎をともない、藪田助八に面会をするため、江戸城本丸の詰所へ向かった。

この夜。

清水門御用屋敷の中にある御庭番組屋敷にも、春日井家の一件はひそかに洩れつたわった。祝言初夜に花嫁が凌辱を受けて自害し、花婿が失踪するという事件はあまりに猟奇的で、異常であった。秘密を重んじる御庭番の中でも人から人へひそかにひろがっていった。

御庭番森下権六郎の屋敷では、権六郎が任務によって遠国へ旅立っており、留守宅は妻女の美絵がまもっていた。権六郎と美絵とのあいだには四歳の長女と二歳の長男がいる。美絵は権六郎が紀州藩士のころから美人妻として、まわりで評判になっていた。女としては中肉中背で、色白、細面、目は切れ長、物腰のやさしい若女房である。

夫が留守がちなのには、権六郎が紀州家御庭方のころから慣れている。御庭方もいわば隠密役である。藩主吉宗に直属して、家中や外部の探索に従事していた。家を空ける夜も多く、夜更や暁に帰宅することも稀ではなかった。

だから美絵は、夫の帰りが遅いときは帰宅を待たずに就寝する習慣である。夫が帰宅したとき気づけば迎えにでるが、知らずに寝たままでいることもある。朝目ざめてから夫の帰宅を知るときもある。夫が特殊任務に就いているのでなければ、こんなことはゆるされぬ。

この夜も美絵は、二人の子を寝かしつけてから、縫い仕事などを一刻（約二時間）ばかりつづけて、亥の刻（夜十時）をまわったころ床に就いた。家事や育児で体はほ

どほどに疲れており、ほどなくして眠りに落ちた。

どのくらい眠ったであろうか。

美絵はふかい眠りの中で、玄関の戸のひらく音を聞いたような気がした。錠は夜中いつも下ろしてあるが、権六郎はどのような手立(てだて)を用いるのか、いつも難なく開けて入ってくる。美絵はどうやって錠を開けるのか、今まで夫にただしたことはなかった。耳をかたむけると、戸を立てる音もたしかに聞こえた。

(出迎えに行かねば)

美絵はそう思ったが、眠りがふかかったため、ついそのまま眠りつづけてしまった。その後、また家の中で物音が聞えた。

このときも美絵は権六郎だとおもった。夜中だからひかえめな音だが、かといってしのんでたたいている音ではなかった。

やがて、寝間の襖(ふすま)がひらかれた。このとき美絵は夢うつつであった。

(夫であろう)

とおもったが、それも朦朧(もうろう)とした意識の中だ。

夫が美絵の寝床の中に入ってきた。

夜具はふだんべつべつに敷くが、夫はときとして、となりの美絵の寝床の中に入ってくる。今夜がそうだ。まことに無造作に入ってきた。

あまりにさりげなくて、美絵は不審をいだかなかった。枕元には武家のたしなみで行灯がほのかな明りをはなっているが、美絵はたしかめようとしなかった。

夫はこれも無造作に体を美絵にかさねてきた。ふだんのままの夫のような気がした。いつもではないが、権六郎はときにこんな抱き方をするのである。

美絵は眠いので、ちょっといやいやをしようとした。が、する前にもう美絵の膝がひらかれていた。

夜着の裾を引きあげられ、腰布をまくられるのは簡単だった。

やや意外な感じをおぼえたのは、その後すぐに夫がいきなり美絵の股間に顔を埋めてきたことである。権六郎はときにはげしい欲望にかられたときなど美絵の秘所をむしゃぶることもあるが、それにしても今夜の夫は少々荒々しい。秘所をもてあそばれながら美絵は口で犯されているような錯覚をおぼえた。

夫の顔を押しのけようとしたが、それを途中で止めたのは、とても抵抗できない快感が湧き起こってきたからだ。止めるよりは、つづけてほしかった。

美絵の願いどおり、夫は執拗(しつよう)にそれをつづけた。快感はふかまっていく一方だった。それはかつておぼえたことのない快楽の味である。夫とはちがう男を体験しているような新鮮な味わいがあった。もっともっときわめたいと美絵はおもった。

男はようやく、口を離し、股間から顔をあげた。その顔を有明行灯のほのぐらい明

りが照らした。

明りの中に映じた顔は森下権六郎ではなかった。昨日、春日井家の門前で、右京に近寄り、彼をたくみに外へ連れだした男である。だが美絵はずっと目を閉じていたため、自分の腹の上の男を見わけることができなかった。よもや夫と別人だとは思わなかった。

男は中背よりは小柄である。顔は日に灼けた茶褐色をしており、おなじ商人でも行商人にいそうな顔立ちである。顔は小さく、目も鼻も口も小さい。

男は美絵の体から十分抵抗力を失わせたうえで、股間の中に突き入った。

うめくような、しのびなくような、えもいわれぬ音色が美絵の口から洩れでた。一度や二度ではなく、音色は長々とつづいた。

声と同時に体がもだえた。白い姿態がくねくねと、切なくやるせなくもだえつづけた。

「いい音色だ。もっとつづけろ」

美絵の声が一度中断したとき、腹の上の男が言った。言いながら男の方は動きを一度も中断しなかった。

ふたたび美絵の音色が口から洩れかけた。

その瞬間、美絵が眸を見開いた。

快楽の色をやどした両方の眸が驚愕と恐怖に一変した。

「ああっ、あなたは誰っ？」

悲鳴とも絶叫ともつかぬ声があがった。

「おれはおまえの一夜夫だ。たっぷりと賞味させてもらった」

男は悠然として言った。それはすでに女を征服した男の傲慢さに満ちていた。

「いやあっ！」

もう一度、美絵は悲鳴をあげた。

そして跳ね起きようとしたが、男の体をどうすることもできなかった。

「教えてやろう。おれは甲賀者だ。かつての忍者の末とおぼえておけ」

男は言いながらも、はげしい腰使いを止めなかった。

ややあってから、女の顔ががくっと横に落ちた。

そして口から泡のような血がとめどなくあふれてきた。血はたちまち夜具を赤く染めていった。

美絵は舌を嚙み切って自害したのだった。

三

御庭番の詰所は、江戸城本丸御台所御門から入った右手にある。

詰所の一室で御庭番組頭藪田助八はにがりきっていた。今朝、森下家の若党から届け出があって、権六郎の内儀美絵の惨劇が耳に入った。

前日は、春日井家から右京の叔父がたずねてきて、右京の失踪と新妻おつゆの自害が報告されていた。

「もう、このままは捨ておけぬ」

藪田はうめくように洩らした。

「これ以上放置しておけば、今後どのようになるかしれませぬ。至急の解決が肝要かと思われます」

と答えたのは、藪田の前にすわっている腹心の御庭番本庄三四郎である。

「幕府伊賀者、甲賀者の御庭番にたいする攻撃はあまりにも執拗だ。もう我慢の限度を越えておる」

藪田の顔には苦悩の翳が色濃く落ちている。

御庭番創設の昨年夏いらい、藪田はこの一件に悩まされつづけてきた。

「伊賀者、甲賀者との全面戦争が引き起こされるかもしれません」

本庄は尋常ならざることを口にした。

昨年は、相楽十平次、柏平内の御庭番二人が甲賀者に殺され、今年に入って根岸六郎兵衛が伊賀者に殺された。その報復は藪田が甲賀毘沙門天と伊賀の百地日向と対決し、勝負を決したことによっていちおうのけりが付いたと思われていた。だから、今回、甲賀者の仕業は報復の報復というべきものであった。

藪田が業をにやしているのは、終わりなき戦いが飽くことなく繰り返されることである。御庭番にとって、伊賀者、甲賀者との戦いはまったく益なき戦いであった。

しかし事態は藪田の望まぬ方向へ確実にすすんでいた。御庭番新設のときに、藪田はこの事態をまったく予測できなかった。

「挑まれて、手をこまねいているわけにはまいらぬ。御庭番の被害はすでに続発している。これ以上の被害は止めねばならぬ」

藪田は重苦しくいった。

将軍吉宗の新政がどしどし施行され、それが実を結んでくるまでは、幕府内部の紛争は出来るかぎり避けたいところであるが、御庭番の内儀がたてつづけに狙われ、実際に大きな被害を出している以上、黙視しているわけにはいかなかった。春日井右京の新妻を犯し、置き手紙まで残して行った犯人がみずからを〈こう〉と署名したのは

甲賀者と明かしていったことにほかならぬ。御庭番ならば誰にでもわかる署名をして行ったのだ。これが御庭番へのさらなる挑戦なのである。

「これ以上御庭番が被害をこうむりますと、われら一同の士気にかかわることになってまいりましょう」

本庄三四郎は言った。

「幕府内部で戦い合い、殺し合うのはきわめて無益であるが、やむをえまい」

「左様にございます」

「本庄三四郎に甲賀者との戦いをやってもらおう」

藪田がようやく決意をしめした。

「かしこまりましてございます。拙者甲賀者と一戦をまじえてご覧にいれましょう」

本庄は一も二もなく、応諾した。

「相手はこちらの応戦を待っているであろう。十分にこころいたせ。援軍は出す」

「うけたまわりましてございます。春日井右京、さらに森下権六郎がこうむりました恨み、拙者代わって晴らす所存にございます」

力強く本庄は言い切った。

本庄は藪田の前からさがり、その日いらい、組屋敷からも本丸詰所からも姿を消した。

甲賀者の組屋敷は青山にある。千駄ヶ谷村と原宿村とのあいだに、かなり大きな敷地を占めている。

組屋敷の東方と南方には小禄の旗本や御家人の住む屋敷が密集し、西方と北方は、伊東修理太夫、水野和泉守、長谷川久三郎などの下屋敷に隣接している。さらに近くには御先手組やそのほか下級役人らの組屋敷があり、甲賀者らがつかう鉄砲場も近くにある。

甲賀組屋敷の北のすぐちかくに、六道ノ辻と呼びならわされたところがある。そこで道が六つに分かれ、四谷、千駄ヶ谷、鮫ヶ橋、権田原、御炉路町、さらに甲賀屋敷へ向かうので、その名が付けられた。

うだるような暑い昼下り、六道の辻にのんびりとした金魚売りの声がながれた。

「金魚、ええ、金魚……」

金魚売りは日よけの菅笠をかぶり、大きな金魚桶を二つ両手にさげている。桶の中では緋やマダラなどの金魚がすずしげに泳いでいる。

「ええ、金魚、ええ、金魚」

しぶい、よく通る声が四谷の方から来て、ゆっくりと甲賀組屋敷の方にむかった。

「もし、金魚屋さん」

組屋敷の一角に入ったとたんに声がかかった。
金魚売りが声の方を振り向いて立ち止まると、三、四歳の童児の手をひいた武家の女房がちかづいて来た。まだ三十にはちょっと手前の、みずみずしさがにおう女だ。
「金魚をください」
「へい、どんな金魚にいたしましょう」
金魚売りは桶を道の隅において、すわり込んだ。
「わあ、いっぱいいるなあ」
童児は目をかがやかして桶の中に見入っている。
女房も桶の中の金魚を楽しそうに目で追いはじめた。
「坊、金魚はどんな色のやつがいい？」
そうたずねた金魚売りがやや顔を上げた。
菅笠の下からのぞいた顔は、まぎれもなく本庄三四郎であった。日よけの菅笠をかぶっているとはいえ、真夏の日盛りを戸外にでて売りあるく商売であるから、顔はもう茶褐色に灼けている。
本庄は昨日は六道ノ辻から御先手組屋敷へまわり、そこで金魚をほとんど売りつくした。そして今日は、甲賀組屋敷に来たのである。
「赤い、尻尾（しっぽ）の大きな金魚と、赤と白のマダラの金魚、それにもう一匹……」

童児は金魚がたくさんいるので、目うつりしているのである。
童児が最後の一匹をきめかねているあいだに、組屋敷の別の路地から二、三人の人影があらわれた。
「金魚屋さん、金魚をください」
そう言ったのは十六、七歳の武家娘で、弟と妹らしき子供を連れている。
「へい、どれがよろしいでしょう。みんなきれいで元気な金魚ばかりですよ」
本庄は幼い子供たちの方へ笑顔をむけて言った。金魚売りをはじめて、今日がまだ三日目だが、商売にはもうすっかりなじんでいた。
子供たちの金魚えらびがまたはじまった。
たっぷりと時間をかけて二組の客に六匹の金魚を売った。
「ありがとう。小父（おじ）ちゃんまた金魚を売りにきてね」
子供に礼まで言われて、本庄は甲賀組屋敷の路地を入って行った。
しばらく行くと、また呼び止められた。
そしてここでも金魚を売った。
本庄はこうして組屋敷の路地から路地を売り歩いた。

四

甲賀組屋敷の広さは約三万坪。その中に同心百人と与力四人の屋敷がある。

往時は組屋敷の東西両端の地に柵がもうけられ、木戸番がおかれていた。これは甲賀組屋敷が大久保にある伊賀組屋敷とともに、江戸城外郭の砦であったことを意味する。しかし時代がくだって泰平の世となってからは、柵は取りはずされ、木戸番もおかなくなった。江戸城周辺に砦の必要もなくなったのである。そしてかつての忍者集団伊賀者、甲賀者たちも必要がないと見なされてきた。

真夏の日が沈んで、あたりに夕闇がしのび寄ってきたころ、甲賀組屋敷の家々に行灯の明りがともりだした。

甲賀与力大月市之進の屋敷にも、行灯がともった。

行灯は主人の居間や台所、座敷にともり、半刻（約一時間）ほどたってから、湯殿にもともった。大月家では主人市之進が下城してくるとすぐに湯殿を使い、次に子供二人が入浴し、最後に内儀のおはつが使う習慣である。

この日、夕闇が濃くなり、宵に移ったころ、六道ノ辻から組屋敷の路地へまぎれ込んだ人影があったが、組屋敷の中でそれに気付いた者はなかった。往時であれば、組屋敷の入口の柵が閉ざされた時刻とはいえ、敷地内に素姓のさだかでない者が入り込んで、誰何されぬとは想像もつかぬことであった。時代が変わったとはいえ、それだけ甲賀者たちの士気も規律も弛緩しているということなのであろうか。

人影は路地から路地へ、闇から闇をつたい、人目をかすめてすすんだ。その動きは身軽で、俊敏なうえ、闇を見通す視力を持っているようであった。地に伏し、物陰にかくれ、塀を越え、路地をつっきって、人影は大月家の屋敷内に潜入した。

月は例によって卵色のにごったやつが、邸内の松の木のはるか頭上にかかっている。

人影は屋敷内にあるていど通じているとみえ、母屋の北西の端にある湯殿にちかづいて行った。

湯殿にはすこし前から行灯の明りが入っている。

耳をすますと、かすかに湯の音が聞える。

人影は湯殿の軒下にひそんで、内部をうかがった。湯の音を聞けば、どんな者が入浴しているか、男女の区別、およその年齢くらいは判断できる。

人影は顔を上げて、湯殿の屋根を見やった。

その顔をにぶい月の光が照らした。

本庄三四郎の顔である。

本庄はこの数日、甲賀組屋敷を金魚売りにまわって、ほぼ全体の様子をつかんでい

た。大月家の日常についても、およその把握をしていた。

主人市之進は三十代半ばの男ざかり、禄高八十石の譜代席である。内儀おはつは二十代後半で、臈たけた婦人であり、本庄はこの婦人に金魚を売っている。子供づれの、そのときのおはつの印象はあざやかに本庄の脳裡にのこっていた。

ざざっ……、とふたたび湯の音が聞こえた。

おはつの白い肌をながれる湯を想像した。

本庄は湯殿の近くにある楓の高い枝に跳躍して飛びうつり、さらにそこから湯殿の屋根へ乗りうつった。

湯殿の天井にちかいところに高窓がある。夏の宵などは半分ひらいている。

本庄は屋根の庇から、くるっと身を一転させて高窓に飛びついた。さらに高窓のひらいているところから、音もなく湯殿に入り込んだ。

湯殿には金網行灯がともっており、簀の子の上で糠袋をつかっているおはつの裸身を仄白く浮かびあがらせている。

本庄はしばらく湯殿の高窓の枠に張りついて、下の光景をながめた。

湯気の立ちのぼる中におはつが浮かんで見える。おはつは立て膝をし、丹念に裸身をみがきあげている。自分の真上で他人が見下ろしていることをすこしも気づいていないようだ。

おはつの裸身はすんなりとしてなめらかな曲線を見せているが、胸や腰にはゆたかな肉置がある。とても子を生んだ体とはおもえぬ美しさだ。股間にあわい翳が落ちているのが、立て膝の角度によって見える。湯をはじく肌の艶はなんといっても見事である。

本庄は見下ろしながら、やや嗜虐的な気分にかりたてられた。これから湯殿の中で展開する光景を想像したからにほかならぬ。

そのとき、おはつが腰を浮かした。手桶を取って、湯舟の湯を汲もうとした。

そのおはつの視線が湯舟の一点に釘付けになった。おはつは湯の面に映る曲者の影をみとめたのである。

本庄もそのときはじめて、自分の姿が湯舟に映っているのを発見した。

もう一瞬の余裕もなかった。

本庄は高窓から身をひるがえした。

「お内儀、大声は無用だ。声をあげれば、美しい柔肌が血に染まる」

簀の子の上に飛びおりて、本庄は素早くおはつの背後にまわった。その手には切っ先するどい短刀がにぎられている。

おはつは中腰のまま動きがとれなくなった。短刀の切っ先が脇腹にあたっているのだ。

「静かにしておれば、命は取らぬ。怪我もしないですむ」
おし殺した低い声で本庄は恫喝した。
「無体はゆるしませぬ。無体におよべば大声を立てます。すぐにも人が駆けつけてくるでしょう」
全裸ながら、おはつは毅然と言った。
「どうしても声をたてたくばたてるがよい。遠慮はいらぬ。白い肌に傷をつけるのも一興だ」
本庄は言いながら、切っ先でおはつの乳房をなでまわし、さらに乳首をつついた。
おはつの裸身が小きざみに震えだした。
「だまって湯殿をでていきなさい。そうすれば騒ぎません」
気丈にもおはつは弱みを見せまいとした。
「このまま湯殿をでて行っては、仲間の仇討ちにならぬ。内儀どのに犠牲になってもらわねばならない。尻をこちらに向けて、両手を浴槽の縁につけろ」
本庄はもっとも屈辱的な姿勢を要求した。
「わたしは仇討ちを受けるおぼえはありません」
おはつはあくまでも拒もうとしたが、何分にも一糸まとわぬ姿であっては強気にも限界があった。

「言われたとおりにしろ。さもなくば本当に血を見るぞ」
言いながら本庄は切っ先をおはつの背中に当て、ゆるゆるとおろしていった。切っ先はかすかに刃の跡を柔肌につけながら、尻まで下がった。刃はさらに割れ目をたどって股間へ向かった。
「許してください。言うことを聞きますから、許して」
おはつの恐怖はとうとう限界をこえた。泣きだしそうな声で許しを乞い、両手を浴槽の縁につけた。
「尻をこちらに向けて、突きだすのだ」
本庄は勝ち誇ったように言った。
女の腰がゆるゆると動いた。白くたおやかな、まあるい尻がこちらを向いて突きだされた。その尻を湯玉がつたい落ちていく。本庄ならずとも食欲をそそられる白桃のような尻だ。
「甲賀の女たち一同に代わって内儀どのが犠牲になるのだ。因果応報……」
言いながら本庄はすばやく自分の前をまくった。
そしておはつの尻の割れ目をさぐった。草むらに縁どられた裂け目がさぐりあてられた。
本庄はぐいと突きたて、押し入った。春日井右京、森下権六郎の気持になって柔肉

を刺し貫いた。

おはつが腰を引こうとするのを抱え込み、力強く突いては引き、突いては引き、凌辱を繰りかえした。

おはつの尻が揺すぶられ、シミひとつない背中が前に後ろに揺れうごいた。背中ばかりでなく乳房までも揺れた。どうやら、おはつは屈辱と口惜しさのために泣いているようだ。

本庄は仮借なくおはつを犯した。おはつの体は脂が乗りかかっていて上質であった。えも言われぬ快感を与えてくれた。突けば突くほど手応えがかえってくる。攻めつづけるほどに、欲望はそそられ、男の気持が充実してきた。おはつの内部もほどよい加減に濡れてきた。

本庄はいよいよ本気になって、おはつを蹂躙していった。欲情が欲情を呼び、憎悪が憎悪をかきたてた。

やがてそのうちに、こころなしか、おはつが感じはじめたようである。腰がわずかだが、微妙な動きを見せてきた。肩の揺れにも、今までなかった動きが出てきた。

「内儀どの、ご気分はいかが。気をやるのも結構、くやしまぎれにご自害めされるも結構。お好きになされよ」

本庄はなおしばらく凌辱し、十分に気をやってから、おはつを離した。

おはつは離れると同時に簀の子にくずれおちた。

本庄は高窓に向かって跳躍した。

〈柔肌頂戴いたし候、明後子の刻（夜十二時）、増上寺山門にて待つ、おに、大月殿〉

懐紙にさらさらとはしり書きして、小柄で湯殿の天井に突き刺し、本庄は悠々と高窓から脱出した。

五

広大な領域に闇が降りている。

三縁山増上寺は境内約二十五万坪。寺領一万五百石、学寮数百戸、支院三十余宇をほこる巨大寺院である。闇は全山にみちており、にごった月光の下に支院は甍をつらね、学寮は軒端をきそっている。五重塔は三層以上が空の闇に溶け入っている。

子の刻にちかいころ、本庄は軽衫、筒袖、草鞋のいでたちで、境内をめぐる濠の橋をわたった。濠の前に下馬の札が立っている。

目前には大門が立ちふさがっている。これがいわば増上寺の総門である。約束の場所山門はその正面のずっと前方である。

本庄は大門の前に立って見あげた。よじのぼれぬことはない高さだ。が、門の左右

両脇は築地塀になっている。これを越えるほうが簡単である。
本庄は助走をつけ、両手で地を蹴り、一回転して高く飛んだ。本庄の体は築地塀の上に軽々と降り立ち、さらに向こう側へ飛び降りた。
これによって本庄は相手方に自分の存在位置をしめしたことになる。
相手方はすでに境内の中に身をひそめているはずだ。敵が一人か二人か、それとも大勢かはわからぬ。本庄のほうからいどんだ闘いであった。
本庄は山門へ向かって、ゆっくりと歩をすすめて行った。もうどこから敵が襲いかかってくるかもしれぬ状況に入った。
山門は二重の楼門である。本堂は山門のはるかかなただ。
闇のどこに敵がひそんでいるかわからぬ。
しばらく進んでから、本庄はにわかに山門をめがけて疾走をはじめた。疾走することによって敵の所在を見きわめようとしたのだ。
前方までは遠く、左右もひろい。その左右は深い松林だ。本庄は松林の中に敵がひそんでいるのではないかと見ていた。
が、左右から敵影は飛び出してこなかった。
闇の中の山門がぐんぐん近づいてきた。
とうとう山門まで敵は現われなかった。

山門の前までいたって、本庄は上を見あげた。
そのとき闇の空を黒い雲が流れたかに見えた。
（敵だ！）
本庄は危険を察して、数間横へ飛んだ。
大鳥が翼をひろげるように、黒装束の敵が山門の高い屋根から舞い降りてきたのだ。
「甲賀組与力、大月市之進だ」
敵は甲賀者らしくなく名乗りをあげた。
「御庭番、本庄三四郎。決着をつけるときがやってきた。覚悟っ」
本庄は叫ぶや、はやくも一刀を抜いて突進した。
走り抜け、すれちがいざまに一刀を一閃したが、大月はからくも身を避けた。
「甲賀の意地を見せてくれる。この世に御庭番は無用じゃ」
言いながら今度は大月が猛然と襲ってきた。手には長さ一尺余寸の反りのない忍び刀をにぎっている。
本庄は身を反転させて忍び刀の一撃をはずした。
（腕は五分）
と本庄はみた。あとは気迫と運による勝負だ。伏兵、助勢があれば、むろん状況はかわる。双方とも御庭番と甲賀者の意地をこの一戦に賭けている。新旧の幕府隠密役

が増上寺山門前に斬りむすんだ。

カッと音をたてて鋼と鋼が打ち合い、闇の中に火花が散った。武士の得物による戦いだ。甲賀者は忍者の末であり、御庭番も紀州伝来の根来流忍法を身につけている。が、両者ともに武士の表芸で激突した。

いったんはなれた両者はふたたび相手めがけて駆け寄り、打ち合った。

すさまじい音を発し、火花が飛んだが、今度もおたがいの得物は相手にとどかなかった。

打ち合いはさらに数度つづいた。しかしいぜん勝負はつかなかった。無人の境内で二人の闘いは息づまるように展開した。

表芸の戦いがいつ裏芸にとってかわるか、それが勝負のわかれ目といえた。本庄も大月も容易に転換の機をつかめなかった。おたがいにその機を見合った。

両者の距離がふたたびひらいたとき、本庄は不穏な気配を感じ、思わず大門の方を見やった。

(あっ……!)

本庄は凝然となった。

前方から人影が七つ八つほどこちらに向かってちかづいてくるのが闇の中におぼろに見えた。本庄はそちらをじっとにらんだ。

やがて、闇の中に饅頭笠をかぶり、墨染の衣に袈裟をかけた坊主たちがあらわれた。

(七ツ坊主……)

本庄はうめいた。

増上寺の僧には能化と所化とある。各地の末寺から学問にくる坊主が所化であり、彼らは数人から七、八人の一隊を組んで毎日七つ(午後四時)ごろから市中に出て行って早足で托鉢する。これが七ツ坊主だ。気位がたかく、血気がさかんで、大名の供先や辻固めの武士と争うことをも辞さない。

しかし、今時刻、七ツ坊主が市中からもどってくるのは面妖である。本庄は坊主の一団を凝視した。

(甲賀者だ!)

一団は七ツ坊主に化けた甲賀者たちであった。大月の助勢が粛々と闇の中をせまってきたのだ。

(おそい!)

本庄はいらだった。自分への助勢がいまだに到着していないのである。

本庄はやむなく七ツ坊主たちをも相手にするかまえをとった。そのとき、気配を感じて、本庄は北の方をじっと見た。

すると、はるか御成門の方からこちらに向かってやってくる数人の人影が闇の中に

おぼろに見えてきた。白い僧衣をまとった僧侶（そうりょ）たちだ。そのいでたちは増上寺の能化である。能化は増上寺直属の僧侶である。

（きたっ！）

本庄は心中で声を上げた。

こちらに近づいてくる能化たちは御庭番である。

七ツ坊主たちもちかづいた。

山門の前で、所化と能化が鉢合（はちあ）わせすることになった。

能化の先頭に立ってくるのは、春日井右京のようだ。右京は祝言の場から誘いだされて、甲賀組屋敷の一角に拉致（らち）されていた。隙を見て脱出し、数日前御用屋敷に戻ってきていたのだ。

能化たちの白い僧衣が夜目にあざやかだ。足並をそろえるかのごとく一団となって近づいてきた。

七ツ坊主たちの墨染も月光の下で菅笠（すげがさ）とともにはっきりと見えてきた。七ツ坊主たちはいずれも拍子木を手にしている。それが彼らのきまりの姿なのである。

双方は数間の距離に近づいた。

まず七ツ坊主のほうが機先を制して、墨染を闇にひるがえして能化の一団に襲いかかっていった。

能化たちも一様に打ってでた。白い衣の下にみな大小を差していた。

七ツ坊主らは墨染の下に忍び刀を着している。一団は拍子木を捨てて、忍び刀を抜きつれていた。

本庄と大月との戦いは、御庭番と甲賀者との激突になった。声を殺し、双方は太刀と忍び刀でやり合った。無言の中の戦いは、時とともにはげしさを増していった。境内の静寂の中に、太刀と忍び刀の打ち合う音、あらい息づかい、足音などがひびいた。倒れる者も一人、二人と出てきた。

本庄は乱撃と闇の中で、大月の姿をつい見失った。闇をとおして乱撃を見すえたが、わからなかった。

乱撃にくわわるべきか、それともあくまでも大月を捜すべきか、一瞬ためらった。

そのとき、一人の能化が七ツ坊主に斬りたてられて、じりじりとしりぞいてきた。

（あぶない！）

とっさに本庄は助太刀にでた。能化をかばうように前へでて、七ツ坊主めがけて斬りこんだ。

だが、そのとき、かばった能化の白い僧衣の下に黒い装束がちらついたのを見た。

（錯覚か……？）

と思ったが、今度は白い僧衣の足もとに黒い脚絆（きゃはん）が見えた。

その瞬間、かばった能化が背後からすさまじい太刀を本庄に見舞ってきた。あやうくかわして、本庄は一刀を切りかえした。切っ先が能化の衣を上から下へするどく裂いた。白い僧衣の下から黒装束が現われた。これが大月だ。

「大月っ、覚悟！」

叫んで本庄は能化の顔面に力いっぱい一刀を見舞った。

顔がわれた。血しぶきを飛ばし、大月の体は数間先に飛んで、そのまま動かなくなった。

七ツ坊主と能化との乱撃はこの後もつづいた。増上寺の夜は更けるばかりだ。

顔のない男

一

日没とともに日中の残暑が、初秋らしいすずしさにかわった。

桜田御用屋敷の庭に吹く風がさわやかである。

御用屋敷の庭に散策にでてきた中臈の姿が見える。髪を耳の下まで切り下げ、白い打掛をまとった優婉な姿が夕暮れの庭によく似合う。

桜田御用屋敷の御殿にはお須免の方と美和の方が法体となって、家宣の菩提を供養しながらしずかな暮しをおくっている。いまだ二十代半ばながら、読経、写経などの沙門の暮しに入ってすでに五年がたっている。御用屋敷の外へでることは一年に一度、家宣の法事で墓参するときしかない。

美和の方は沙門の暮しにたいする不満はなかった。主人とあおぐ将軍が他界したのであるから、その菩提をまつる日陰の日常は当然だとおもっている。日没の一時、薄暮のなかに浮かぶように咲いている白芙蓉のうつくしさを堪能するのが、この季節の

たのしみなのである。

庭には白芙蓉と紅芙蓉とあり、朝露をふくんで花をひらき、夕に花をおわる。美和の方は白芙蓉のさわやかさとはかなさに、いつもこころを打たれるのである。そのはかなさは女のさかりをほんの一時しか見ずに仏門に入ってしまった自分の一生にもつうじたところがあった。

さわさわと松風がわたり、芙蓉の花びらがゆれている。黒い揚羽が何度か庭にやってくるが、芙蓉の花にはちかづくこともなく飛び去っていった。

（……）

そのとき、美和の方は自分の首筋につきまとう人の視線のようなものをおぼえた。ふりむいたが、あたりに人影はなかった。

（気のせいか……）

と美和の方はおもいなおした。

御用屋敷はひろさのわりには住んでいる人数がすくない。一人の中臈に二人の腰元がついているにすぎぬ。そのほかは屋敷の用人と中間、下男だけである。

ところが、しばらく庭を散策しているあいだに、また自分に人の視線がまとわりつくのをおぼえた。

（中間か下男がのぞき見でもしているのだろうか？）

屋敷の用人はすでに老人で、枯れている。

今おぼえる視線にはぎらぎらと男の欲望がたぎっているように感じられた。

中間も下男も、実直、素朴な人柄である。日ごろ美和の方を心底からうやまい、よくつかえてくれている。とても下司な感情をいだくような人物とはおもえなかった。

さりげなく周囲を見まわしたが、視線の主を発見することはできなかった。

美和の方はすこしいやな気がして、散策をやめた。白芙蓉にはこころがのこったが、屋内へもどっていった。

部屋の中にはかすかに香のにおいがたちこめている。

美和の方は居間のとなりの仏間へ入った。

仏壇があり、家宣の位牌がおいてある。

位牌の前にすわり、美和の方はしずかに読経していった。

半刻（約一時間）、読経をつづけた。

それがおわったときは、あたりはもうすっかり暗くなっていた。

しばらくして美和の方は居間に場所をうつし、今度は文机を前にして写経をはじめた。

これが美和の方の日課である。くる日もくる日も、おなじ暮しをしている。これをつらいとか退屈だとか感じたことはなかった。

将軍に寵愛(ちょうあい)され、栄華の暮しをしていたことをなつかしくおもったことはない。美和の方が家宣の寵愛をうけたのは、わずか二年余であった。その二年余はまるで幻のような歳月であり、自分の錯覚かと勘ちがいすることすらあった。

写経を半刻ばかりつづけた後、美和の方は床についた。

寝入ってからしばらくたったころ、自分の体にまとわりつくいやな視線を夢うつつの中でおぼえた。

（夕方の……）

庭を散策して肌に感じた視線とおなじものではないかとおもった。しかもそれが今度はもっと身ぢかに存在した。

しばらくは我慢した。ところが、視線はますます露骨になった。美和の方の首筋や胸のふくらみ、腰のまるみなどにねばりつくような視線をからみつかせてきた。

美和の方はその視線の主に一枚一枚衣服をはぎとられていくような感じをおぼえた。

視線の主はためらうことなく、衣服をはいでいった。

美和の方は抵抗したが、はねつけられた。

「おやめください」

胸の衿(えり)をおしひろげられようとしたとき、声をだしてこばんだ。そして相手の手をふりはらおうとしたとき、より強引な力で衿をひろげられた。

目をひらいた美和の方にのしかかるように本当に男の姿が有明行灯(ありあけあんどん)の明りのなかに見えた。夢でも錯覚でもなかったのだ。

「お方さま、声をおだしなさいますな。おだしになれば、命はありませぬぞ。このように」

といって男は両手で美和の方の首をしめかけた。男は頬(ほお)かむりで顔をつつんでいる。息ぐるしくなったが、それ以上に恐怖感におそわれ、身うごきできなくなった。

男は夜具をはねのけ、夜着につつまれて身を横たえた美和の方へ欲望の視線をはわせている。夕方の視線もこの男のものだった。

これからどんな運命が身にふりかかってくるか、美和の方にはわかりすぎるほどわかっていた。

「やめてください。無礼はゆるしませぬ」

恐怖にかられながらも、必死でうったえた。

頬かむりの中の男の表情は美和の方のうったえにすこしもうごかされなかった。強引というよりも冷徹に自分の欲望をとげようとしているのがわかった。

男は夜着の紐(ひも)をぬきとった。そして夜着の前をひらいていった。

白い裸身がさらされていった。美和の方の体は五年前の家宣寵愛のころとほとんどかわっていない。それは近年の規則ただしい暮しと、子をうんでいないせいのようで

ある。いくらかふっくらと肉付きがよくなっているが、くずれた体の線はどこにも見いだすことはできない。

男の眸が欲情にいろどられている。視線が乳房から下へさがり、乱暴に腰の薄布をひきはぐと同時に股間の一点でとまった。

股間をつきさし、えぐるような視線を美和の方はおぼえた。この男の欲望の前にはどんな制止も嘆願も不可能だとおもった。

「頂戴いたす」

というなり、男は美和の方の足をひらいていった。

白い体が二つにわれた。その中央に男は自分の体をかさねていった。

灼熱の、たくましいものが美和の方をつらぬいた。驚きと怒り、羞恥、とまどいのうちに美和の方は見も知らぬ、正体不明の男に体を征服されていった。

男は美和の方への顧慮はいっさいはらわなかった。ただおのれのために美和の方へいどみ、責めぬいていった。

美和の方は歯をくいしばって狼藉に堪えつづけたが、最後にははしたない獣の声を五年ぶりにはなってはてた。

「おなじ敷地のうちにすまう御庭番だ。つね日ごろから御用屋敷の御中臈どのを賞味いたしたいとねがっておった。後日ふたたび参上いたす。そのせつは今宵同様のもてなしをおねがいいたす」

男は体をはなして、不敵に素姓の一端をあかした。もう女をわがものにしたという安心感と傲慢さのあらわれである。

「もう二度といらしても無駄でございましょう」

美和の方は悔しさと屈辱をこめた言葉で応じた。今は御用屋敷にすまう沙門の身とはいえ、すくなくとも五年まえまでは天下人の寵愛をこうむる身であった。その身を御庭番という新設の直参にもてあそばれた油断がくやまれた。最後に声をはなった自分にも腹がたった。

「そうつれないことをいうものではない。もう他人とはいえぬ仲になったことだ。また会う日をたのしみにいたしておる」

男はそういい捨てて、悠然と身づくろいをして、玄関からでていった。

翌朝、美和の方はいつもの時刻におきてこなかった。美和の方の一日は、早朝の読経からはじまるのだ。

ふだんならば読経のおわる時刻になってもおきてこないのをいぶかしんで、腰元の一人が美和の方の部屋をおとずれた。何度も声をかけたにもかかわらず答がないので、腰元は部屋に入っていった。

その部屋で腰元は、美和の方が血の海の中につっ伏して自害している姿をみとめた。

腰元の注進におどろいて用人の中岡平兵衛がとんできて、御用屋敷の中は大さわぎになった。

二

御庭番組頭の藪田助八は、昼前、御側御用取次の加納角兵衛から呼ばれ、桜田御用屋敷内の組屋敷をでた。

今朝、桜田御用屋敷にめずらしく午前中から人の出入りがあったことは知っていた。が、おおきな事件がおこっていたことは知らなかった。

藪田は本丸にある笹の間へすすんだ。

藪田はしずしずとすすみでた。

加納の態度がいつものそれとはちがう。かたさと深刻さとが顔にあらわれている。難問にぶちあたったことが表情にしるされている。

「昨夜、桜田御用屋敷で御庭番の不祥事がおこった」

加納は開口一番いった。

「はっ……」

藪田はそうこたえて、加納の顔を見た。

「そなた、知らなんだか」

加納にいわれて、藪田は顔をあかくした。

御庭番は隠密、間諜の特殊任務をもつ。なによりも情報につうじていなければならぬ。しかも加納が知っているのだから、藪田の立場はない。

「申しわけございませぬ」

藪田はそういうしかなかった。

「昨夜、桜田御用屋敷の美和の方がご自害なされた」

加納の言葉をきいて、藪田はあっと腹のなかで声をあげた。自分の足もとで大事がおこっているのを知らなかった。自分が住んでいるところとほとんどおなじ場所である。灯台もとくらしだ。

「おそれ入ります。存じませんでした」

「藪田ともあろう者がの……。知らなければ、おしえてやろう。昨夜、桜田御用屋敷に賊が侵入いたし、おそれおおくも美和の方を手ごめにいたしたようじゃ。美和の方はそれを恥じてみずから懐剣で喉と胸を突かれ、お命を断たれた。しかも遺書がのこされており、それによれば、賊の正体は桜田御用屋敷内の御庭番と書きのこしてある」

加納は沈痛にいった。

あまりの事の内容に、藪田は啞然となった。すぐには信じられぬ事柄である。

「桜田御用屋敷に住まう御庭番といえば、わたしをふくめて五人おります。そのうちの一人が賊となって侵入し、美和の方をはずかしめ、ご自害にいたらしめたということでございますな」

藪田は加納を見つめたまま、苦渋を吐きだすようにいった。

「遺書がただしければ、そういうことになる」

加納も憮然たる表情だ。

「一概には信じられませぬ。さっそくしらべて、ご報告申しあげます」

そうこたえるしかなかった。藪田の腹心の御庭番本庄三四郎も桜田屋敷に住んでいる。あとの三人は高槻小十郎、根来勘左衛門、御坊有之助である。どの顔をおもい浮かべても、とても信じられぬ。しかも、御坊と根来の二人は任務のため遠国へでている。

「外部にもれたら大変なことになる。御庭番全体の不名誉だ。上様も心配なされておられる」

ことはすでに吉宗の耳にまでとどいているのだ。

「御庭番をおとしいれるための謀りごととはかんがえられませぬか」

藪田が問うと、

「桜田の御用屋敷をでて、御庭番組屋敷へもどっていく賊の姿を、御用屋敷の下男が見ておる」

加納はあっさりと否定した。

藪田は二の句がつげなかった。つげぬまま加納の前を退出した。

この夜から、藪田と本庄三四郎は屋敷内で見張りをはじめた。

美和の方の一件はこれでおわるとはかんがえられなかった。賊が何者であれ、もう一度、いや二度でも三度でも御用屋敷の中臈をねらって侵入してくることがかんがえられた。桜田御用屋敷には、もう一人の中臈お須免の方がいる。今度はお須免の方がねらわれるおそれがあった。

初秋七月、まだ残暑のきびしい日々がつづいている。

日のおちるころから、藪田と本庄は御用屋敷の塀と木戸のちかくにひそんで、御殿の様子をうかがった。この高さ一間余の土塀と杉戸づくりの木戸が、御用屋敷の御殿と御庭番の組屋敷とをわけている。

誰がきめたのか、前々将軍の中臈が住む御用屋敷に御庭番をすまわせるというのは、いかにも奇抜なかんがえである。ふつうならば、かんがえおよばぬ。御庭番は吉宗と加納、有馬のあいだで案出した役職であるから、おそらく組屋敷を御用屋敷の中にお

いたのも、いずれは三人のうちのかんがえであろう。御庭番は秘密の役職であり、世間から目につかぬことがこのましい。それで、この世とは没交渉の沙門の中臈たちのくらす御用屋敷が恰好の場所だとかんがえられたのだろう。

「美和の方のほとぼりがさめるまでは、賊は姿をあらわさないのでは」

本庄が薄暮のなかで植込みの陰にひそんで声をかけた。

「そうかんがえるのがふつうだろう。だが、その裏をかく賊がいるかもしれぬ」

藪田もおなじかんがえだが、念を入れて今夜からひそんだのである。

夏のころにくらべると、すこしずつ日暮れがはやくなった。ふと気がつくと、植込みのあたりを秋の蛍がよわよわしい光をともしてとんでいる。ながれ星が頭上をながれた。

「身びいきでいうんじゃありませんが、御庭番のしわざとは絶対にかんがえられません」

本庄はながれ星を目で追いながらいった。この季節は流星がおおく見られる。

「おれもそうおもうが、美和の方の遺書にはそう書かれている。それに屋敷の下男の言葉もある」

「わたしは、伊賀者か甲賀者のしわざだとおもいます。御庭番がすぐに足のつくようなことをするわけがありません。自分の身もとをあかしていく賊なんてありません

よ」

本庄は確信をいだいているようだ。

藪田はだまってききながした。本庄がかんがえていることは、藪田はとっくにかんがえた。賊がいかにも御庭番らしく振舞っているところがおかしい。

「ともかく賊をひっとらえてみれば、わかることだ」

藪田はそういって見張りをつづけた。

伊賀者、甲賀者が御庭番をおとしいれるために画策しているふしはおおいにあった。藪田も本庄も今回の一件を御庭番と伊賀者、甲賀者との確執の一環としてかんがえようとしているのである。伊賀者、甲賀者たちは御庭番が不評を買って解散に追いこまれるのをねらっているのはたしかであった。

「賊はきそうにありませんね」

本庄がそういったのは、真夜中をすぎたころだった。三刻（約六時間）ばかり見張りをつづけた。

「まだわからぬ。夜があけるまで時間がある」

藪田は朝まで見張りをつづけるつもりであった。

秋の虫が庭でしきりに鳴いている。耳をすましていると、きこえるのは虫の声ばかりだ。今が虫のいちばんさかんな季節である。虫の時雨をきくようである。

月明りが地上にふりそそいでいる。御用屋敷の御殿は闇の中にしずんでいるが、おぼろな様子は見てとれる。

「おもわぬときに敵は姿をあらわすものだ」

藪田はまだ三十代の年輩だが、四十代にまさる場数をふんできたという自負がある。剣術の腕ばかりでなく、根来流忍法にもおぼえがある。人のこころを読む術も身につけていた。

「伊賀者と甲賀者がどこかでわたしどもを嘲っているかもしれません」

本庄がいった。

御用屋敷はここだけではない。虎ノ門、雉子橋、清水門にも御用屋敷はある。そこにも家宣のかつての中臈が住んでいるのだ。

「いつか、きっと姿をあらわす」

藪田はそういったが、この日は夜があけるまで、桜田御用屋敷に賊は侵入してこなかった。

三

藪田と本庄が一日交代で御用屋敷を見張りはじめて、半月以上がたった。

が、これまで賊が御用屋敷に侵入してくる気配はまったくなかった。

桜田御用屋敷はその名のとおり、正面は江戸城の桜田濠に面し、左右両どなりは毛利家と鍋島家の上屋敷である。昼間もうるさいところではないが、夜ともなるとまるきり人通りがなくなり、しずかなことこの上ない。野良犬さえも御用屋敷にちかづいてこなかった。

それでも二人は交代で見張りをつづけた。

七月も晦日にちかづいた宵……。

桜田御用屋敷からほどちかい霞ヶ関の潮見坂をゆっくりとのぼってくる一人の侍姿があった。

このあたりは高台で見晴しがよく、江戸湾をものぞむことができたので、この名がついた。周囲一帯はすべて大名屋敷、それも上屋敷ばかりである。

その侍は虎ノ門のほうからやってきた。黒紋付に黒袴の堂々たる恰幅の武士である。間垣左近将監。芸州浅野家にその人ありと知られる二刀流の達人である。間垣はほろ酔いで桜田門の上屋敷にかえる途中である。

潮見坂は裏霞ヶ関につうじている。九鬼長門守の上屋敷を右にまがっていけば浅野家上屋敷である。

秋の月が、江戸湾上にかかっている。間垣は一度月をふりあおいで、ふたたび歩を

すすめていった。

前方、九鬼家の屋敷から枝をのばした松が風にゆれている。

と、そのとき……、松の枝がおおきくゆれて、黒い獣のような影が地にとびおりた。犬よりもおおきな影だ。

（何者……？）

間垣は一瞬、その影の正体を想像した。

影は地上にとびおりるなり、間垣のほうにむかって疾走してきた。

獣ではなく、正体が人間だとわかったのは、影がだいぶちかくにせまったときだ。

影はまっしぐらに疾走してきて、狼のように敏捷なうごきで、地上をひくく跳躍した。

間垣は殺気をおぼえるなり、体を前傾させ、

「曲者っ！」

叱咤して、一刀を鞘ばしらせた。自分にむかって跳躍してきた獰猛な影をめがけて振りぬいた。

完璧な間合で一閃したが、影は間垣の頭上をこえて、坂道を駆けくだっていった。

影は跳躍しながら、ややみじかめの刀身をふりおろしていたが、間垣もそれをかわしていた。かわしはしたが、相手は尋常の剣ではない。人間ではなく、あたかも獰猛な

獣を相手にしたような恐れを感じた。

間垣はふりかえって、坂の下をながめた。

黒い影が地を這うように坂道をとってかえして駆けあがってくるのが見えた。

あっという間に影はせまってきた。

間垣はおのずから腰をややおとし、構えに入った。

そのとき、一陣の突風が坂下から吹きおこった。

突風が間垣の面をうった。

「ええいっ！」

渾身の気合を発し、間垣は腰をひねった。

突風とともに影は間垣の脇をはしりぬけていた。

激痛が間垣の両目にはしった。火がでるようだ。

間垣は一瞬のうちに視力をうしない、正確に間合を見切ることができなかった。そのために、またもや一刀は空を切った。

影は突風とともに目潰しを投じて駆けぬけたのだ。目潰しは灰に砂をまぜたものだが、この激痛ではそれに有毒なものがくわえてあるのがわかる。

激痛はさらに増した。脳天の芯までしびれた。

とても目はあけられぬ。視力は完全にうしなわれた。

それでも間垣は闇にむかって、構えをとった。
坂の上から、三たび影がおそいかかってくるのがわかった。
（忍者だ……）
戦国の世から幕府初世にかけてさかんに活躍した忍者たちの子孫だろうと間垣はおもった。このような勝負をしかけてくるのは、まさに外道、忍法のつかい手にほかならぬとさとった。が、その忍者がどうして自分に攻撃をしかけてくるのか理解できなかった。
全身の神経を集中すると、路上を疾駆してくるものの存在がかすかに感じられた。
間垣はついに左手で脇差をもぬいた。両刀を天地にかまえて、影の疾走してくる正面に立った。
得意の二刀流だが、なんといっても無明の剣だ。たよるは勘と反射神経だけである。
突風がまた吹きおこった。
「やあっ！」
満身の気合を発し、間垣は二刀を打ちふった。
わずかながら手ごたえをおぼえた。脇差が相手の体の一部をかすめたのはたしかだ。が、同時に間垣の体は地上からなぎたおされるようにとばされていた。腰のあたりにものすごい衝撃をうけていた。敵の一刀がしたたかに間垣の胴をぬいたのだ。

なにも見えぬまま間垣は坂の上に転倒し、一転、二転した。
それでも間垣は懸命にたちあがろうとした。駆けぬけていった敵が止めを刺すためにもう一度、坂の下からとってかえしてくるのにそなえようとした。
大刀を杖にして、間垣は体をささえつつ、よろよろとおきあがりかけた。
坂道を駆けあがってくる足音が間垣の脳裡にきざまれた。間垣は片膝で体をささえ、耳をすました。
足音はわずかにきこえた。が、その足音はゆるゆるとちかづいてきた。敵は疾走をやめて、あるいてちかづいてきたのだ。
激痛とくるしさが間垣の全身を駆けめぐっている。胴にうけた深傷でもう立ちあがることができなかった。が、一太刀相手にむくいたいという一念だけで間垣はようやくもちこたえていた。
いかなる敵がなんのためにおそったのか、理由も知らずに死ぬのは無念だというおもいがあった。
「間垣左近将監、不運であったな。うらみつらみはないが、死んでもらうことになった」
黒い影はちかづいてきて声をかけた。
「何者じゃ、なんのために……」

間垣はかすれ声ながら必死できいた。
「なんのためということはない。ためし斬りだ。見事な斬れ味だ。ねらわれたのが不運だった」
影は無造作にこたえた。
「名を、名乗れ」
「名乗るほどのこともない」
影はそういって、止めも刺さずに立ち去ろうとした。
「無礼者っ、かえせ！」
間垣は悲痛にさけんだ。
影はいったんあるきだしたものの、間垣の声で立ちどまり、ふりかえった。
「間垣左近将監、それほど名を知りたいか」
影のほうは相手が何者であるかを知っていた。
「名を申せ、無礼であろう」
間垣は激痛とくるしみの中で声をふりしぼってさけんだ。
「幕府御庭番……。それだけこたえてやろう」
影はそれだけいって、今度はすたすたと潮見坂の闇へ消えていった。
間垣は呆然とその場にへたりこんでいた。

しかしその後、間垣は必死で気をとりなおした。大刀を杖にして、一歩、また一歩と膝でにじるように坂をのぼりはじめた。おびただしい血を腹からながしながら必死で闇の底を這うようにすすんだ。
浅野家の上屋敷はもうすぐちかくだ。路上に醜態をさらすよりも、なんとか上屋敷にもどって息をひきとりたかった。その一念で間垣は尺取虫のように潮見坂をのぼった。
（どうして御庭番が……？）
坂道を這いあがりながら必死で間垣はかんがえつづけた。
だいぶかかってようやく坂道をのぼりつめた。角をまがれば、浅野家の屋敷はもうちかい。
息たえだえで間垣は角をまがった。

四

七月晦日の朝、藪田はふたたび加納に呼びだされ、笹の間において、浅野家の名だたる剣士間垣左近将監が御庭番におそわれて斬殺されたと打ちあけられた。
早朝、浅野家の家老浅野弾正が加納を屋敷におとずれてきて、前夜おこった御庭番

の間垣斬殺の顚末をつげたのである。

間垣は昨夜ついに浅野家上屋敷までたどりつき、浅野弾正に事件の顚末をうちあけたうえで息をひきとった。

浅野弾正のほかにもその場に大勢の浅野家臣たちが居合わせたので、間垣が御庭番のためし斬りによってころされたことは浅野家にひろく知られた。浅野弾正は御庭番を支配、統轄する者として加納をおとずれ、捜索の依頼と処分の回答をもとめてきたのである。

「美和の方の一件もまだあきらかにされておらぬ。早急のうちに捜索いたし、一件を解き明かせ。さもなくば、御庭番は解散をせざるを得なくなるであろう」

浅野弾正が去ってから、加納は藪田に命じた。

発足してからまだ一年余月しかたっていないのに、御庭番は存亡の危機にたたされた。不名誉な噂をながされたあげく、解散へ追いこまれるかもしれぬ。

「間垣どのは名うての剣客でございます。よほどの者がたおしたと見なければなりませぬ」

相手の腕前のほどが想像された。

「世間では御庭番は一人のこらずつかい手ぞろいだとみられている」

「御庭番が無謀なためし斬りなどいたすはずがございませぬ」

藪田にすればわかりきったことである。

「しかし世間ではそうはおもうまい。上様も、上様についてきたわれわれも、まだ世間では胡散くさくおもわれている。御庭番は一日もはやく身の証しをたてなければならぬ」

加納は強引に藪田にせまった。

「委細、承知いたしましてございます。御庭番の身の証し、きっちりとつけさせていただきます」

いいたいこと、反論の余地はいくらもあるが、藪田はそうこたえた。賊の正体をはっきりあばきだしたほうが、世間は納得しやすいとおもったからだ。

藪田は加納の前をさがって、組屋敷にもどり、本庄を呼んで、そのことをつげた。

藪田と本庄はまだ桜田御用屋敷の見張りをつづけていたばかりでなく、ほかの御庭番に命じて、虎ノ門、清水門、雉子橋の御用屋敷の見張りもおこなっていたのだ。

「やつらめ、見張りに気づいたのか、御用屋敷から辻斬りに目先をかえてきた」

本庄は間垣一件をきくなり、そう吐きすてた。伊賀者、甲賀者たちの意図はもうわかりすぎるほどわかっていた。

「こちらも目先をかえるか、それともしつこく御用屋敷で敵を待つか」

藪田は念のために本庄の意向をたずねた。

「ここまできたら、しつこく待つのがよろしいかと」
本庄の意向は藪田とおなじであった。
「敵は御庭番のおかれている立場をよく知っておる。御庭番をじりじりと追いつめてくる策のようだ。こちらは今は我慢のときだ。じっと我慢をして敵をひっとらえるまでだ」
「やつらの卑怯な手立をきっとうちやぶってやるつもりです」
そうこたえて、本庄は藪田の前をさがっていった。

その本庄はそれから数刻後……、大屋根の瓦のうえに寝そべって、天上のながれ星をながめていた。本庄が桜田御用屋敷の御殿の屋上に身を横たえてから、もう十数個ながれ星をかぞえた。
頭上には、白い帯状の雄大な天の川も見える。秋は本当に昼も夜も空のうつくしい季節である。
夜空のうつくしさと神秘をながめながら、本庄は今日も賊の侵入を待っていた。すでに一カ月ちかく、彼は待ちぼうけをくっていた。くる夜もくる夜も賊を待つ毎日だ。待つ身のつらさをこのところ本庄はしみじみとあじわった。一晩中待ちつづけて、夜が明けてから組屋敷へもどるときのこころと足のおもさといったらない。

晴天の夜はまだしもである。天の川やながれ星を見ながら時のたつのをわすれることができる。
（今夜もこぬ……）
東の空がこころなしかうっすらとしらんで、暁の気配が感じられたころ、本庄は今夜も見張りが無駄だったことをおもった。
暁の明星がひときわあざやかな光をはなっている。
またひとつ、星がながれた。
その直後、邸内の闇の中を黒い影がすっと横切ったのを感じた。
本庄は大屋根に腹這って、黒い影のはしった先を凝視した。
（きたっ！）
体がぞくぞくとふるえてくるようなしずかな興奮がおこってきた。
とうとう賊がやってきた。ながいあいだ待っていた甲斐があった。
黒い影は御用屋敷の塀をのりこえて入ってきた。
しばらく黒い影は見えなくなったが、御殿に接近してきたのはたしかなようだ。身のこなしからして、忍者だと見当をつけた。
（伊賀者か、甲賀者か、待っていたぞ）
本庄は緊張感のうちにも、はげしい闘志が自分のなかからおこってくるのをおぼえ

た。

全神経を集中していると、やがてかすかな物音が御殿の軒下あたりからきこえた。賊は前回に味をしめて、今度はお須免の方をねらってきたのだ。

本庄は音もなく大屋根の上を這い、軒ちかくまですすんだ。下をのぞき見ると、闇のなかをうごく黒い影が見えた。本庄も根来忍法におぼえがある。闇を見とおす夜目のこころえがあった。

本庄は今賊にたたかいをいどむ気持はなかった。今ではまだ賊は御用屋敷にしのび入っただけにすぎぬ。今賊をとらえることができたにしても、いいのがれが可能だ。本庄は賊の現場をおさえるつもりである。

黒い影は御殿の厠（かわや）にちかい床下にもぐりこんでいった。侵入路はかねてさだめてあったようだ。

本庄は軒から地上へ舞いおりた。

賊は床下をすすんでいった。

本庄は賊の侵入路へちかづいてみた。床下には人一人ようやくとおれるくらいの隙間ができていた。

本庄もその隙間から御殿の床下へもぐっていった。

床下はかぎりない闇の世界だ。前方の闇をすすむかすかな気配がある。本庄はその後について匍匐（ほふく）しながら前進した。

黒い影はほとんどためらうことなく、御殿の床下をほぼ対角線上にすすみ、とある一点でとまった。

その地点に、床下から上へあがれる細工がほどこしてあるようだ。

気配をうかがっていると、黒い影はそこから床板をとりはずし、屋内へあがっていった。

ややあってから、本庄はそこへすすんだ。なんとそこの床板の釘が全部ぬきとられ、床板一枚そっくりとりはずせるようになっていた。美和の方の一件があった直後、御用屋敷でもいろいろ注意してまわったのだろうが、床板の釘がぬけていることなどわかろうよしもなかった。

床板をはずすと、その上は畳である。手で持ちあげれば、畳はふわっと浮きあがった。

そこから本庄は上へあがった。納戸のとなりの空部屋のようなところである。

本庄は空部屋から廊下を音もなくすすんだ。

しんと寝しずまっているが、耳をすますと、わずかに人のうごく気配がつたわってきた。それをたよりに廊下を前進していった。

廊下は鉤（かぎ）の手になっている。そこをまがったとき、人のうごく気配とともに、おし

ころした男の声と泣いているような女の声がかすかにきこえた。
廊下の先に座敷がある。人の気配と声はそこからきこえたのだ。
ちかづいていくと、男の声と女の声がいくらかはっきりしてきた。
本庄は座敷のなかでくりひろげられる落花狼藉の有様を想像した。けれども賊が侵入してまだ間もないから、狼藉にまではいたっていないかもしれぬ。落花の寸前であろうかと想像した。
男はしきりとおどしつけている様子だ。女は懸命にこばもうとしている様子である。
本庄は廊下から部屋の襖をしずかにひいた。
そこはひかえの間である。そのむこうが狼藉のおこなわれているお須免の方の寝間であろう。
寝間の襖が一寸ほどひらいて薄明りがもれている。本庄はその隙間へちかづいた。
有明行灯の明りのなかに、白い夜着のまま手足をしばられた女が見えた。まだ二十七、八の臈たけた女である。切り下げ髪が恐怖にひきつった顔にかかり、しばられた姿は異様な色気を見せている。
男は頬かむりをして、背中に忍び刀をつけ、伊賀袴をはいている。薄明りのなかに見える横顔は三十前後だ。
男がおどしながら女にせまっていった。女はにじるように後へさがろうとしたが、

ほとんどすすまない。
男が強引に女のうえへのしかかっていった。
（おのれっ、伊賀者め！）
本庄は胸のうちで怒りをほとばしらせた。
今ならたおせるとおもったが、生け捕りにしようと決心した。
すうっと襖をひらいた。その瞬間、空気が寝間へながれこんでいって、行灯の炎がゆらいだ。
曲者はいちはやく変異を察知して、女をつきはなし、とびすさった。動物的な勘にすぐれた男だ。
「曲者っ」
声を発して、本庄は寝間へとびこんだ。
ほとんど同時に、曲者の体がとんだ。寝間の空中で男の体は一回転し、襖をたおしてむこうの部屋へおりたった。想像以上の敏捷さである。
本庄がとなりの部屋へ追ったとき、曲者ははやくも廊下をつっぱしっていた。たたかおうとしないで、瞬時に逃走へ入った敵の判断力はずばぬけている。
本庄も敵を追って、廊下を駆けた。一カ月もかけてようやく目前にした曲者を逃がすわけにはいかなかった。どうしてもとらえてやるという執念があった。

前後して二人は廊下をつっぱしった。

床をくぐるときにつかまることができるとおもって本庄は追った。が、敵は意外なところで意表をついてきた。侵入口へはむかわず、鉤の手のところで、ふわっと天井へとんだ。

本庄がはっとしたとき、曲者は天井から廊下の明り取りの窓をつきやぶって外へとびだした。おもいがけぬところに脱出口がかくされていた。

本庄もつづいて天井へとんだ。しかし明り取りは外から庇の羽目板でふさがれていた。追跡を断つ用意がかねてしつらえてあったのだ。

羽目板をはずし、本庄は外へとびだした。

外はようやく払暁の明りがおとずれていた。夜と朝との境目の大気がながれる庭を疾走していく人影が目に入った。

今から追っても、追いつくことは不可能である。けれども本庄はほとんど本能的に賊を追って庭へとびおりた。息つく間もなく本庄も庭を疾走した。

五

曲者の音沙汰がふたたびなくなった。

せっかくの千載一遇の好機を本庄はにがし、敵の逃亡をゆるしてしまった。敵は二重三重の逃亡の手立を用意してあった。本庄の不覚であるが、悔んでもあまりある不覚であった。

本庄はしばらく気がぬけたようになっていた。当分のあいだ今後の手立もかんがえられなかった。

御用屋敷への侵入はなくなったが、その後、江戸城下で御庭番のしわざとみずから名乗る辻斬りが三件たてつづけにおこった。

一件は湯島で一刀流の道場をひらいている大坪伝八郎という剣客が自宅のちかくでおそわれ、一刀両断のもとに肩から胸の下まで斬りさげられて、絶命した。大坪の供をしていた中間に、幕府御庭番と名のってその曲者は神田明神のほうへ姿を消した。

それにつづいて、小石川の路上で大工の綱七という者がつれと一緒に銭湯へいったかえりを待ち伏せられて、抜き打ちの一刀で首をとばされた。そばにいたつれは腰をぬかして逃げることもできなかった。そのつれに、

「幕府御庭番、任務につかう刀のためし斬りだ」

といいすてて、去っていった。

三件めはなんと赤ん坊である。しかも綱七が斬られたところから一丁ほどしかはなれていない小日向町の稲荷の境内で、子守女を呼びとめ、あっという間の抜き打ち一

閃、無残にも赤ん坊の首が鞠のようにとんで石段をおちていった。

これまた腰をぬかした子守女に、幕府御庭番と名乗ってひきあげていった。

この三つの事件で、御庭番への悪評は世間でとめどないものになった。ただ残忍卑劣な事件というばかりではなかった。陰の存在である御庭番の存在が新設二年めにして、あまりにも有名になってしまった。泣く子に御庭番といえばすぐに泣きやむほどのこわい評判がたった。

藪田をはじめとして御庭番の面々はこれには閉口した。

加納、有馬の御側御用取次が老中たちから二度にわたって糾問をうけた。

伊賀者、甲賀者の策略はまんまと図にあたったのである。

『藪田がかわった』

『助八がおかしい……』

ちかごろ、そういう噂がたった。

噂はまちがいではなかった。本当に藪田はかわった。しかもかわりかたがひどい。頬がこけ、目がおちくぼみ、肩がとがり、体が痩せほそっていた。肌に艶や脂気がなくなり、三十代半ばの年齢というのに髪に白いものがまじりだした。急速なかわりようで、まるで別人のようなおとろえかただ。

言葉や体のうごきにもかつての精彩がうしなわれた。

「わずかなうちに、人間があれほどかわれるものか」

「御庭番の評判がわるい。悪評を一身に背負ってしまったのだろう」

あまりのかわりように、一部では同情の声さえあった。

憔悴がはげしいならば組屋敷でやすんでおればよいものを、藪田は日夜外をであるき、養生をしているわけではなかった。といってもそう遠くまで足をのばしているのではない。桜田を中心にして霞ヶ関、永田町、麹町、平河町、溜池、辰之口あたりの近間をあるきまわっているのだ。あてもなく蹌踉とした足どりで徘徊し、道端にたたずんだり、濠の水をながめていたり、呆然と草叢にしゃがみこんでいたりしている。一見したところでは、まるで痴呆した老人のようである。

人に問われれば、

「なに、町廻りだ」

とこたえ、ふかくはかたらなかった。

町廻りといえば、御庭番の職務柄、そう奇異な行動とはいえなかった。若党の笠原三郎太や中間をつれるでもなく、いつもひとりあるきをつづけた。

仲秋八月の名月もすぎ、江戸では秋の田がすっかり黄色にかがやきだした。赤蜻蛉がさかんに群れとぶ日がおおくなった。空にはまっ赤な落日の雲。この日も、麹町の

空をやけにおおくの赤蜻蛉がとんでいた。

藪田は麹町通りから夕焼雲をこころゆくまでながめ、四丁目から貝坂のほうへむかってゆっくりとあるきだした。この道はながく、山元町、平河町をとおって貝坂をすぎ、ながながとつづいて三年坂にいたる。三年坂のすぐ先は山王権現社である。

藪田はゆっくりとした足どりで、雲や赤蜻蛉、空地であそぶ子供たちの姿をながめながら貝坂まできたときには、ようやく薄暮がせまってきた。しかし藪田にとって、日が暮れようと、宵が夜更けになろうともすこしも斟酌する必要はなかった。今日の町廻りはまだまだつづくのだ。

藪田にとって、紀州の平藩士から直参の御庭番組頭に任じられたのは大層な出世であった。ところが、出世して得た地位はながくはつづかないかもしれなくなった。

地位役職に執着があるわけではなかったが、新設された御庭番が解散の憂目を見ることはどうしても避けたかった。一年と余月にしかならぬ御庭番がつぶされるのは、あまりにつらい。まださしたる活動も活躍もしていない。すべてこれからという時期である。地位を更迭されるのは自分の能力を問題にされるのであるから、まだしも仕方がない。御庭番の解散だけははばまなくてはならないと覚悟していた。

貝坂をすぎると道の左右は旗本屋敷がつづく。右に十四、左に十の旗本屋敷だ。風に吹かれてただようように、藪田は人通りのほとんどなくなった道をゆっくりととおりぬけた。

その先は左右に大名屋敷がつづくさびしい道だ。一本道だから見とおしはよい。前方の三年坂が見えてきた。

坂の名、由来が不吉である。この坂道でころんだ者はかならず三年以内に死ぬという。用心ぶかい者はこの坂道をよけて、遠まわりをするそうだ。

藪田は坂道の由来にこだわったことはなかった。三、四日に一度はこの坂をのぼったりくだったりしている。

坂道がのぼりにさしかかるあたりにおおきな松が空たかくのびている。

三年坂がちかくなった。

（まだころんだことはない）

藪田はふとそうおもった。ころんだら本当に死ぬかもしれぬ。一度ためしてみようかとおもった。

坂道のほうから松風が吹き寄せてきた。松の枝はたかく頭上をおおっている。

藪田は枝の下にかかった。

松籟のひびきがおこった。背筋をひやりとさせる松風が吹きおろした。

その瞬間、藪田は不穏な予感をおぼえた。

頭上高くから黒い影が殺気とともに舞いおりてきた。

藪田が下をとおりかかるのを、松の梢で待ちかまえていたようだ。頬かむりして顔をかくし、鎖帷子をつけ、伊賀袴に草鞋をはいた男だ。

藪田はそれまでの蹌踉とした足どりが嘘のように、とっさに背後へとびすさった。藪田の体は憔悴もしていなかったし、老いてもいなかった。三十代よりも若い反射神経はすこしもおとろえていなかった。おとろえたように見えたのは外見だけである。

「藪田、はかったな」

伊賀袴の男は待ち伏せた自分を棚にあげて藪田をなじった。藪田の憔悴ぶりと町廻りは相手をひき寄せる罠だった。なじりながら男は忍び刀を無造作にぬきはなった。が、藪田はそれには目もくれず、相手の左手のうごきだけに意識を集中していた。相手が斬りこんできた一瞬、藪田も地を蹴って身をおどらせた。

忍び刀と同時に相手の左手がすばやくあがって、目潰しを投じようとした。藪田は正確にそれを見ぬき、地から摺りあげるように一刀を抜きうった。

目潰しをにぎったままの拳が手首から切断されて、松のたかい枝の高さまでとんで路上に落ちた。藪田は浅野家をおとずれ、間垣左近将監が潮見坂でころされたときの様子をきいていたのだ。

「伊賀者よ、お前のおかげで御庭番の評判がひどくおちた。今日は存分に礼をいわせてもらうぞ。お前、百地日向の弟、百地左膳だな」

藪田はそういうと同時に相手の頭上へ身をおどらせ、上空から敵の首をねらって一刀をふるった。百地日向はこの春、藪田が吹上でたたかってたおした腕ききの伊賀者である。その日向に左膳と名のる弟の忍法の達人がいることをかねてつきとめてあった。

相手は体を地に横転させ、からくも一刀をさけ、一転、二転して立ちあがった。

「この坂でころんだ者はかならず死ぬ運命だ」

藪田はその先に着地して伊賀者へいった。

「死ぬのはこちらとはかぎらぬ。わしは百地左膳ではない。伊賀者には名乗る名はないのだ」

伊賀者はそういい、片手斬りで猛然とおそいかかってきた。片手首をうしなった衝撃はあまりないようだ。

「伊賀者に御庭番のかわりはつとまらぬ。伊賀者には大奥の門番がふさわしい。たわけめ！」

藪田は片手斬りをはばんで、一刀を水平に振りぬいた。あざやかな手ごたえがのこり、相手の右手首がとんだ。忍び刀をにぎったまま右手首が路上におちた。

両手首をうしなった伊賀者が猛然と突進してきた。

「やっ、やあっ！」

気合を発して、藪田は二度一刀をふるった。

伊賀者の体が鞠のようにころがった。両足首が斬りはなされて、もう立つことができなかった。

「無念っ」

というなり、とつぜん伊賀者の顔から火が発し、炎につつまれた。みずから顔に火薬をかけ、火をつけたのだ。藪田がさえぎる暇もなかった。

藪田は伊賀者の顔が燃えていくのを見まもった。これで伊賀者は自分の正体を消したのだ。

美和の方一件も、間垣斬殺、そのほかの辻斬りもすべて闇のかなたへ消えていった。

藪田は三年坂をゆっくりとのぼっていった。

伊賀忍法空蟬（うつせみ）

一

日はみじかくなり、秋たけて、凋落（ちょうらく）の風景がいたるところに見える。江戸の野山も町中（まちなか）も末枯（うらが）れがはじまり、晩稲刈（おくてがり）がしきりにおこなわれている。天候もわるい日がおおく、油断しておこたっていると、霜がきてしまうのだ。

江戸有数の目ぬき通り麹町通りも町のにぎわいはいつものことながら、空地や露地、庭先はすっかり晩秋のうらさびしさである。

尾張藩付家老（つけがろう）・成瀬隼人正正幸（なるせはやとのしょうまさゆき）は夕闇がせまるころ、外出先から乗物で麹町通りをとおって自邸へむかった。

成瀬隼人正は尾張藩の執政をつとめると同時に、犬山（いぬやま）三万五千石の藩主でもある当代の切れ者である。さきに八代将軍位をめぐって尾張藩主継友をいただき、紀州藩主吉宗をいただく同藩付家老安藤飛驒守陳武（あんどうひだのかみのぶたけ）と水面下の死闘をくりひろげて、一敗地にまみれた。将軍位には紀州吉宗がつき、吉宗は紀州藩士加納角兵衛と有馬四郎兵衛を

御側御用取次に任じて、矢継ぎばやに新政をとりおこなっていた。世間では尾張家の動向に興味をもって見まもっていたが、成瀬隼人正は幕府にたいして反抗の態度をとることもなく、静穏のうちに一年半をすごしてきた。

尾張藩も隼人正も沈黙をまもっていた。世の人々は尾張藩が新将軍吉宗の威令に服従し、忠誠をちかったと見るむきがおおかった。が、なかには尾張藩の態度を欺瞞的だとうたがう者もいた。

いかに将軍が全国武家の棟梁にして、幕府の首長として絶対的な地位をもつ者とはいえ、一年半前まで紀州、尾張両家のあいだでくりひろげられた暗闘のはげしさを知る者にとっては、尾張の服従が本心からのものとはおもえなかったのである。一時的な偽装ではないかとうたがう余地はたしかにあった。尾張藩内部にもあったし、外部にもあった。

隼人正は尾張藩の策士として天下にその名を知られた人物である。その隼人正が紀州との戦いにやぶれて、唯々諾々としているわけがないという推量がおこなわれていた。

隼人正の乗物は麹町九丁目まできた。

九丁目の先には右へ入る道があり、成瀬横丁と呼ばれている。成瀬家の上屋敷がその左手にある。反対に左へ入れば紀尾井坂の尾張家中屋敷にいたる。

隼人正は日によって成瀬屋敷にかえる日もあれば、尾張家中屋敷にもどる日もある。今日、隼人正の乗物は右へまがった。どちらかといえば、成瀬屋敷が隼人正の本宅である。

隼人正は帰邸しても、夜おそくまで政務、雑務をこなさなければならぬ。

寝所に入ったのは、子の刻（午前零時）にちかい。

隼人正には江戸に本妻もいれば、妾もいる。妾は一人だけではない。江戸と犬山をあわせれば妾の数は片手の指を屈してもあまる。だからといって、彼を好色ということはできぬ。武家は代々子孫に家をつがせてゆかねばならぬ。そのためにはすぐれた子孫が必要である。

しかし隼人正も、すでに齢は五十代である。若いころ体を武芸でしっかりきたえたために、いまだに体力にさほどおとろえはおぼえがないが、女の肌を夜ごと必要とはしなくなっている。どちらかといえば、ちかづけぬ夜のほうがおおい。

今夜もそうである。夜具や夜着の支度は小姓がつとめている。

寝入ってから一刻（約二時間）ばかりたったころ、隼人正はひやりとするものをおぼえて目ざめかけた。危険なものがわが身に接近してくるような予感におそわれた。それは濃い霧が地を這うようにちかづいてきた。

隼人正はもう一度、背筋につめたいものを感じた。枕元においた枕刀に手をのばそ

うとした瞬間、地下から突きあげてくる地震のような衝撃を感じた。
床下から畳と夜具をつらぬいて隼人正の右の脇腹すれすれに白刃が突きだしていた。
隼人正はとっさに身を翻転させようとした。
が、それよりもはやく二度めの地震に見まわれた。今度は左脇腹すれすれに白刃が床下から突きぬけた。
神速にして正確なおそるべき技をもつ曲者が床の真下にひそんでいるのだ。
さすがの隼人正も身うごきができなくなった。おきあがることも、体を一寸ずらすこともできなかった。死の恐怖に隼人正はおそわれた。
「成瀬隼人正どの。身うごきめさるな。声もおだしになるな」
おしころした低い声が畳をとおして床下からひびいた。
「曲者、何用じゃ」
声をだすなといわれて、そのとおりにしたがうわけにはいかなかった。
「しばらく、お耳を拝借いたしたい。くれぐれも身うごきめさること無用にござる」
ふたたび声がした。
「それをいうなら、まず名のるべきであろう」
隼人正は床下へむかってひくく叱咤した。
「江戸城の諸門、大奥玄関の番をいたす者にござる」

「伊賀者、甲賀者か」
「左様、伊賀の藤林上総助、とおぼえていただこう」
「藤林を名乗る者なら、かつての上忍の家柄じゃな」
隼人正はすこし興味をおぼえてきた。
かつて戦国の世から幕府初世にかけて徳川家の隠密役としてさかんにはたらいた伊賀者、甲賀者が泰平の世になって、江戸城諸門と大奥玄関口の番衛としてすごしていることは周知のことである。伊賀者、甲賀者たちが幕府の隠密役への復帰を熱望して何十年ものあいだ真剣な運動をおこなっていたことも隼人正は知っていた。
けれども新将軍吉宗が紀州家から入って、幕府隠密役に元紀州藩士十七人を抜擢したことによって、伊賀者、甲賀者たちののぞみは断ち切られた。伊賀者、甲賀者のよりすぐりの者たちと御庭番がひそかに暗闘をくりひろげていることも、隼人正はすでに情報によって察知していたのである。
「上忍と申しても、すでに詮なき世になった。が、まだ伊賀のなかに藤林の家柄はのこっておる」
「それで藤林上総助。人に耳を貸せというからには、この白刃は無用であろう」
隼人正は両脇腹に一尺余寸の直刀忍び刀をつきつけられたまま床下の曲者を叱りつけた。

左右の忍び刀が同時に抜きとられた。
「これでよろしかろう」
「耳を貸そう。申すがよい」
隼人正はおちつきはらってこたえた。
「手みじかに申しあげる。わが伊賀、甲賀と尾張家との会談をもちたい。どうであろう、応じていただきたい」
隼人正はおもわぬところから意外な会談を持ちかけられた。
「ただ会談といわれても、応じられぬ。なんのための会談か」
隼人正がきびしくいうと、しばらく沈黙のときがながれた。
「今ここで申しあげることはできぬ。会談の席上で申しあげたい」
上総助はつっぱった。
「会談の結果がどうでるかはわからぬ。それでよければ、会うことにやぶさかでない」
「かたじけない。会談は双方の利益になるとおもう。場所、刻限をきめたい。成瀬どののご都合をうかがいたい」
「明後、十月三日、酉の刻（夕方六時）、尾張家菩提寺、天徳寺においておこなうのはどうじゃ」

「明後、酉の刻、天徳寺か」
「左様」
「承知いたした」
「違約、他言、密告は無用にござる」
「もとより」
これで隼人正と上総助との約束は成立した。
「ほかに？」
「ござらぬ」
隼人正と上総助の密談はそれだけでおわった。
しばらく沈黙がおとずれたとおもったが、そのとき上総助はもう床下から立ち去っていた。
夜具と畳に忍び刀でつらぬいた跡がのこっていた。

二

光明山天徳寺。芝、愛宕山の西側にある。南北にながい長方形のおおきな境内をもつ浄土宗の寺である。つけくわえていうならば、浄土宗江戸四カ寺の一つで、紫衣免

許の寺である。

支院十七寺が境内に建ちならぶ。

尾張徳川家の墓地は本堂裏のしずかな一画に杉林にかこまれている。

天徳寺の境内や門前には茶店、土産物屋、そば屋などが参詣客や通行人をあつめているが、日暮れがせまるころ、店はしまる。そのころには参詣客もほとんど境内からいなくなる。

朝から秋時雨が境内や寺院のイラカを濡らしていたが、夕暮れちかくにあがった。人気のすくなくなった境内の一画、尾張徳川家の墓地に成瀬隼人正の姿があった。

隼人正は側役と小姓一人ずつをつれただけの身軽ないでたちである。

三人は藩祖義直の墓石とおおきな石碑の前にたたずみ、香華をそなえ、数珠をまさぐり、菩提供養をおこなっていた。隼人正は年のうち何度かは藩祖の墓に詣でて、自分の心中を吐露したり、藩祖への報告をおこなう習慣があるのだ。

夕闇があたりを支配するころ、隼人正は藩祖の墓石の前に立ち、こころしずかに合掌した。

そのとき、青北風にのって、ひくい男の声が隼人正の耳にとどいた。

「成瀬隼人正どの、先日の夜は失礼いたした」

一昨日、床の下からきこえてきた声であった。

「藤林上総助か」

隼人正は墓石にむかっていった。男の声は墓石の裏からきこえたのだ。

義直の墓石の背後には、いくつかの一族縁者の墓石がならんでいる。男はそのなかにまぎれこんでいるようだ。

「左様、拙者と甲賀三郎。二人で参上している」

上総助の返事がかえってきた。

「甲賀三郎といえば、これもかつての甲賀の上忍の家柄じゃな」

「そうおぼえていただけば、幸じゃ」

べつの男の声がきこえた。

「約束どおり、会談をいたそう。まずそちらから用件を申すがよい」

義直の墓石を境にして、表と裏から言葉がいきかった。おたがいに声だけきこえて相手の姿の見えぬ会談である。

上総助も甲賀三郎もむこう側の墓の前にぬかずいて墓参をいたしているように見せているのかもしれぬ。隼人正が立つ位置をずらせば相手が見えるのかもしれないが、彼はこのままで会談に入った。

「わが伊賀者、甲賀者は慶長、元和、寛永のころまで、幕府隠密として死にものぐるいのはたらきをいたしてきた。そして幕府のためにいささかの功績もあげた。しかし、

時代がくだるとともに世に戦がなくなり、われらは無用の存在とおもわれ、隠密役をおわれて、門番になりさがってしまった。けれども戦わなくても幕府に隠密役は必要だとするかんがえもある。それでもう幾十年も前から伊賀、甲賀のこころある者は隠密役へ復帰をもとめてまいった」

上総助のひくい声が墓石の裏からきこえてきた。

「うむ、およそのことは察しておる」

隼人正はこたえた。

「ところが、ここにきてわれわれの望みは頓挫いたした。というよりも断ち切られてしまった」

「そのあたりのことも、およそ察することができる」

「あたらしい将軍が紀州家からおいでなさって、あらたなる隠密役をおつくりなされた。そうなると、伊賀者、甲賀者がふたたび世にでる望みはうしなわれた」

上総助の声は一抹のものがなしさをただよわせてきこえた。

「御庭番十七家じゃな」

「左様、将軍直属の役ならば、伊賀者、甲賀者よりは、つかいなれた紀州藩士のほうがよいという理屈であろう。しかし、伊賀者、甲賀者には先祖伝来の秘術がある。われらはこの秘術の伝承にも命と使命をかけておる。秘術を後の世につたえるためには、われらが隠密役に復帰することがいちばんのぞましい。門番などをいたしておっては、過酷な忍びの技を訓練し、子孫につたえていくことは困難なのだ」

「そのとおりでござろう」

隼人正は上総助のいいぶんに異論はとなえなかった。

「それでわれらとしては、今後も運動をつづけていくうえで、味方がほしい。われらを後押ししてくれるつよい力がほしいのだ。それを尾張家におねがいいたしたいのだが」

「とくに尾張家をえらんだ理由をきかせねがいたい」

「将軍をのぞけば、今いちばんつよい力を持っておるのが尾張家でござろう。尾張継友さまは、紀州吉宗さまと将軍をあらそわれた。天下第二の者とかんがえてさしつかえござるまい」

「尾張が天下第二かどうかは、人によって判断のことなるところじゃ。上総助と甲賀三郎、尾張家の後押しになにをのぞんでおる。わが尾張家が味方をいたせば、伊賀、甲賀の者たちは昔のように隠密役にかえり咲くことができるのか」

隼人正は反問した。

「できると存じております」

上総助は明快にこたえた。

「左様か」

「今の吉宗公が将軍のままでは、われらの望みは達することはできませぬ。しかし尾張継友さまが将軍におつきなさることがあれば、望みはかなえられましょう」

上総助がこたえてから、しばし沈黙の時がながれた。

夕闇が濃くなり、墓石や石碑の輪郭がすこしずつぼやけていった。

「伊賀甲賀と尾張藩とで取り引きをいたそうというのか」

「左様にございます。もし今吉宗公がご逝去なされば、まちがいなく尾張継友さまに将軍のお鉢がまわってまいりましょう。それでなくても、当初は吉宗公よりも継友さまのほうが将軍の呼び声がたかかった。それがわずか一カ月そこらのうちに、形勢がにわかに逆転いたし、吉宗公が将軍におなりになられた。われわれも尾張継友さまを将軍に予想していただけに、吉宗公が将軍におつきになられて、おどろいたものです」

上総助の言葉で隼人正はにがいおもいをよみがえらせた。

官位、格式は尾張、紀州両家とも同等ながら、御三家のなかでくらべれば、兄の家柄として尾張家が筆頭の立場である。しかも、六代将軍家宣は、死する前に、自分の嫡男家継が幼弱であるのをおもんぱかって、もし家継が早世した際は尾張家に後をたのむといいのこした。しかし、いいのこされた尾張家の当主吉通も逝去してしまったので、あらためて、吉宗と継友のあらそいになったのである。

隼人正はかねてから尾張家の優位を確信していたので、策士と呼ばれていながら、つい上手の手から水がもれた。油断はしていなかったが、紀州家の付家老安藤飛驒守の必死の荒技、逆転をゆるしてしまった。くやんでも悔みきれぬことである。吉宗が将軍位についた以上、今後は吉宗の血筋が将来の将軍位につぎつぎについていくことになる。このままでは尾張家は将来ともに立ち枯れの状態である。

「吉宗公のご逝去がかんがえられるか？」

「かんがえられます。わが伊賀者、甲賀者は江戸城諸門の番に任じております。大奥の玄関番もいたしております。城中への出入りはわりあいに簡単でございます」

上総助の言葉は大胆になる一方であった。

「吉宗公がご逝去いたせば、わが殿様が将軍位につかれるやもしれぬ」

「そうなったときこそ、伊賀者、甲賀者を幕府の隠密役にもどしていただきたい」

上総助、甲賀三郎は交換条件にでたのだ。

夕闇がますます濃くなっていくなかで、隼人正はわずかな光明がわが身のちかくで見えるようなおもいがした。

「ことがそのようにはこべば、まことに重畳である。しかしそうまでうまくはこぶとはかぎらぬ」

上総助は言葉をおさえていった。

「しくじる恐れよりも、うまくいく見通しのほうがつよい。成瀬どの、ご決断くださるまいか。伊賀、甲賀の者ども、尾張藩のつよい味方になることをおちかい申す」

上総助はすでにかんがえぬいたあげくのことであろうから、態度ははっきりとしていた。

「まことにこころづよい申し出でござる。結構な申し出でもござる。わが尾張藩としても、そうなればまことによろこばしい。しかし決断は今ここではいたしかねる。一両日の余裕がほしい。いかがか」

隼人正のこころのなかでは、すでに決断はできていた。が、藩主継友にも一応耳に入れておきたかった。

「一両日のあいだにご返事いただけるならば、結構であろう。ご返事は誓書とともにいただきたい」

「そのほうの申すこと当然でござろう。事柄だけに誓書をもってご返事いたそう」

隼人正も大胆きわまりない返事をした。

「まことにかたじけない。よい返事をお待ちいたしておる。伊賀甲賀にとっても、尾張家にとっても損のないとりきめだと信じておる。長居は無用だ。このへんで会談をおわりたい」

上総助の言葉が濃い夕闇のなかに消えた。

足音もしなければ、立ち去る気配もなかった。しかし、隼人正が墓石の裏へまわってみたところ、すでに人影はなかった。上総助と甲賀三郎がいたらしいところの墓の前にあたらしい香華がかざられ、線香が煙をくゆらせていた。

そのとき、数間先の墓石のあたりで、かすかに影がうごいた。

はっとして、隼人正はふりむき、その影を追おうとした。

「曲者！」

隼人正の右どなりにいた側役刈谷新伍が、いいのこすやたちまち影を追ってはしった。小姓の三宮九郎はただちに隼人正の側にぴたりと身を寄せて、護衛についた。

三

暁にいたる前、

藪田助八は尿意をおぼえて夜具から起ちあがった。

藪田の場合、尿意をおぼえて目ざめるというのは、なにかことがおこる予感があるからだ。

藪田は厠で放尿しながら、それについてかんがえた。

厠をでて手水をつかうとき、外を見まわした。
桜田御用屋敷の庭はまだ夜の闇である。
暁はまだおとずれていないが、やがて暁のくる気配が闇のなかにただよっている。
闇のどこかに朝の予感がひそんでいるのだ。
藪田は夜目をきかして、御用屋敷の庭をにらんだ。
なにかがおこりそうな予感はあったが、現実には闇のなかになんの変化もなかった。
あきらめて藪田が手水場をたち去ろうとしたとき、
コトリ
と庭の木戸のあたりで音がした。
藪田はおもいなおして、しばらく立ちつづけた。
やがて、闇のなかで夜気のうごく気配がした。
やはり、藪田の予感はあたっていた。
闇のなかで影がちかづいてきた。
「根来か？」
藪田は闇へむかって、ひくい言葉を投げた。
影のうなずく気配がした。
今夜の藪田は勘が冴えている。御庭番というのは、勘が身上である。勘のよくない

者は御庭番にむかぬと、藪田はかんがえている。
「おれの部屋にあがれ」
藪田は闇にむかっていい、すたすたと寝間にもどった。
いくばくもたたぬうちに、襖がひらいて、男が入ってきた。
「根来勘左衛門にございます」
男はそう名乗った。
根来勘左衛門は御庭番十七人のうちの一人である。任務で遠国へでているといわれていたが、それは世間むけである。彼は意外とちかいところにいたのだ。
「成瀬屋敷で、なにかおこったか」
藪田は根来にたずねた。根来は成瀬屋敷のなかに、もう一年半もひそんでいたのである。
「組頭どの、尾張家と伊賀、甲賀が手をむすぶようです」
根来はごくありきたりの農夫のような姿をしている。しかしその口からもれた言葉は尋常なことではなかった。
「伊賀甲賀と尾張家が……」
藪田はひくい声でつぶやいた。
尋常なことではないが、藪田の脳裡にはそれにちかい予感が一年半前からあった。

その意味で藪田の勘は見事にあたったといえる。

「伊賀の藤林上総助という者と甲賀の甲賀三郎と申す者が、昨夕、芝の天徳寺において、成瀬隼人正と会盟いたしました」

「そうか……」

藪田はうなずいて、先をうながした。

「伊賀甲賀の者が将軍を暗殺いたし、その後の将軍位に尾張継友どのがつき、御庭番を廃し、伊賀甲賀者を隠密役に任じるというのが両者談合のおもむきです。会盟は尾張家の墓地におこなわれ、数間はなれたところでその有様を見聞きいたしました。申し入れは伊賀甲賀者のほうからおこなわれ、成瀬隼人正がそれを聞きました。成瀬はまだ正式にはうけ入れの返事をいたしておりませんが、ほぼ十中八九はうけ入れにかたむいております」

「左様か、おおいにありそうなことだ。尾張家と伊賀、甲賀はついに手をにぎり合ったか。御三家と忍者だ。大変な世の中になったものだ」

藪田は慨嘆のため息をついた。

「かりそめにも徳川御三家の一つともあろうものが、伊賀甲賀とくんで将軍にそむきたてまつるとは」

根来も怒りをあらわにしていった。

御三家は、家康が将軍を補佐し、将軍の血統を保持するためにたてた家柄である。それゆえにかくべつの権威が御三家にあたえられているのだ。

「尾張家と伊賀甲賀が手をむすべば、幕府といえどもあなどることはできぬ。将軍の御嫡男長福さまはいまだご幼少におわす。将軍がもしご逝去いたしたならば、おそらく尾張継友どのが将軍におなりになるであろう。そうすれば御庭番を廃することは容易だ。その後釜に伊賀甲賀がすわるのも簡単なことだ」

藪田は自分たちの前におおきな墓穴が掘られていることを知った。時とともに怒りがおおきくなっていった。

「吉宗公が将軍におつきになられていらい、尾張家は静穏をまもっておりますが、それが尾張家の本意ではありますまい。尾張家はいまだあきらめておりませぬ。吉宗公をたおすか、将軍位からひきずりおろす機会をうかがっております」

「あきらかに本音が見えたな。根来を成瀬屋敷にもぐらせておいてよかった」

「伊賀甲賀の手だれにたいしては御庭番がたたかっていくほかはありますまい」

「尾張家への態度は将軍みずからさだめていただく以外はない。御三家への態度をあらためるよい機会であろう」

藪田は以前から〈御三家無用〉のかんがえをいだいていた。けれどもそれは御庭番組頭として公にとなえる意見ではなかった。

御三家をつくった慶長の年代においては、それは必要だった。けれども百年以上たった今では時代がおおきくかわっていた。幕府をおびやかす外様大名はすでに存在しない。それよりも将軍をおびやかす大名が親藩のなかに存在する時代である。

御三家はすでに役目をおえた、というのが藪田のかんがえである。元和、寛永の年代までは御三家が将軍を補佐しなければならない時代であった。有力外様大名はつぎつぎに消えていったが、まだ幕府の諸制度や組織は整備されていなかった。実際に尾張義直、紀州頼宣、水戸頼房の三人はいろいろな難問をかかえながらも、ともかく将軍を補佐してきた。

けれども現在では諸制度はしっかりととのい、組織も整備されて、かくべつ御三家の補佐は必要でなくなっている。かえって御三家の存在がことを面倒にしている面が多々あった。御三家と将軍家との対立もしばしばおこっていた。

しかし御三家の廃絶が至難であることも、藪田は承知していた。そこに尾張家と伊賀甲賀の結託の情報が入ってきたのだ。

（うまくすれば、これはつかえる）

ひそかに藪田はかんがえた。

けれどもこれは自分の力でどうすることもできぬ。藪田にできることは、加納への情報の提供である。藪田は加納のかんがえの筋道がわかっている。加納ならばこの情

報をうまくつかうだろうという確信があった。

「尾張家と伊賀甲賀が結託したとして、その証拠になるものがあるか」

藪田は根来にたずねた。加納へ情報を提供するに際してのきめ手がほしかった。

「証拠は、あります。両者が盟約する際、尾張家から伊賀甲賀へ誓書がわたされるはずです」

やや思案しながら根来はこたえた。

「誓書がこちらの手に入れば、まことに都合がよいな」

とても簡単には手に入るまいとふんで、藪田はいった。

根来はそれを組頭からの命令ととった。

しばらく根来は沈黙した。根来の顔がやや緊張を見せた。

藪田は返事を待った。根来の苦渋のため息がきこえてきそうな気がした。

「誓書をうばいとってまいりましょう」

口をひらいたときの根来にはもう逡巡が消えていた。

「申すまでもないが、それは大変なことだ」

藪田のほうが逆に逡巡をおぼえていた。

「このお役目、拙者におまかせくださいまし」

根来がそうこたえたのは、当然だった。

「かならずうばってくれ。手助けはいたす」
助八はそういった。
すでに暁の気配がしのび寄っていた。
根来は一礼して、この場を立ち去った。

四

翌々日。
ひさしぶりの太陽が頭上にまわり、人はみなおのれの影をうしなった。初冬、小春日のほかほかとした玉のような晴れた日である。
芝、愛宕の野はあたたかな枯色を見せ、天徳寺境内の間垣には山茶花が咲き、雀がおりてきて餌をあさっている。きびしい冬がはじまる前のうつくしい季節である。
天徳寺の本堂から裏手へまわった一画、尾張家の墓地に入ってきた三人の男の姿がある。
成瀬隼人正、刈谷新伍、三宮九郎の一行である。隼人正の乗物は方丈の庭の一隅にひかえている。隼人正は一昨日の墓参につづいて今日も藩祖義直の墓参にあらわれた。寺側では方丈の一部を休息所としてむかえると、隼人正は住職の読経を辞退して墓

地へむかったのだ。住職は一昨日につづく今日の墓参にやや奇異の念をいだいたが、もとより詮索などは無用であった。
隼人正一行はまっすぐに義直の墓の前にすすんだ。
一昨日墓前にそなえた香華はまだいきいきとしたうつくしさを見せている。あたりは塵ひとつなく掃ききよめられており、箒の目があざやかである。
一昨日同様、隼人正らは墓前へすすんで、数珠をまさぐり、合掌して、祈りをあげた。
境内や門前のにぎわいにくらべると墓地一帯は閑寂なおもむきにつつまれている。
隼人正の墓参が一区切りついたと見られたとき、
「成瀬隼人正どの、今日またご足労をいただき、まことにかたじけない」
どこからともなく、ひくい声がひびいてきた。一昨日きいた藤林上総助の声である。
「藤林上総助、ならびに甲賀三郎、約束どおり誓書をたずさえ返事を持参してまいった」
隼人正がそうこたえた。
「かたじけのうござる。尾張家と伊賀甲賀者が手をむすべば鬼に金棒。今後が大層たのしみでござる」
義直の墓石の裏から上総助の声はきこえたが、上総助の姿も甲賀三郎の姿も見えな

かった。一昨日、曲者がちかくに潜伏していた様子なので、きびしい警戒をしているのであろう。

「あらためてもらおう」

隼人正がそういって、桐箱に入れた誓書を墓石の背後へさしだした。

そのとき、墓地をかこむ杉林の一角から一陣の風が吹きおこった。風は砂塵をまきあげて、隼人正らに吹き寄せた。

三人ともおもわず、やや面をそむけた。

その一瞬、

シュッ

矢羽が空を切ってとぶいやな音がひびいた。

矢羽は墓石の背後から手をのばして桐箱をつかもうとした男の首を右から左へつらぬいた。

「ううっ……」

その男は桐箱をつかみそこない、吹き飛ばされるように体が横転した。

桐箱は墓石のうしろに落ちた。

「曲者だっ」

「追え！」

「杉の木の梢におる」

隼人正がほとんど同時に声をあげた。

首を射ぬかれた男は上総助でも甲賀三郎でもなかった。上総助の輩下の伊賀者だった。

上総助と甲賀三郎は墓石から身をのりだし、誓書の入った桐箱へ手をのばした。

が、それよりも一瞬はやく、墓石の背後をとても人間技とはおもえぬ俊敏な白い影がかすめた。上総助と甲賀三郎よりもはやく、その白い影が桐箱を口にくわえた。

白い影は、紀州根来の山に生息する根来犬である。

上総助と甲賀三郎にしてみれば、まさかの油断があった。墓地周囲の人影には万全の注意をはらったが、犬にまでは注意がおよばなかった。戦国のころ、信州の川上犬とともに忍犬としてつかわれた根来犬が今の世につかわれているとは信じられなかったのだ。

上総助、甲賀三郎、さらに刈谷新伍、三宮九郎などが飛ぶように墓地を疾った。

根来犬はまっしぐらに墓地を駆けぬけた。

その先に、人影が待っていた。杉林の梢から矢を射はなった曲者である。

曲者は根来犬がくわえてきた桐箱を手にするや、風のように天徳寺境内を疾走した。

四つの人影もそれを追って殺到していった。

白い根来犬は追ってくる四人にむかって果敢に突進していった。尾をひくくさげ、両耳を伏せ、均整のとれたしなやかな体で突進し、四人の足もとを目まぐるしく駆けまわった。

機を見て、跳躍して顔面を奇襲したり、懐ふかく飛びこんだり、足もとを攪乱して、四人の追跡をしきりにさまたげた。根来犬の生来の闘争本能と忍犬として訓練された闘争技術がくわわって、見事なまでの戦闘と駆け引きをくりひろげた。

その隙に桐箱を手にした曲者は境内を駆けぬけ、隣接する青松寺の横手を一気に疾走して、増上寺西側の切り通しへでた。

根来犬との戦闘と駆け引きから、ようやく上総助が抜けだして、曲者を追った。さらにすこしおくれて、甲賀三郎が抜けだして曲者を追跡してきた。

切り通しを一気に駆けぬけた曲者は御庭番根来勘左衛門である。

根来は増上寺の裏側の道をひたはしりにはしった。尾張家の誓書をおさめた桐箱は根来の懐中ふかくおさめられている。

根来は懸命にはしった。伊賀と甲賀の忍者が後から必死で追走してくるのを察知しながらはしった。

増上寺の裏側は、金地院、瑠璃光寺、通元院、瘡守稲荷、子権現、エンマ堂、宝珠院とつづく寺域である。

根来は健脚にものをいわせて、つぎつぎに寺域の境内をぬけた。

（ふり切ったか……）

とおもったが、まだ背後に追いすがってくる忍者ふたつの影があった。

太陽の真下を根来は疾走した。徐々にではあるが、追いつめられてきたのがわかった。

追ってくる伊賀者、甲賀者も根来以上の健脚であり、したたかさだ。

あと二つ境内を駆けぬければ、寺域から赤羽橋のたもとのひろい火除地にでられる。そこまでくればなんとかなると根来はおもった。

しかし、上総助と甲賀三郎の追跡は急である。

じりじりと根来は間隔をつめられてきた。天徳寺の境内からでるとき、半丁ばかりの間隔があったが、四半丁につめられた。

根来はひろい火除地を懸命に駆けた。

火除地の先は土手になっており、その下を渋谷川の下流赤羽川がながれている。川には赤羽橋がかかっている。

死にものぐるいの逃走はまだつづいた。けれども、それにもやがて終わりが見えてきた。追われる者と追う者との間隔がついに四、五間になった。

追う者には余裕があり、追われる者にはもう余力がほとんどのこっていなかった。

それでも根来はあきらめずに必死で逃げた。自分なりには、うばった誓書をまもりとおす自信がまだのこっていた。ここで誓書をうばいかえされてしまったら、一年半も成瀬屋敷にひそんでいた苦労が水泡に帰してしまう。

根来はもう気力だけで駆けた。

土手を駆けのぼった。

根来は赤羽橋には見むきもしなかった。

土手の際は赤羽川へおちこんでいる。水面までの高さは三丈はある。

追手も土手を駆けあがってきた。

万事休す、と見えたとき、根来は懐中から桐箱をとりだした。そして必死のおもいで桐箱を土手下へ投じた。

追ってきた上総助と甲賀三郎は唖然となった。

桐箱は空中に弧をえがいて、赤羽川へ落下していった。予想もしなかったことだ。

上総助と甲賀三郎は顔色をうしなって、土手際から下をのぞきこんだ。

赤羽川は真昼の太陽の日をあびて悠々とながれている。上流渋谷川はいくえにも湾曲し、まがりくねっているが、赤羽橋のあたりからは増上寺の南側をながれ、一路海にそそぐ。

その赤羽橋のあたりの土手下で、川に釣り舟を浮かべて鮒釣りをしている年ごろ三十代の釣り人がいた。

釣り人は今しも土手の上から降ってきた桐箱に目をとめ、にやりとした。今時、のんびりと赤羽川に釣糸をたれているのは、藪田助八である。

桐箱は助八の数間先におちた。が、手をのばしてひろえぬ。助八は立ちあがり、櫓をこいだ。

すこし漕ぎ寄せ、助八はタモを手にとり、桐箱をすくいあげた。

土手を見あげると、二人の男がなにやらあわただしくさわいでいる。助八は二人の罵声を尻目にゆっくりと櫓をこぎ、赤羽川を悠々とくだっていった。

五

誓書

尾張継友もし将軍襲職いたし候はば、御庭番を廃止し、伊賀者甲賀者を隠密役と致すべきことを誓うもの也。仍て件の如し

享保二年十月五日

徳川継友（花押）

藤林上総助殿

甲賀三郎殿

桐箱におさめられた誓書は釣り人に変装した藪田助八によって、裏霞ヶ関にある御側御用取次、加納角兵衛の屋敷にもたらされた。

「ううむ……」

誓書をひらいてみた加納は一言うなって、腕をくんでしまった。

「たしかに尾張継友さまの誓書にまちがいないようでございます」

藪田が一言そえると、またもや加納は、

「ううむ」

とうなった。

「誓書にはしたためてございませんが、伊賀者、甲賀者が上様をあやめる約定がこの前段にございます」

「尾張め、とんだきたない手にでてきたものじゃ。紀州と尾張の決着はもうついたと申すに」

加納は尾張藩の執念ぶかさにおどろくおもいがしているのだ。

「尾張徳川さまというよりは、むしろ成瀬隼人正の妄執というべきものでございましょう。成瀬は一昨年、自分の策略が紀州家にやぶれたと信じているものとおもわれます」

「成瀬がうごきだすとうるさい。この誓書が手に入って、本当によかった。これで成瀬をたおし、尾張家をいつか消すことができるかもしれぬ」

加納はめずらしく藪田の前に本心をさらした。

「伊賀、甲賀はなにがなんでも御庭番を廃し、おのれらが隠密役に復帰するつもりのようです」

「といっても、御庭番はすでに幕法でさだめられた役職である。簡単にやめられるものではない。しかも御庭番は上様じきじきにおかんがえになられた役職じゃ。なんでも伊賀甲賀者ととりかえられようか」

しかも御庭番は加納の手足となっているものだ。

吉宗は分家の紀州家から本家に入って将軍をついだのだから、本家の家臣たちではつかいづらいのは当然である。吉宗としてはどうしても自分直属の隠密機関を持ち、それをおもう存分につかいたかったのである。

吉宗にしろ、加納にしろ、幕府の伊賀者、甲賀者にたいしてなんの恨みもない。きらうべき理由もない。だからといって、幕府隠密役に任ずべき理由もないのだった。

「尾張家も、伊賀甲賀もこの誓書で首根っこをおさえられたというべきでございましょう。もう身うごきできますまい」

藪田は自分のかんがえをいった。将軍と尾張家との確執、御庭番と伊賀甲賀の暗闘はこれで結論がでたというおもいであった。

「首根っこはおさえたが、まだ終わりとはならぬぞ。これだけは簡単にけりはつけられぬ」

うごかしがたい証拠を手に入れながら、加納は即刻、尾張家退治、伊賀甲賀追放の処置にでるつもりはなさそうだ。そうしたところが加納の頭のよさであり、慎重さだと藪田はおもった。

「今尾張家をつぶせば、水戸家が動揺いたすかもしれません」

藪田は加納の心中を読んで口にした。

「まだ上様が将軍になられて一年と半年しかたっておらぬ。老中、若年寄らはいずれも本家の子飼いじゃ。まだ上様になじんでおらぬ。戦々兢々（せんせんきょうきょう）として上様の新政をうかがっておる。したがって上様の基盤はまだかたまっておらぬ。上様がおもいきった手を打つことができるのは、まだ二、三年先であろう」

「まことにもって……」

藪田は加納の前に頭をさげた。

（まだまだおれは目先のことしか見えておらぬ）

と藪田はおのれをかえりみた。

今尾張家を強引にとりつぶせば、御三家のもうひとつ水戸家を動揺させるばかりではすまぬのだ。幕府の屋台骨ともいうべき老中、若年寄らが疑心暗鬼（ぎしんあんき）することになる。そうなっては幕府政治をとっていかれなくなってしまう。

「急いてはことを仕損じる。上様はまず自分のまわりをかためてゆかねばならぬ。手を打たねばならぬことがいろいろある」

「では尾張家と伊賀甲賀者の処置はどういたします」

やや不安になって藪田はたずねた。

「むろんきびしく処置はとる。しかし、御三家廃絶、伊賀甲賀の追放をやるのはもうすこし先のこととなろう」

「伊賀甲賀が上様暗殺にたちあがりましたら、どうなされます」

「それをはばむのは御庭番の役目じゃ。伊賀甲賀の動向もきびしくさぐっておいてもらいたい。尾張家のうごきについても同様じゃ」

「うけたまわりました」

藪田はそうこたえるしかなかった。

「上様はこれから、おもいきった政治のご改革にあたってゆかれる。難問続出じゃ。御庭番の仕事も今後ますますいそがしくなるぞ」

加納はそういったが、これから続出する政治上の難問は加納角兵衛と有馬四郎兵衛

が始末してゆかねばならぬことがおおい。新政の舵とりは二人にかかっている。加納は今、天下一大変な立場にたっているのである。

そのとき、廊下にしずかな足音がして、襖がひらいた。ここは加納の屋敷の客間ではない。加納自身の居間である。

やがて、もう一度襖のひらく音がして、腰元が目のたかさに盆をさげて、茶をはこんできた。武家屋敷では、公式には女は客の応接はしないものである。

加納が腰元の顔をながめた。

「そのほう、名はなんと申す」

加納がたずねた。

ここ一年半のあいだに加納は紀州藩士から抜擢されて直参となり、御側御用取次の重職に任じられて、裏霞ヶ関に屋敷を拝領した。加納自身おもいがけぬ出世をしたのである。にわかに江戸の一等地に屋敷をかまえて、家来をかかえ、奉公人を召しかかえた。加納は公務に多忙で、自邸の奉公人の顔さえすべてはおぼえていなかった。

「せつ、と申します」

十七、八歳くらいの腰元はやや顔をあからめてこたえた。奉公にあがるとき、殿様のお目につけば、お手がつくかもしれぬといわれていたのかもしれぬ。

加納はうなずいただけで、もう一度腰元の容姿をながめた。

それで腰元はいっそう顔をあからめた。

加納は幕府の重職についたとはいえ、まだ四十の坂をむかえたばかりの壮年である。腰元は茶をおいて、居間をでた。

入居して間もない屋敷であるから、調度も飾道具などもあたらしい。居間には机と飾り棚がおかれ、次の間に文庫と小箪笥がおかれている。

加納は一口茶を喫してから立ちあがり、誓書をおさめた桐箱を文庫の引出しにおさめた。

尾張家と伊賀、甲賀の陰謀の証しはかくて加納の手の中におさまった。

「では、これにて失礼申しあげます」

藪田は挨拶をして、屋敷を辞去した。

六

霞ヶ関一帯の夜がふけた。

このあたりは名だたる大名屋敷の地帯である。井伊、黒田、池田などの上屋敷のほか、旗本では幕府の重職者の屋敷がならんでいる。

しかし夜ともなると、静けさとさびしさはひとしおである。辻番が各辻にあるほか、

人通りはほとんどなくなる。三十六見附の内側だけに、暮れ六つ（六時）に見附の門がしまると、人影がめっきり減ってしまうのだ。

加納角兵衛の屋敷がある裏霞ヶ関でも、静けさとさびしさは同様である。大名屋敷の森や林のなかから木菟や梟の鳴き声がきこえてくる。

白い月が江戸城の濠のむこうの空にかかっている。

加納の屋敷の母屋では、加納の居間につうじる廊下にとつぜん人影が浮かんだ。それも矢絣の御殿衣装をきた女の影である。廊下のところどころに金網行灯がともされているのである。

女は厠にたつふりをして、屋敷の奥からここまできたのだ。行灯のうす明りに浮かんだのは、今日加納の居間に茶をはこんできたせつという腰元である。

せつは特別な技を身につけているのか、やや小ばしりにあるいているのに、足音がまったくしない。白い息だけがわずかに廊下にのこった。

せつは居間の前で立ちどまり、周囲をうかがった。

加納は今もっとも多忙な男で、夕刻ちかく、城中から使いがきて、今日二度目の登城をしていた。加納は城中で寝泊りすることが月のうち十日ばかりある。

せつは音もなく襖をあけた。一部屋あって、つぎが加納の居間である。間取りや部屋の様子はわかっている。

せつはためらいもなく居間へむかった。もうひとつ襖をあけた。

ここで手燭に火をともした。ここならば外から明りを見られることがない。

せつは居間の机と飾り棚をしらべた。が、めざすものはなかった。

せつは次の間へうつった。次の間の文庫と小箪笥が目に入った。一瞬ためらったのは、どちらを先にあらためるかまよったのだ。

せつの目が文庫の把手にとまった。まっすぐに文庫の前へすすんだ。

文庫の扉をひらいた。手燭をかざすと紫色の紐でむすばれた桐箱が文庫のほぼ中央におかれていた。

せつはためらうことなく桐箱をつかんだ。

せつは今年の三月、江戸城吹上で藪田と決戦してたおれた伊賀者百地日向の一人娘である。加納が裏霞ヶ関に屋敷を拝領したときから手蔓をもとめ、今年春から奉公がかなったのである。百地日向が手塩にかけてきたくノ一でもあった。

せつは加納の居間をでて、母屋の勝手口へむかった。

勝手口につくまで、さいわい誰にも見つからなかった。武家屋敷では大抵、夜廻りがおこなわれるが、せつはその時刻の合間をねらったのだ。

勝手口の潜りをあけて、外へでた。せつにとってはこの桐箱をうばいとることが父百地日向の仇討ちでもあった。

白い月光がせつの姿を浮かびあがらせた。せつは屋敷の庭へむかった。表門も裏門も門番所に藩士がつめているので、そこからの脱出はかんがえていなかった。

木戸をぬけて、ひろい庭へでた。庭のむこうには屋敷をとりかこむ塀が切り立っている。せつは塀をこえて屋敷を脱出するつもりであった。

そのとき……、庭のかなたの闇の中に白い影が浮かびあがった。白い影は植込みと植込みのあいだから姿をあらわした。

今日、天徳寺の墓地で、桐箱をくわえてうばった根来犬である。その根来犬は加納の屋敷内に飼われていた。

根来犬は鋭敏な聴覚で、屋敷内に異変がおこったのをはやくもさとったのだ。根来犬にかぎらず、川上犬や甲斐犬、紀州犬なども無駄吠えはけっしてしない。

音もなく、根来犬は屋敷の庭をかけた。せつがいる地点にむかって、一直線にかけた。

せつははやくも気配を感じて、根来犬の追跡をさとった。

(しまった!)

唇をかむよりはやく、せつは衣装の裾をみだして駆けだした。

前方に屋敷の塀が見えている。せつは一心に駆けた。

しかし鍛えぬかれた根来犬とでは競争にならぬ。根来犬は疾風のように飛んできた。

たちまち、追いせまられた。

シュッ、シュッ

せつは振りかえりざま手裏剣を投じた。しかしいずれも体すれすれをかすめただけで、命中はしなかった。せつは塀をめざして必死で駆けた。

根来犬はさらに追った。

塀までの距離はまだ十間ばかりある。

(もう駄目!)

そう判断した。

ピピイッ、ピイッ

せつは指を口にあてて、夜空にむかって口笛を鳴らした。

笛の音はしじまをやぶって夜空にひびいた。

根来犬が尾をさげ、前脚をあげて飛びかかってきた。

せつはからくも根来犬の攻撃を避けた。

二度、三度、根来犬と必死の応酬をかわしていると、前方の塀にすっくと黒い人影の立ちあがるのが見えた。

せつはそれにむかって死力をふるって駆けた。

根来犬がまたもやおそいかかったとき、せつは桐箱を塀の上へむかって高々と投げ

た。

桐箱は空中を飛んで、塀の上にたつ人影につかみとられた。

人影は塀から屋敷の前の路上にとびおりた。この道は潮見坂あるいは裏霞ヶ関坂と呼ばれる坂道である。坂は東にむかってくだり、昼間ならば江戸湾が眺望できる。

人影は坂道をまっしぐらに駆けおりていった。この人影は伊賀者、藤林上総助である。

月光のふりそそぐ坂道の前方には、黒田家の屋敷の塀の内側からおおきな松の枝がのびて、天上をおおっている。上総助はたちまち松の枝の下にさしかかった。

月光がさえぎられて、頭上がくらくなった。

そのとき、ふわりと頭上の枝から大鳥が翼をひろげたように舞いおりてきた。

(敵だ!)

上総助は瞬間さとった。御庭番の手だれが加納の屋敷にちかづく曲者にそなえて、松の木にひそんでいたのだ。

上総助は背中の忍び刀の柄に手をかけた。

大鳥は上総助の頭上めがけて落ちてきた。

(やっ!)

口中に気合をほとばしらせ、上総助は一間ほど横にとんで忍び刀を抜き打った。

すさまじいばかりの手ごたえがかえってきた。

大鳥は真っ二つに両断されて地におちた。が、それは松の枝であった。

本物の敵は一瞬、間をおいて黒い影となって梢から落下してきた。

落下しながら黒い影は着地の寸前、一刀を真横に振りぬいた。

上総助の体が薙ぎはらわれて、胴体が上と下とに分断された。と見えたとき、上総助の体は忍装束からすっぽり抜けて、外へとびだしていた。

黒い影が斬りはらったのは上総助の影と装束であった。

「伊賀忍法空蟬……」

ひくい声が闇のなかにもれた。

上総助は帷子姿で忍び刀を地から抜きあげ、空へむかって斬りはらった。もう一度したたかな手ごたえがのこって、黒い影は地にくずれおちた。

忍法〈花の匂い〉

一

大奥の庭に夕闇がちかづいた。

桃の花がおぼろな夕闇のなかにしずみかけ、駘蕩たる空気が大奥の庭をつつみ、そこはかとなく春情をかもしている。この一時が昼から夜への境目である。昼の世界が没して、夜の世界が地上にあらわれる。

大奥御殿も夕闇のなかにしずみかけている。つい今しがた、大奥と中奥とをむすぶお鈴廊下の御錠口の杉戸がしまり、内と外から海老錠がおろされた。この御錠口がいったんしまると、大奥御殿は中奥と表御殿からまったく切りはなされた別世界となる。大奥は文字どおり女だけの巨大な御殿だ。大奥と中奥とを行ききできるのは将軍しかいない。

しかしその将軍さえ、いつ何時でも〈奥泊り〉ができるわけではない。その日には夕から宵のうちに、小姓または御納戸をつうじて大奥へつたえおかなければならぬ。

日がおちて一刻（約二時間）ばかりたったころ、御錠口の鈴が鳴った。御錠口には萌黄の打紐でつないだおおきな鈴がそなえつけてある。将軍の奥入りがある場合、小姓と御納戸がついてきてその鈴を鳴らすと、大奥から御年寄と表使がむかえにでてきて、将軍を送迎し、佩刀の受けわたしをおこなうのである。

待つことしばし、お鈴廊下に御年寄の今出川が表使お千代をしたがえてあらわれた。御錠口にはお鈴番として女中三人がつめており、海老錠をあけ、杉戸をひらいた。着流し姿の吉宗が廊下の明りのなかに浮かびあがった。吉宗は男ざかりで、体が大きい。しかも顔は浅ぐろく、ひきしまっている。紀州藩主から将軍になってまだ年月があさく、野性的なにおいをうしなっていない。

小姓が無言で吉宗の佩刀をお千代へわたした。このとき両者は口をきくことはおろか、手が触れ合うことさえ厳禁されている。禁をやぶれば、たちまち謹慎を命じられることになる。

送迎がおわると、杉戸がふたたびしまって、小姓と御納戸の姿が消えた。

吉宗はゆっくりとお鈴廊下をあるきだした。

廊下の左右は庭である。庭は闇のなかにしずんでおり、おぼろ月の光が降りそそいでいる。桃の花がかすかににおう。

吉宗は一度だけ桃の花のほうへ視線をおくったが、あとは左右を見むきもしないで

廊下をあるいた。

そのとき、庭の闇のなかで木の葉がゆれ、人影がかすめた。人影は植込みの陰に今まで身をひそめていたようだ。

月光の下にかすかに浮かぶその人影はあでやかな御殿衣装に身をつつんだ腰元姿である。袂や裾をたくしあげもせず、お鈴廊下へちかづいていった。

廊下からすこしはなれたところに、庭石がいくつか据えてある。腰元はその庭石の陰へ身をかくし、懐から長さ一尺くらいの円筒状のものをとりだし、口にくわえた。

今出川が先頭にたち、吉宗を中にはさんで後尾に佩刀をかかえたお千代の三人がお鈴廊下のむこうからやってくる。その姿がななめ向かいに腰元のほうから見えた。

腰元は庭石の陰にひそんで、吹き矢をつがえた筒を口にふくんだ。腰元は吹き矢のねらいを吉宗の顔からやや下の喉につけた。

吉宗は大股でちかづいてきた。体が大柄なために、喉へのねらいもつけやすかった。太くたくましい喉である。中央の喉仏をねらった。

一歩、また一歩距離がちぢんだ。ちかづけばちかづくほどねらいは正確になる。しかしそのぶんだけ、発見される危険がおおきくなる。危険をおかして、精いっぱい吉宗をちかくにひきつけた。

距離は四間ほどまでちかづいた。吉宗の喉仏のふくらみさえ見えてきた。

腰元は息を大きく吸いこみ、一瞬とめた。

シュッ

おもいきり息をはなつと、音をたてて約一尺の長さの吹き矢がとんだ。

吉宗の喉元にふかく吸いこまれたと見えた瞬間、背後にいた表使がつと前にすすみでた。

「やっ」

表使は気合を発すると同時に、胸の帯にさしていた扇子をぬきとるなり、発止と矢をたたきおとした。

「曲者でございます！」

表使のお千代の甲高い声が静寂をつきやぶってひびいた。

腰元が第二矢をふくんで発する余裕はとてもなかった。

「お出合いくだされっ。曲者が侵入いたしております」

お千代はもう一度声をあげるなり、佩刀を吉宗にあずけて、身をひるがえした。御殿衣装が夜目にもあざやかに宙に舞った。

お千代はお鈴廊下から庭にとびおり、真一文字に庭石の陰にひそむ腰元めがけて疾走していった。御殿衣装の裾がわれて、白い脛、内腿までが見えた。

腰元は庭石の陰から姿をあらわし、すぐには逃走しないで、お千代が攻撃してくる

のをむかえ撃った。

「やっ」

お千代はふたたび気合を発し、懐剣をかざして打ちかかった。

腰元はそれをかわしもせずに、逆におおきく踏みこんでいった。

お千代と腰元の体がまともに激突した。激突した瞬間、腰元の吹き矢の筒がお千代の胸の下、帯の中央をまともに突いていた。

ギャッ

絶叫をあげて、お千代の体がとび、もんどりうってお鈴廊下のちかくに落ちた。あざやかな一瞬の荒技だった。

腰元が逃走にかかったのは、その直後からだ。危機一髪の急場にのぞんで沈着冷静、女にはめずらしいほどの状況判断と果断な実戦の駆け引きである。

腰元は御殿衣装の裾さばきもあざやかに、大奥の庭の闇の中を疾走した。

御錠口につめていた御錠口衆が、さいぜんのお千代の呼び声でばらばらと駆けつけ、ただちに追跡していった。

「出合えっ、出合え！」

今出川のさけびに応じて、大奥見廻りの女中たちが駆けつけ、追跡にくわわった。

なんといっても大奥である。曲者を追うのは御殿女中ばかりである。逃げる曲者も

女である。

くだんの腰元は逃げ足もはやかった。追跡してくる女中たちをたちまちのうちにひきはなした。庭の樹木や植込み、池、石組、花壇などのあいだを縫ってはしりぬけ、深い闇のかなたに消え入った。

お鈴廊下のあたりで騒ぎはつづいている。

「曲者でございますぞ」

「みなみな、お出合いくだされ」

女中たちの甲高いさけび声が潮騒のように遠くからきこえてくる。

腰元は大奥の庭々を突っ切って東南の隅に位置する長局まで逃げこんできた。

長局の雨戸がずっとむこうまでつらなっている。その雨戸のつきたところが、長局の勝手口だ。

腰元が勝手口の木戸をひらくと、杉戸が手前にひらいた。腰元はするっと勝手の中へ入りこんだ。

江戸城大奥はおおきくわけると、御殿向、長局、御広敷の三つからなる。御殿向は将軍と家族が住まう場所で、長局は大奥女中たちが住むところである。御広敷は大奥の用務をとりあつかう役人たちがはたらく詰所である。この大奥役人たちは男であるから、むろん長局や御殿向に立ち入ることはできないのだ。

くだんの腰元は長局のながい廊下を楚々たる風情であるいた。途中、長局の女中たちに出会ったが、誰にもあやしまれなかった。

長い廊下をつきあたり、鉤の手にまがったところまでくると、正面に銅板の枠に縁どられた杉戸が立ちふさがっていた。この杉戸が長局と御広敷との境界である。滅多にあけたてされることはない戸口である。

腰元はあたりをうかがった。人影はどこにもない。と見るや、腰元は胸下にしめた帯を一気にとりはらった。巻きつけてあるのではなく、付け帯であった。ついで御殿衣装をぬぎおとすと、下から男の黒い着物があらわれた。さらに御殿女中の髷をぬぐと、下から男の顔がでてきた。あっという間に腰元が男になりかわった。というよりも、もともとの男が女に変装していたのであった。

その男は杉戸にとりつけてある海老錠をあっという間にあけ、杉戸をひらいた。御広敷の世界がそこにぽっかりと口をあけた。

一歩戸口をくぐると、そこはもう御広敷である。男はすばやく杉戸を閉めた。男は御広敷のながい廊下を悠々とすすんだ。廊下は金網行灯の光で照らされている。七ツ口のちかくに添番詰所と伊賀者詰所がある。男はその伊賀者詰所へ入っていった。

添番と伊賀者は詰所につめて番衛をする役目である。その詰所には紋のついた黒い木綿羽織を着た伊賀者が数人詰めていた。

「青山殿、首尾はいかが」

そのうちの一人が入っていった男にひくい声でたずねた。腰元に変装して御殿向に潜入したのは、青山采女という伊賀同心であった。

「残念ながら、しくじった。今ごろ御殿向は大さわぎをしているだろう」

吉宗暗殺に失敗した青山采女はいった。色白で細身、小柄で、華奢な体つきは女に見まごうものであった。

二

大奥に大事が突発したとき、御側御用取次加納角兵衛はまだ城中の部屋にいた。加納が城をさがるのは、はやくても宵、おそければ夜更けにいたる。現在、幕閣においてもっとも多忙なのが加納と有馬四郎兵衛の両御側御用取次だといわれている。

藪田助八も御台所御門のちかくにある御庭番詰所にまだひかえていて、大奥に大事がおこったことをきいた。

藪田はおもいあたる節があって、ただちに本丸大廊下につきあたりにある御側御用取次の部屋へはしった。

加納はその件でさいぜん部屋をでていって、不在であった。
藪田は控えの間で待った。
半刻（約一時間）余たったころ、加納がもどってきた。
「大事がおこった。お鈴廊下で上様が腰元に吹き矢を射かけられた。すんでのところで、お命をひろわれた」
もう時間がたっていたので、加納は冷静さをとりもどしていた。
いつかそうしたことがおこるのではないかと危惧していたことが現実におこったのだ。
「その腰元はいかがいたしました？」
藪田はまずそれが気になった。
「表使のお千代が矢をたたきおとし、賊の腰元に打ちかかったが、手もなくやられてしまった。その腰元、女ながらも達者な武芸を身につけておるとのことじゃ。追跡を悠々とふり切って大奥の庭の闇へ消え去った」
「上様のお命に別条がなくて幸いでした」
藪田はほっとしていったが、賊の腰元に腑におちぬものをおぼえた。
お千代という表使は吉宗が紀州家の奥女中からえらんでつれていった者である。機転がきくうえに武芸達者なしっかり者だ。お千代がついていたから吉宗は無事だったのだろう。が、そのお千代を手もなくひねっていった腰元というのが藪田には異常におもえたのである。
「大奥中をあらためておるが、まだその腰元は見つかっておらぬ。それが気がかりじゃ」
「御広敷もおあらためになられましたか」
「あらためたのは御殿向と長局であろう」
「御広敷から潜入いたしたのやもしれませぬ」
藪田は直感的に、吉宗をおそったのが男ではないかという気がしたのである。藪田もお千代を知っているが、彼女をたった一撃でたおすような女がいるとは信じられなかった。
「男が腰元に変装したというのか」
加納はすぐに藪田の意中を察した。
「御広敷には伊賀者がおりますれば」
「左様なこともないとはいえぬ。御広敷もしらべさせよう」
と加納はいったが、もう手遅れだと藪田は思った。伊賀者だとしたら、今まで証拠をのこしておくようなことはまずするはずがなかった。
加納は御側役を呼んで、御広敷捜索の指令を大奥へつたえさせた。

「伊賀者と甲賀者が手をくんで、本当にうごきだしたのかもしれません。だとすれば、その背後には当然尾張がいることでしょう」

旧冬、尾張家では伊賀甲賀にたいして尾張藩主継友の名で誓書をだしていた。

誓書

尾張継友もし将軍襲職いたし候はば、御庭番を廃止し、伊賀者甲賀者を隠密役と致すべきことを誓うもの也。仍て件の如し

享保二年十月五日

徳川継友（花押）

藤林上総助殿
甲賀三郎殿

藪田は加納の屋敷で見た誓書を一字のあやまりなく記憶していた。これは加納屋敷に潜入していた伊賀者百地日向の娘せつと藤林上総助の手によってうばい去られて、今加納の手許にはなかった。徳川継友の花押が真物であるか偽物であるか、調査の途中においてうばわれたのだった。

「尾張継友公はみずから将軍たらんとしてうごきはじめたのか」

加納はうめくようにその言葉をもらした。

「左様かんがえられます」

加納は沈黙した。

ながい沈黙がつづいた。

尾張家と紀州家は八代将軍位をめぐって血で血をあらう暗闘をくりひろげた末に、紀州家の吉宗が将軍位についたのだった。それから二年後、継友は第二の挑戦にたちあがった。継友にこれを決断させた原因が伊賀者甲賀者の隠密職復帰作戦であろう。吉宗は将軍位につくや、御庭番十七家をつくって将軍直属の隠密職とした。それに猛然と反発したのが、かつて隠密職にありながら、泰平の時代がうちつづくとともに江戸城の門番や大奥の番衛におちぶれた伊賀者甲賀者たちであった。

尾張家と伊賀者甲賀者がむすびつく要因がここにあった。

「上様がもし今お亡くなりあそばされたら、尾張継友が将軍位におつきになられるおそれがある。二番手は水戸の綱條公であるが、こちらはすでに老齢である」

加納は沈黙をやぶった。

「御庭番をおつくりになったことが、とんだ騒ぎをひきおこしたものです」

藪田は自分がその御庭番の組頭であるだけに、こころぐるしいおもいを避けられなかった。

「だからといって、御庭番をやめるわけにはいかぬ。現在の伊賀者甲賀者には江戸城門番と大奥玄関番が適当な役どころじゃ。隠密役には荷がおもかろう。うちつづく泰平のあいだに体はなまり、頭もふやけた」

加納にしてはやや感情的な言葉を吐いたものである。

「みなが腑ぬけになっておるならば結構でございます。されども、慶長、元和、寛永のころの先祖たちに匹敵する技倆と力量をもつ者たちがいくらかのこっております。これが少々厄介でございます」

まだ捨てたものではない連中が存外、野に埋もれているのである。

「御庭番には幕府の力がついておる。それでも相手は強敵か」

加納は鬱然たる表情でいった。

「藤林上総助、甲賀三郎などはまだ往時の忍者の面影をとどめております。両人に伍する者は何人もおりましょう。あなどることはできませぬ。伊賀者甲賀者の隠密役への復帰の願いは何代にもわたる悲願でございますから」

「厄介なことにぶちあたった。まだ上様は幕府に入り婿してから日があさい。政治をおおいにあらためているうえ、まだ上様の基盤はかたまっておらぬ。荒療治はできるだけしたくないところだ」

加納の気持がわからぬ藪田ではなかった。吉宗は生まれながらの将軍ではないし、江戸城でそだった世嗣でもなかった。紀州の片田舎からとつぜん降って湧いたように江戸城に天降ったにわか将軍である。周囲が吉宗を見る目も同様である。老中や大奥へも少々の遠慮はあるし、諸大名にたいしてもいくらかの遠慮がある。この二年間で吉宗はつぎつぎに果断な政策に取りくみ、実績をあげてきている。まだ当分のあいだは足もとで大紛争はおこしたくないのが本音だ。

「左様にございましょう。されども……」

と藪田は遠慮がちにいった。加納の苦衷が藪田にはよくわかるからだ。

「仕かけられた喧嘩だ。受けざるを得まい。伊賀者甲賀者であれ、尾張家であれ、上様にさからい申す者はゆるすわけにはいかぬ。断固たる処置をとる。荒療治もせざるを得まい」

加納は非情な決断をせまられたのである。

三

伊賀国、上野盆地の服部郷。

周囲は山また山の地域で、かつては交通至難の地であった。そのため京都や大坂に隣接しながら、隠れ里と呼ばれ、そこに忍術は発生した。その地理的条件は享保の時

代になっても、さまでかわっていない。

戦国のころ、伊賀には三人の上忍がいて、ほぼ土豪たちをおさえていた。すなわち、湯舟の藤林長門、喰代の百地丹波、服部郷の服部浄閑であり、このあたりが伊賀流忍者の源流である。しかも、藤林、百地ともに服部氏の流れである。服部家をもって伊賀忍者の本宗とするのは、この出自による。

服部浄閑は伊賀国内の争乱をよそに、壮年のころから諸国を遊歴し、三河松平家につかえた時期があった。これが徳川家と服部家のつながりの端緒であった。徳川家初代の隠密服部半蔵は浄閑の五男である。この半蔵の代に伊賀の土豪、郷士たちは徳川家につかえ、その縁で隣国甲賀の地侍たちも徳川家につかえて、さかんに隠密ばたらきをおこなった。おもえば、このころが伊賀者甲賀者の全盛時であった。徳川家の戦国の覇権取りに伊賀者甲賀者たちはおおいなるはたらきをした。

泰平の世となっても、三代将軍の寛永のころまでは、外様大名たちの動静探索に伊賀者甲賀者たちはさかんにはたらいた。しかし忍者は所詮、戦国の所産である。彼らがはたらき場を得ていたのはこのころまでである。その後は伊賀組、甲賀組を解体されて、ありきたりの官僚機構のなかに組み入れられていった。特殊技能に生きてきた彼らが一般機構に組み入れられたときに、彼らの存在価値はうしなわれた。組み入れられることをこのまなかった伊賀者や甲賀者たちは、徳川家すなわち幕府をはなれて、

諸大名につかえたり、故郷伊賀甲賀へかえって地侍の昔にもどったのであった。

服部家の流れをつぐ十蔵は祖父の代に、伊賀服部郷にもどってきた。今では一町歩にみたぬ農地を下人たちとともにたがやしながら悠々自適の暮しをおくっている。十蔵は齢すでに六十路にいたらんとする老人である。

十蔵は今日も春田の打ちかえしに余念がない。今は田を打ちかえして、初夏のころの畦塗や代掻、田植えにそなえるのである。四季を問わず、雨でも降らぬかぎり十蔵は田畑にでて農事にしたがっている。郷士、地侍とはいっても、日常の暮しは百姓となんらかわるところがない。

十蔵はこの暮しに不平不満をいだいたことはなかった。自分の何代か前に服部半蔵という忍術の名人がおり、伊賀者をひきいて徳川家の覇権獲得におおきなはたらきをしたことを知っているが、おのれは一介の田夫、百姓と認識をしていた。現在、幕府における伊賀者が没落していることに嘆きをおぼえたこともなかった。人の一生は時代とのめぐり合わせだというかんがえを根底にいだいているのだ。

農事にあきれば、十蔵は瓢につめた地酒をかたむけて、田の畦に寝ころび、周囲をめぐる山々や雲のながれを見ている。今は春たけなわであり、空には朝昼夕にかわりなく霞のように白い雲がただよっており、山は緑と光にかがやいている。しかも春は水のゆたかな季節である。谷川は涸れることなくながれ、伊賀川は滔々と豊富な水量

をながしている。これらは夏になると急激な変化をきたす。伊賀の夏は暑さがひどく、この上なく蒸すが、この季節には季節なりの趣（おもむき）がたくさんある。十蔵は伊賀の夏も好きである。秋も冬も、捨てがたいたのしさがある。

とまれ、十蔵は伊賀好きなのである。この地をでようとおもったことはなかった。十蔵には子はいるが、いずれもまだ幼い。はじめに縁組した女房は十五年のあいだ子を産まずに死んだ。二度めの嫁は十蔵より三十歳ちかくわかく、十一歳の長男を頭に九歳の次男、四歳の娘がいる。今十蔵は農事の合間に長男と次男に伊賀伝来の武術をしこんでいる。これが十蔵のおおきな楽しみになっているのである。

昼下り、十蔵等が畦で煙草（たばこ）を一服している折、加太越（かぶとごえ）から伊賀盆地に入ってきたと見える旅人の姿が目にうつった。がっしりとした体のたくましい男である。体に隙のない歩行をしているのは、この男がかなりの武芸の使い手であることをあらわしている。山村に土着した地侍か郷士と見えて、腰に脇差（わきざし）をたばさんでいる。伊賀甲賀に伝来する武術を習得しようものと当地に足をはこんでくる奇特な武芸者が今でも年に数人はいる。そのたぐいかもしれぬと十蔵は旅人を見て思った。

旅人は十蔵がやすんでいる畦にちかづいてきた。

十蔵は見るともなく、その旅人を見つめていた。

「よい天気でござるのう。田の打ちかえしでござるな。よくご精がでられる」

旅人は人なつこくいって、ちかづいてきた。

「百姓でござれば、農事は家のなりわいじゃ」

十蔵はごくあたり前の返事をした。

「左様、農事をわすれては農家はなりたたぬ。されども御手前は当地の郷士とお見うけいたすが」

その男は十蔵を自分と同様の郷士と見ぬいたようである。

「郷士、地侍といえばいささか聞えはよいが、実際は百姓とかわるところはない。年貢やほかの物成（ものなり）などで七分はもっていかれる。精をださねば暮しがたたぬのじゃ」

十蔵は相手をすこしはましな人物と見てそういった。でなければ、そんな余計なことは口にしない。

「伊賀服部郷といえば、忍者（しのび）の里、伊賀流発祥の地だ。この地にいたらば忍術（しのび）の道場なり修行の場などがあろうかとおもうたが、なんとも変哲もなき山と田畑の村じゃな」

旅人はこの地にやや失望落胆したかのようにいった。武芸修行にこの地をおとずれる者にはこうした人物がおおいのだ。

「お手前、武者修行に？」

十蔵はきいた。

「ききおよぶ忍者の里に興味がござってな。伊賀の本流といわれる服部家をたずねてまいった。服部十蔵どのをご存じであろうな」

「知っておるわさ」

十蔵はこたえた。

「これからたずねてまいるつもりじゃ。服部十蔵どのにお会いいたせば、忍術の精髄がいささか見られるであろう」

「さ、それはどうかな。もはや忍術の時代ではなかろうから」

十蔵はうけながした。

旅人は自分の目前にいる老百姓が十蔵本人とはおもってもいないのだ。

「忍術のほろび去る時代でもなかろう。時代はいつまた戦国争乱にもどるやもしれぬ。いつの日か忍術がふたたびもてはやされる時代がくるだろう」

確信をいだいているように旅人はいった。

「そうかな。そんな時代がまたくるとはおもわれぬ。おそらく忍者も忍術もやがてほろぶだろう。ところで服部十蔵にどんな用向きがあるのか」

十蔵がいうと、

「用向きは会って当人にはなす」

旅人がこたえた。

「だったら、いうたらいい。本人はここにおる」

十蔵がそういったので、旅人は一瞬、唖然とした。

「お手前が、服部十蔵どのでござったか。大変ご無礼をいたした。他意はござらぬので、ひらにご容赦おねがいいたしたい」

旅人はやや狼狽を見せていった。

「なに、服部の本流などは、今や田夫野郎にかわりなきものじゃ。お手前の見られるとおりじゃ」

十蔵はそういってわらうと、旅人も苦笑した。

「はずかしながら、現在幕府において小禄を食む、伊賀の本流丹波伊予助と申す未熟者にござる。服部十蔵様にお願いの儀があって、江戸より旅してまいった」

旅人がはじめてそう名乗ったが、十蔵はなんとも返事をしなかった。数年前にも、幕府伊賀組から人がたずねてきて、伊賀者甲賀者の衰退をなげき、十蔵に江戸への出馬をうながしてきた。十蔵はそれを固辞したが、相手はなかなかきいれず、執拗に懇願をかさねていった。さらにそれより二十年ばかりさかのぼるころ、やはりおなじ趣旨の伊賀者がここにやってきて、十蔵に江戸の伊賀者のたばねになってもらいたいという願いを申しのべていったものだった。むろんそれにたいしても十蔵は固辞していた。

「それは遠路ご苦労でござったな。ご芳志はかたじけないが、見られるとおり、わしの身ははや老いておる。江戸へでたとしてもものの役にはたち申すまい」

十蔵がそういったとき、とつぜん丹波伊予助が手を脇差の柄にかけて、腰をひねった。

伊予助の腰間から白刃が鞘ばしった瞬間、十蔵の首がころりと前に落ちた。と見たのは伊予助の一瞬の幻覚だった。

十蔵はおどろきの声もあげず、ひょいと首を前にかしげ、それまで喫っていた煙管をぽんぽんと鍬の柄にうちつけて吸い殻をおとしていた。

「やめい、伊予助、無駄なことじゃ」

十蔵はそういい、煙管でかるく脇差をうけとめ、発止と伊予助の手首を打った。

「ううっ……」

苦痛の呻きをあげ、伊予助は脇差を田におとした。

「腕だめしなど、無用のこと」

十蔵はかるく伊予助をたしなめた。

「かさねがさねのご無礼、申しわけござりませぬ。されども今の服部様の技倆を見るにおよんで、江戸よりここまで旅してまいったのが無駄ではなかったとわかりました」

伊予助は得たりとこたえた。

「年寄のかような手すさびなど、今の世になんの役にもたち申さぬ。伊賀の上忍だの、服部だのといったことは往昔の虚像にすぎぬ。今の世に役だたぬものは、なんの値打ちもござらぬ。伊予助どののおかえりなされ。幕府における伊賀者、甲賀者の苦衷は想像するにあまりあるが、今さら隠密役への復帰など夢のまた夢。覆水を盆にかえそうとするようなものじゃ」

十蔵は江戸の伊賀者たちがおかれている状況や、彼らが長年をついやして熱望していることについても承知していた。

「すでに末流とはいえ、いやしくも服部家といえば伊賀流の本宗。その当事者のお言葉としては、なんとしても情ない。伊賀も甲賀もまだほろびてはおりませぬ。忍者の技倆も気概も、さほど落ちぶれてはおり申さぬ。伊賀者甲賀者といえば、戦国において徳川家のためにはたらき、徳川家に覇権をもたらすためにおおいなる仕事をなした。そのことは東照権現さまも二代秀忠さま、三代家光さまもよくご存じだった。その後泰平がうちつづくあいだに、不幸にして将軍も幕閣も伊賀甲賀の勲功をおわすれになってしまった。今の八代さまにいたっては紀州からとつぜん本家入りなされたお方。伊賀甲賀のはたらきなど知る由もなきお方にてござる。かようなお方が御庭番なる隠密職をおつくりになった。隠密職としてはすでに百何十年も前から、幕府に伊賀甲賀

がおる。それをさしおいて、紀州家の庭方を幕府隠密役に任じるとはなんたることぞ。伊賀者甲賀者にたいするなんたる無礼。このことをこのまま放置いたしておくわけにはまいりませぬっ」

伊予助は十蔵につめ寄り、血を吐くようにいった。

「無駄なことはやめたほうがいい」

十蔵はただ一言で否定した。

「われわれの努力は無駄だといわれるか」

かっと燃える眸から火を吐くように伊予助はいった。

「時の流れはいたし方もない。伊賀甲賀の没落は時の流れによるもの。これをこばんだとて、西にしずみゆく太陽を東へもどそうとするがごときものじゃ」

「時の流れはあながち我が方に背をむけているとはかぎりませんぞ。さからう流れあり、またしたがう流れあり。時の流れもさまざまでございまする」

「伊賀甲賀に味方する流れもあるか？」

「ございますぞ。ふたたび伊賀者甲賀者を隠密職に復帰させたいという流れもございまする」

「信じられぬわ、そのようなもの」

吐き捨てるように十蔵はいった。

「もし真実そのようなおおきな時の流れがございましたら、服部様、いかがなされますや」

「もし仮に、そのようなものがござったら、この十蔵、老いの体に鞭うって、いささかながら、ひとはたらきいたそうではないか」

あるはずはないという信念にもとづいて十蔵は大胆な発言をした。

「服部様にお見せいたしたきものがございます」

伊予助はそういって、懐中から桐箱をとりだした。

伊予助が桐箱をあけ、中から、誓書をとりだすのを十蔵はながめた。

「これが時の流れか」

そういいながら十蔵はうけとった。

「左様にございまする。とっくりとご覧くださいませ」

十蔵はそれをひろげて読んでいった。

十蔵の顔に真剣な色があらわれ、しだいにそれが満ちてきた。十蔵はこころを揺すぶりうごかされてきたのである。前回、前々回のときにはなかった感動のあつい塊がつきあげてきた。

四

伊賀の太陽が西へかたむきかけた。

御斉峠（おとぎとうげ）の山並みが西日にかがやいている。

服部十蔵と丹波伊予助は若草のあざやかな伊賀街道をあるきつづけて、加太越をめざしていた。

伊予助は昨夜十蔵の屋敷に一泊し、今日昼前にふたりは服部郷を旅だった。十蔵としてはまったくおもいがけぬ旅立ちとなった。昨日伊予助に見せられた尾張継友の誓書がとつぜん彼を江戸への出立にかりたてたのだった。

（伊賀甲賀の世がふたたびくるかもしれぬ）

いや、そんな世はこないだろうが、伊賀者甲賀者が幕府隠密に復帰する日はくるかもしれぬ。しかしただ手をこまねいていては、そんな日はやってこぬ。汗と血をながすことによってその日がくるならば、自分も少々手を貸してやろう。十蔵はそんな気持になったのである。

十蔵自身には出世の夢も栄達の野心もない。が、時の流れのままに没落の身を軀（むくろ）にさらしていく伊賀者たちの将来をいくらかでもすくってやりたい気持にこころをうごかされたのだ。六十路にいたらんとする我が身はもう惜しくはなかった。伊賀本流の系譜につらなる立場への自覚がわずかにのこっていた。

（この世の名残り、冥土（めいど）の土産（みやげ）に、痩腕（やせうで）を貸そう）

自分の留守中の仕置（しおき）を十一歳の長男につたえて十蔵は屋敷をでたのだ。

鈴鹿山脈と布引（ぬのびき）山地がせまってきた。この二つの山脈をつなぐのが加太越である。伊賀の東の出入口がここなのである。

まだ日が西の空にあるころ、二人は加太越をすぎた。ここから先は伊勢国である。

伊賀から伊勢へうつるとき、伊予助は後を振りむいた。

伊賀の山脈が盆地を四方からとりかこんでいる。加太越にたつと伊賀盆地を指呼（しこ）の間に見おろすことができる。この奥深い山間の地から戦国のころ、雲のように忍術の名人、達人たちが輩出したことが信じられぬくらいだ。伊予助の先祖もこの盆地の中から身をおこした。

伊予助は感慨にふけったばかりでなかった。振りむいたのは、背後に人の気配を感じたような気がしたからである。

しかし、予想した人影はなかった。気のせいだったかと、伊予助はおもいなおした。伊賀から十蔵と伊予助を付けてくる人物がいるとは想像しがたい。この国の者は自分たちの味方であろうと伊予助はかんがえた。

くだりの山道を東へ東へとおりていった。このつぎの宿場は関である。関は鈴鹿関に由来する地名で、東海道と伊賀街道がわかれるところだ。すなわち伊賀街道は関が終着である。この夜は関を泊りとすることをかんがえていた。

その半ばあたりまできたとき、金場という村にちかづいた。山の中の村である。木々は道をおおい、道は林や森、野の中を縫っている。

あたりには夕闇がちかづいている。

(でるとすればこのあたり……)

と伊予助は予想した。加太越で感じた人の気配はその後もときどき伊予助の胸裡をかすめていた。

伊予助が立ちどまろうとしたとき、

「振りむくな」

半歩先をゆく十蔵が制した。

「お気づきでしたか」

伊予助はきいた。

「服部郷をでるときから尾行がついておった」

と十蔵はいった。

「伊賀者でしょうか」

伊予助はふたたびたずねた。

「ではあるまい。伊賀者以外の敵とおもわれる」

十蔵は確信があるのか、そうこたえた。

「そのような敵がございまするか」

「わしにもわからぬ。どうして敵が入り込んだか」

伊予助は背中に目をつけ、背後に意識を集中しながらあるいた。

(どんな敵か？　顔が見たい)

あたりはようやく薄暮がせまっているうえ、木々のふとい枝が頭上をおおっているために、薄暗くて、あまり見通しがきかぬ。

敵は二人が伊賀領をでるまでは手をださず、領外にでるのを待っていたようである。

十蔵はさほど敵を意識していないのか、今までとおなじ飄然たる足取りですすんでいった。あるいは十全の自信があるのだろうと伊予助はおもった。十蔵の腕前のほどは先刻承知である。

敵を背にして前へすすむことはなかなか困難で、勇気を要することである。意識はほとんど背後にむかっている。それでいて反対の方角へすすまなくてはならぬ。きわめて気疲れのする歩行だ。

伊予助はしばしば振りかえってみたい衝動にかられた。が、十蔵に禁じられている

ので、衝動をおさえながらくるしい歩行をつづけた。

山風が頭上の木々の枝をゆらしている。葉の音が伊予助の耳についた。

なにか不吉な予感がした。

そのとき、伊予助の目の錯覚か、前方の高い木の枝から一筋の糸がたれて、巨大な蜘蛛がおりてきたように見えた。

「あっ」

後方にばかり気をとられていたので、伊予助は不意をつかれた気がした。

しかも巨大な蜘蛛と見えたのは一つではなかった。二つつづいて天から降ってきた。

それが巨大な蜘蛛であろうはずがなかった。黒っぽい装束をまとった人間であった。

しかも二人とも抜き身の太刀を手にしていた。街道の木の、高い梢にひそんで待ち伏せていたのだ。尾行していたはずの敵はいつしか先まわりをしたのだと伊予助はおもった。

「うぬっ」

伊予助は怒気を発して、脇差の柄に手をかけた。

敵の二人がただちに殺到してきた。

伊予助は自分が前面にでて相手をしようとした。

「伊予助は、ひかえておれ。わしが相手をする」

十蔵がこのときそういった。ほかにまだ敵がいるかもしれぬという勘ばたらきだが、そういわれたからといって伊予助は二対一の戦いを傍観しているわけにはいかなかった。脇差をぬいて、一方の敵に対した。

よく見ると、敵は二人とも濃い灰色の道衣か雑務衣のようなものに身をかためている。

（御庭番だ！）

と伊予助は察した。どうやら自分が江戸からつれてきてしまったようだ。尾行者はくるときからついていたのだ。御庭番が強敵ぞろいであることを伊予助は知りすぎるほど知っていた。彼等の目的が十蔵ではなく、自分にあることはあきらかである。しかも自分が懐中にしている尾張継友の誓書にある。

十蔵は御庭番二人の前にたちはだかった。しかも脇差は差したまま、抜こうとはしなかった。

「江戸からの客じゃな。相手をいたそう」

いうなり十蔵は右手をぐいと前につきだし、相手にかざした。素手一本で相手をしようというのだ。

御庭番二人は老農夫然とした十蔵を簡単に討ちとれると見たようだ。さしたる用心もしないまま打ちかかろうとした。

ところが、その二人のうごきがとまった。というよりも容易に身うごきができなくなったのだ。

十蔵は二人の前にかざした右手の掌をひらいていった。それが丁度扇のような形になった。十蔵はその扇の背後にわが身をかくすような位置をとった。

（扇隠れ！）

伊予助はちかくで見て、こころにうめいた。

家康につかえた初代の服部半蔵は〈扇隠れ〉という伊賀流忍法の秘術を得意とした。日ごろ所持している白扇を相手にかざし、みずからその白扇の背後にかくれてしまうという伊賀流の秘伝だ。この術をつかえる者は初代半蔵のほかに数人しかいなかったという。今その秘術が伊予助の目前でおこなわれようとしている。伊予助の体を戦慄するような興奮がつきぬけた。生涯に扇隠れを見ることができようとはおもったことがなかった。遠い過去の伝説のなかにある秘術がはしなくも今展開しつつあった。

伊予助の目におどろくべきことがおこった。目の錯覚か、五本の指をひろげた掌のかなたで、十蔵の体が徐々にちいさくなっていった。

「これは！」

「いかがなるぞ？」

御庭番が驚嘆して声をはなった。十蔵の姿は御庭番二人の前でますますちいさくちぢんでいった。

消えてなくなるかと伊予助が見た寸前、一尺ほどの身の丈になった十蔵の体がとつぜん飛鳥のように身をひるがえし、御庭番二人に打ってかかった。

御庭番たちは小人になった十蔵にいたずらに翻弄された。抜刀を振りまわしても、十蔵はかるがるとその下をかいくぐり、あるいは彼等の頭上をとんで二人を幻惑し、嘲るかのように二人のあいだを駆けまわった。

せまりくる薄暮のなかで、十蔵の姿はただでさえとらえにくく、そのうえ神速のはやさで身をひるがえす十蔵を御庭番二人はどうしてもとらえることができなかった。

伊予助は我をわすれて、二対一のたたかいに見入っていた。

そのとき、不意に伊予助は背後から殺気がながれてくるのをさとった。

（しまった！）

敵はまだいたのだ。しかもその敵は自分の背後にいた。伊予助を尾行しつづけていた相手は先まわりして待ち伏せたのではなかった。前の敵は前もってずっとここの梢にひそんでいたのだ。

伊予助は背後の敵へ猛然と打ちかかっていった。けれども錯誤をおかしていたうえに、あわてていたので、気持がうわずっていた。したがって伊予助の脇差の攻撃もうわずった。しっくりとした攻撃ができなかった。

敵は前の敵とおなじように濃い灰色の着衣に身をかためている。これも粒よりの御庭番であろう。

御庭番は太刀や槍をつかうばかりではない。根来流の忍法をもこころえていると聞いていた。

（あぶない、やられるかもしれぬ……）

伊予助の心中にひるみが生じた。死や敗北がこわいのではなかった。伊予助は自分の懐中にある誓書をうばわれるのがこわかった。

伊予助の危惧はあたりそうな気配である。相手の御庭番は伊予助をうわまわる強者であった。伊予助はしだいに押しまくられて、たじたじとなった。

（御庭番、なにするものぞ。ここでたおれては誓書をうばわれてしまう）

伊予助はこの一念をささえにして、御庭番と果敢にわたり合った。捨て身で攻撃にでた。死をおそれぬ伊予助の前に御庭番もなかなか勝負をつけることができなかった。が、ついに必殺の一刀が伊予助の肩にふかぶかと食いこんだ。これで伊予助の体ががくんと前のめりになった。

「服部どの後をたのむ！」

伊予助は必死でたえて、さけんだ。

その瞬後、御庭番の一刀が伊予助の胸をすっぱり薙いだ。

伊予助の視界が真っ暗となり、なにも見えなくなった。

「服部どの、誓書を……」

といったところで伊予助は地にころがり、息が絶えた。

五

十蔵の追走がはじまった。

御庭番を一人たおし、一人に傷をあたえたが、誓書は伊予助の懐中からうばわれた。

十蔵は誓書をうばってにげた御庭番を追走した。

御庭番の逃げ足ははやかった。誓書を懐中にして、まっしぐらに伊賀街道を駆けた。体をやや前傾させ、地表をかすめるように夕闇のなかを疾走していった。

伊賀街道はほとんど山中の道である。のぼりがあり、くだりがあり、九十九折りがあり、平坦な道はほとんどない。はしるには難儀な道だ。御庭番はその道をほとんど苦にせず疾走をつづけた。

追う十蔵は老齢である。術は老熟の境地にいたっているが、脚力だけは衰えをかくせなかった。現在でも人並以上の脚力は保持しているが、盛時の脚力の約半分におとろえていた。脚力だけが十蔵の泣き所であった。それでも御庭番を追って懸命にはし

った。

伊賀街道ならば十蔵にとってわが家の庭とほとんどかわらぬ。どこに難所があって、どこにどんな抜け道があるか知りつくしている。東海道へでる前になんとか敵を捕捉したいとおもって駆けた。

伊賀街道がくだりの九十九折りに入ったとき、十蔵は街道をそれて、山道へ分け入った。道は急坂であるが、距離は九十九折りのおよそ半分だ。ここで一気に先まわりすることができると踏んでいた。

十蔵は急坂を駆けくだっていった。岩や木の根が邪魔をしている個所も軽々と越えた。なんとしてもうばわれた誓書を奪還しなければならない。御庭番が誓書を江戸にもちかえり、幕閣の要人に手わたされたならば、伊賀者甲賀者が厳罰をうけることはまぬがれぬ。それ以上に尾張家が謀叛の罪によって改易断絶の処分をうける恐れが多大であった。

十蔵はつい一昨日までは、幕府の政治にも伊賀者らの運動にも興味をひかれていなかった。自分が生まれてそだった伊賀盆地において、行雲流水のごとく一生を朽ちおえるつもりであった。それが昨日伊予助がおとずれて誓書を見せたことによって、十蔵はおもいもかけぬ政争と、伊賀甲賀と御庭番との戦いの渦中にとびこんでしまった。誓書奪還という重大な使命を十蔵ははからずも背負いこんでしまった。人生六十路にしてとつぜん激動の運命に身をまかせようとは、我ながらおもいもかけなかった。

人の人生とはまったく不可解、不思議なものである。十蔵は御庭番を追ってどこまでも行く覚悟である。御庭番を江戸に入れぬためには、伊賀街道で始末をつけるのがもっとも得策であった。

夕闇はますます濃くなってきた。見通しはあまりきかなくなった。山道となればなおさらである。前方にたちふさがる枝や岩が夕闇にとけ入りつつある。けれども十蔵は闇のなかにきく夜目をもっている。夜目は年齢とともにおとろえることがなかった。十蔵は夕闇をほとんど苦にしないで駆けつづけた。

とうとう十蔵は山道をぬけた。九十九折りが切れたすこし先で、山道は伊賀街道にでた。

街道に御庭番の姿は見えなかった。十蔵のほうがはやかった。

十蔵はごろっと街道に寝そべって、御庭番がいたるのを待った。耳を地べたに張りつけると、かすかに人の駆ける足音がつたわった。熟練した忍者の聴覚は常人の約千倍の力をもっている。ちなみに犬の聴覚は人間の約五千倍から一万倍といわれる。忍犬の場合は十万倍である。

十蔵はその足音から距離をはかった。約一丁半ほど後に御庭番はきている。十蔵は寝そべったまま待った。

やがて、濃い夕闇のかなたに御庭番の姿がかすかに見えてきた。伊予助をたおして誓書をうばいとった御庭番である。

十蔵はまだ立ちあがらず、地に寝たまま待った。

御庭番が疾走してきた。

御庭番は十蔵を跳びこえて、はしり去ろうとした。

その瞬間、十蔵はむっくり身をもたげるなり、脇差を一閃した。

（……！）

脇差は十蔵の上を跳んだ御庭番の内股をざっくりとえぐった。

御庭番は声もたてずに空中から落下し、そのまま数間ころんだ。地上をころびながら御庭番は太刀を抜きはなち、十蔵の攻撃をむかえんとしていた。

十蔵はころがる御庭番を追ってはしった。

「むざむざ逃がしはせぬぞ」

十蔵が声を発すると、

「一度うばったものはわたせぬ」

御庭番は内股をやられて足をひきずっていた。

「わたせば、命をたすけよう」

再度十蔵は声をかけた。

「ほしければ、うばってみよ。おれは御庭番根来勘左衛門だ」

御庭番があえて姓名を名乗り、傲然と見かえった。根来は尾張家付家老成瀬阜人正の屋敷に潜入し、昨年、伊賀甲賀と尾張家の盟約を聴きとってきた凄腕の御庭番である。しかも天徳寺の境内において、一度はこの誓書をうばいとって加納にもたらした。根来が誓書をうばったのは、じつにこれで二度めである。それだけに、今回は、どうしてもわたさぬという執念があった。

「わしは服部十蔵じゃ」

十蔵が名乗ったのは、根来をかならずたおし、絶命させる自信があったからだ。

「伊賀の頭領がとうとう出馬したな」

根来はそういい、太刀をかまえた。伊予助をたおした太刀だ。が、すでに根来は傷を負っている。跳んだり、はねたりの根来流の術はつかえぬ。そのかわりの小技を弄していどんでくると十蔵は見た。

根来が先手をとって仕かけてきた。いきなり必殺の太刀を十蔵に見舞ってきた。

十蔵は逆に根来の懐にとびこんで、脇差の鍔で太刀をうけた。

その瞬間、根来の口から一条の光が発したかに見えた。根来の口中から無数の針が十蔵の目といわず、鼻、口、耳といわず、顔をねらって噴射するようにおそってきた。

シュ、シュ、シュ、シュ、……

不気味な音をたてて二寸ほどの長さの針が生き物のように噴射をつづけた。吹き針は近距離から敵の顔へはなつ隠し武器だ。顔以外ではあまり効果はない。十蔵はもってこいの敵の間合にひきこまれたのだ。

十蔵はとっさに左腕を自分の顔にかざした。

ほとんどことごとく針は十蔵の腕に突きささった。顔には一針もうけなかった。

根来は一瞬、おどろきの目をみはった。が、その顔にやがて余裕のある笑みがもれた。

「毒針だな……」

十蔵はうめいた。

「左様、針の先に猛毒が塗ってある。間もなくその毒が体中にまわるであろう。勝負はこれまでだ」

得たりやと根来は勝ちほこった。ところが、その瞬後に根来は恐怖の光景を目のあたりにした。

十蔵がおのが手をかざした。とみるや、

「やあっ！」

腹の底からしぼるようなすさまじい気合を発し、脇差を一閃した。

脇差はおのが腕を肘のところから見事に切断していた。

十蔵はかえす脇差をふりかぶって、約一間半の高さに跳躍した。地上におりたったとき、脇差は根来の脳天ふかく打ちくだいていた。

根来はおどろきの表情のまま、信じられぬように地にくずれおちた。二の太刀は必要でなかった。初太刀で根来の命を絶っていた。

十蔵はすばやく左腕の血止めをおこない、手拭で切断した傷口をしばった。

そして根来の軀へちかづき、懐中をさぐった。が、誓書が見つからぬ。

十蔵は今度は根来の全身をさぐっていった。

（ない！）

十蔵の顔が濃い夕闇のなかでかすかにゆがんだ。根来は誓書を所持していなかった。

（しまった……）

十蔵ほどの者が相手の策にまんまとおちた。

誓書はもう一人の傷を負った御庭番が持ち、根来は囮の役目をはたしたのだった。

十蔵が〈扇隠れ〉をもちいて一人をたおし、もう一人に傷を負わせたその御庭番が根来にかわって誓書を持って江戸へむかっているのだ。

さしもの十蔵が呆然となった。片腕まで犠牲にして奪還をねらった誓書はうばいかえせなかった。

十蔵は片腕をかかえて天をあおいだ。今度は、その傷ついた御庭番を追って、誓書

を奪還しなければならなかった。

六

御庭番本庄三四郎は、中仙道木曾路に入って道をいそいだ。

木曾路はすべて山の中である。東は駒ヶ岳、西は御嶽にいきつく山また山の中を道がとおる。山々はうつくしい木曾檜におおわれ、そのふかい谷間をながれるのが木曾川である。

木曾川にそって木曾路はつづく。痛みをこらえて、本庄は木曾路をすすんだ。

本庄は肩にかなりの傷を負っている。伊賀街道で服部十蔵からうけたものである。そのときに根来勘左衛門は丹波伊予助をたおし、もう一人の御庭番原田左馬助は十蔵のために打ちはたされた。

本庄は江戸から根来、原田とともに伊予助を尾行して伊賀服部郷にいたり、思惑どおり伊賀街道において根来は伊予助から誓書をうばいとった。原田はたおれたが、本庄は傷を負っただけで、根来とともに伊賀街道を逃げた。途中、根来から本庄が誓書をうけとり、根来が十蔵への囮となった。この囮作戦が功を奏し、根来は先まわりして待ち伏せていた十蔵とのあいだで激闘を展開した。本庄はその隙に伊賀街道をつっ

ぱしって、東海道にぬけだすことができたのであった。

本庄はそのまま東海道を逃げまくって、尾張熱田から東海道をそれ、名古屋をへて脇道をぬけて大井から中仙道へ入った。中仙道は馬籠から木曾路と呼ぶのだ。

ここまでくるあいだ、本庄は道をえらびにえらんだ。囮となった根来がしばらくのあいだは十蔵の足を止めたにしても、勝負では十蔵をたおすことはできまいと踏んだのである。十蔵はおそらく根来をたおした後、誓書は持っていないとわかって今度は自分を追跡してくるはずだと予想していた。熱田から東海道を脇道へそれたのも、十蔵の追跡をかわすためだ。

だが、敵もさるもの。十蔵もまた熱田から脇道に入って確実な足取りで追跡してきているのを、本庄は直感的に確信していた。背後から本庄を追ってくる十蔵の足音が自分の心音を聴くようにつたわってくるのだ。ひたひたとせまってくる十蔵の足音におびえるように本庄は木曾路をいそいだ。

道をいそぐあまり、傷の痛みはひどくなるばかりである。十蔵の脇差が本庄の左肩をななめに深く切り裂いている。深いところは骨に達していた。毒断ちと血止めをおこなっただけで本庄は今日で四日も旅を強行している。丸一日か二日でもぐっすり眠って体をやすめれば傷口はふさがり、痛みはやわらぐのだが、そんな余裕のあるはずがなかった。つかれはてたら、一刻か二刻路傍の草原や街道脇の地蔵堂や薬師堂など

で眠りをむさぼるだけである。

それでも一日に十数里、常人以上の旅程をこなして馬籠まできたのである。木曾路はあるくに難儀な道である。坂道や曲がりがおおいうえに、右手は断崖絶壁のような深山がつらなり、左手は数十間もふかい木曾川におちこむ幽谷である。そのうえ、道幅も東海道にくらべてせまい。馬籠の宿場もながい坂道である。坂の西側に石垣をきずいて旅籠や食べ物屋、雑貨屋、土産物屋などが軒をならべている。この道中を中馬や仏、日雇に、行商、御嶽まいりの信者などが往来している。

馬籠の先は妻籠である。妻籠で木曾路から飯田街道へわかれる追分がある。

（どちらを行くか？）

本庄は妻籠峠をのぼりながら思案をかさねた。このまま木曾路をゆくか、飯田街道へわかれて茅野にでるか。道は二つにひとつ。なかなか思案はさだまらなかった。距離からすればやや後者がみじかいが、木曾路も飯田街道も難所がおおい。ここで十蔵の追跡を巻くことができるか否かのわかれ道だ。

（飯田街道をいこう）

といったんきめたが、ふたたびまよいだした。本庄にしてはめずらしいことである。本来の本庄は沈着冷静、そして果断である。そこを藪田に買われている。ところが十蔵に一刀をあびてからというもの、果断さに翳りが生じていた。本庄が今懐中にしている誓書があるいは伊賀者甲賀者ばかりでなく、尾張家の命運を決するかもしれぬ。その重大さが本庄の背におもくのしかかっているともいえる。

妻籠の宿場の入口が追分である。

なおためらいがちな本庄の足がおのずと左へ踏みだした。

左は木曾路、右は飯田街道だ。いったん木曾路をえらんだ以上、もう本庄にまよいはなかった。宿場に入り、宿場をぬけた。

〈江戸へ八十里半〉

宿場の出口に道標がたっている。

ところがしばらくいくうちに、また本庄は自分の心音をきくごとく、十蔵の足音がつづいているのを感じた。

（まだきている……）

暗然としたおもいで本庄は不運をのろった。どのくらい後かはわからない。けれども確実に十蔵は木曾路をすすんできていると察した。

十蔵はどうでも本庄にまつわりついて、はなれようとしない。どうして十蔵には自分のいく道がわかるのだろうと慄然たるおもいにかられた。そうなると本庄の足もいくらかちぢんできたように感じられた。

十蔵の手ごわさはすでに身にきざみつけられている。十蔵は本庄と原田左馬助を相

手にして、かるく二人をあしらった。それだけの強さと妙技を十蔵は身につけているのだ。十蔵がここまで追跡してくる以上、根来がたおされたことは確実だった。

本庄がここまで敵をおそれたことははじめてだった。これほど敵をおそれる自分が信じられなかった。かつて紀州家中でも、本庄が武芸でひけをとった相手は一人もいなかった。ひそかに紀州家随一を自負してきた本庄であった。加納角兵衛と有馬四郎兵衛が御庭番十七家をえらぶについても、組頭藪田についでまず第一に本庄の名をあげたといわれている。

伊賀者甲賀者と御庭番の戦いがはじまってからも、本庄は敵をおそれたことがなかった。それがどうして今これほど老いたる伊賀者に恐れをいだくのか信じられなかった。相手が伊賀流の正統をつぐといわれる家門のせいか、それとも服部半蔵の流れをくむ血筋をおそれるのか。とまれ、本庄は今はじめて恐怖とたたかっているのであった。

三富野、野尻、須原……、と難路できこえる木曾路のなかでも〈危うき道〉と称せられる道中を本庄はすすんだ。

〈木曾路は岨づたいに行く崖道おおし。なかんずく三富野より野尻までのあいだはなはだ危うき道なり。この間、木曾川の崖上に木を伐りわたしてならべ、藤葛でからめわたした道幾個所もあり。さらに桟橋おおし。いずれも川の上にかけたる橋にはあらず。岨道の絶えたる所にかけた橋なり。他国にはかような桟橋はなし。あやうきこと甚し……〉

といわれる難路がつづいた。

この間も、十蔵の足音は虚空のなかから本庄の耳にかすかにつたわった。ふりかえっても、むろん十蔵の姿は見えぬ。道にたたずんでも十蔵は見えてこぬ。それでも確実に十蔵の足音はきこえた。

(伊賀の秘伝か……)

と本庄は憶測した。伊賀の秘伝といえば、伊賀街道で掌をかざした背後で見る見るうちに十蔵の体がちいさくなっていく不可思議な術を目のあまりにした。本庄が肩をやられたのもこの術のためである。

四六時中、十蔵の足音はきこえた。このかすかな足音がたえず本庄に恐怖を呼びおこしているのだ。どこにいても、どこをあるいても、かならず山の空気をふるわすように足音が耳の奥にひびいてきた。

夕暮れがちかづいたころ、行く手の風景がひらけてきた。眼下に紺碧の色あざやかな木曾川と、屏風のように垂直にたかく切りたつ断崖と奇岩のつらなる渓谷が展開した。はっと息をのむような絶景であり、目のくらむような高さである。ここが木曾路随一の名勝といわれる寝覚の床だ。

本庄もおもわず足をとめて、眼下の絶景をのぞきこんだ。大岩十間小岩四十間ばかりの高いところに弁天の社がある。その一段ひくいところを寝覚の床という。奇岩、怪石、名木などが無数いたるところにある。

木曾路はふたたび山中に入った。風にさそわれて橘の花の香りがにおってきた。高貴でみやびともいえる香りが鼻をくすぐった。

上松の宿場をすぎたころ、すっかり日がおちた。日がおちれば旅人ならば旅籠や木賃に宿をとるが、本庄の場合はそうはいかぬ。提灯に火をともして夜道を照らしながらすすんだ。肩の痛みがひどくなるばかりだが、それを押して、一歩でもはやく江戸へとこころが急いた。

つぎの宿場福島が中仙道における江戸と京都の中間である。福島から江戸へ六十八里、京都へは六十七里、今夜のうちに福島まではちかづいておきたかった。どうせ福島の宿場の出口には関所があって、夜間の通行はゆるされぬ。木曾路の夜旅は危険このうえないが、本庄は懸命に道をかせいだ。

御嶽の鳥居のちかくをとおった。

肩の痛みで本庄は巨石を肩にかついであるいているような重荷をおぼえてきた。いかに強靱な意志の持主も怪我を負っての夜旅には限界がある。

中原の立場をようやくとおりすぎた。もう福島の宿場にちかい。

本庄には自分の力の限界が見えてきた。これ以上すすむと、かえって明日の旅に負担がでそうだ。本庄はあるきながら今夜の塒をさがした。これまでも旅籠や木賃にとまったことはなかった。いつもお堂の中か軒下、あるいは手ごろな草叢か、おおきな木の下を塒としてきた。襲撃をうけても、すぐに応戦ができ、逃走もできるからだ。

塩淵というあたりをすぎた路傍に、地蔵堂があった。本庄はたおれこむようにお堂の中へへたりこんだ。

本庄はそのまま気をうしなったかのように泥のような眠りにおちいった。

一刻ばかりたって、ようやく気づいた。懐中に手をやると誓書をおさめた桐箱があった。ほっとしてお堂の闇の中をうかがった。ひょっとして、ほかの旅人もこのお堂を塒としていないかと気づかった。幸にしてお堂の中は本庄一人であった。高さ四尺ばかりの地蔵菩薩像だけがたっている。これで気持がようやくおちついた。ここで暁までやすめるとおもうと、いくらか気持がやわらいだ。

山中のお堂の中は静寂のきわみだ。風の音さえしない。夜烏の羽ばたきや鳴き声もきこえぬ。

花橘の香りだけがお堂の中でもにおっている。木曾路にはよほど橘の木がおおいのだろうかとおもった。

だがおもいつくと、木曾路に入る以前も橘の香りがにおっていたような気がした。

（はて……？）

香りがいたるところでにおっているわりには、橘の花を街道で見かけなかった。

本庄はようやく不審をいだきはじめた。橘といえば、花が咲くのは初夏のころだ。まだ花が咲いていないのに香りがにおうのは異常である。

本庄はにわかに慄然としたおもいにとらわれた。

耳をすますと、かすかに心音がひびくように足音がきこえてきた。

本庄は自分の身のまわりを嗅いでみた。たしかに橘の匂いがする。自分の体と着衣がにおう。

（これだ！）

本庄はさとった。自分の体と着衣に匂いの源がついているのだ。つけたのは十蔵であろう。伊賀街道で立ち合ったときに、十蔵が匂いの源というべきものを本庄に付着させたのだ。

すぐれた忍者の嗅覚（きゅうかく）は常人の千倍はあるといわれる。どうして今までそれに気づかなかったのかと、本庄は臍（ほぞ）をかんだ。これまで十蔵のためにみずから道しるべをはなって旅をしつづけていたのである。

本庄はふたたび十蔵への恐れをおぼえた。

耳をかたむけると、今度はとぎすました聴覚に例の足音がきこえてきた。これは心音ではない、本物の足音である。

本庄はお堂の床から身をもたげた。

七

足音はつづいている。

足音がついにお堂にちかづいた。

その足音がお堂の前でとまった。

ギギィ……

扉のきしむ音がした。

「御庭番よ、待たせたな。勝負をいたしにまいった。でてこよ」

たしかにききおぼえのある十蔵の声だ。

「ござんなれ！　遠き道程をよくまいった」

闘いを決意したときから本庄の恐怖はぬぐい去られた。ふだんの闘志あふれる本庄にもどっていた。肩の痛みもけし飛んでいた。

本庄はゆっくりとお堂の扉にちかづいた。

勝敗のわかれめは、お堂をでる瞬間できまる。

本庄は扉をでるなり、手にした地蔵菩薩像を外の闇に投じた。
すさまじい太刀風が虚空にうなった。
地蔵菩薩の像から首だけがはなれて、草叢にころがった。
「花の匂いにさそわれてここまでまいった」
静けさと闇の中に凝然と十蔵が立っているのが夜目に見えた。
本庄は十蔵が地蔵菩薩を斬りはらった瞬間、お堂をとびだし十蔵にたいしてもっとも有利な位置をしめた。そのとき、十蔵の左腕がだらっと垂れているのが見えた。しかも肘のところから腕がない。
とっさに本庄は勝利を確信した。十蔵の左半分は攻撃もなければ、防禦もない。
本庄はためらいもなく、十蔵の左方へむかって疾った。
十蔵もそうはさせじと、おなじ方向へはしった。
闇の中を二つの影が疾走した。
一つの影が空中へ高く跳んだ。
一方の影はなおも地を駆けた。
「ええいっ！」
本庄は空中から跳びおりるなり太刀をはげしく一閃した。自分の跳びおりる地点のすぐ前に十蔵の体が位置しているはずだった。しかし、肩に傷を負っていたために跳

躍がいくらか不十分であった。
本庄の太刀はむなしく空を斬り、十蔵の脇差が本庄の正面をすれすれにとらえた。
本庄の衣服の前がすっぱりと切れ、懐中から誓書の桐箱がころがりおちた。
「あっ……」
すばやく本庄は桐箱をひろおうとした。が、一瞬はやく十蔵にひろわれてしまった。
辛苦の末にうばった桐箱が伊賀者の手にもどった。
この上は十蔵をたおし、桐箱を再度うばいかえすしかなかった。本庄は闘志と敵意をむきだしにして十蔵におそいかかった。
「このようなもの、ほしくば、くれてやるわ」
十蔵が無造作にそういい、桐箱をぽんと投げた。
闇の中をとんできた桐箱を本庄は夢中で受けとった。その瞬間、本庄の体は伸びきって隙だらけになった。
「未熟者め」
十蔵の声と同時に脇差が本庄の胴を力いっぱい薙ぎはらっていた。
本庄は地にくずれ落ち、そのままうごかなくなった。
十蔵はふたたび桐箱をとって、闇の中をあるきだした。

御庭番秘伝

一

夏がおわりかけている。盛夏のたえがたい暑くるしさは過ぎていた。

伊賀同心藤林上総助はあけはなした座敷に屏風をたて、ごろ寝をしながら庭から吹きこんでくる土用あいに体をなぶらせていた。

今は非番の昼下り。この時季の馳走はなんといっても、涼風にまさるものはない。土用のさなかに吹く涼風には千金の有難さがある。

上総助の視線の先には、組屋敷の中間がたがやしている野菜畑の茄子の実があざやかな紺色にかがやいている。

藤林家はかつての伊賀上忍の家系であるが、現在は幕府の下級役人である。勤務といえば大奥の門番、番犬である。ほかになすべき役目もない。ごく普通の武家なみに生活もくるしい。したがって組屋敷のちいさな庭は野菜畑となり、女房が仕立物の賃仕事もする。上忍の家系といえども同様である。

かつて忍術の名人を輩出した伊賀、甲賀の子孫たちが零落してからすでにひさしい年月がたっている。

上総助は土用あいのここちよさに身をまかせ、うとうとと転寝をむさぼりはじめた。昼下りだというのに、はやくも蜩が鳴きだした。時によってはけたたましく聞える声だが、上総助の耳にはそれも子守歌のようだった。

しばらく、ここちよい時をすごした。まるで極楽のなかであそぶような気持よさだ。こんな時間がいつまでもつづけばよいと上総助はおもった。

そのとき、野良犬か野良猫がとなり屋敷の庭から入りこんで縁側にちかづいてきたのをおぼえた。別段あやしむべき手合いではない。組屋敷の庭を塒にしている野良犬、野良猫もいるのだ。上総助がよく見かけるやつは褐色の犬と、図体のおおきな三毛猫である。

そのどちらかだろうと上総助は転寝をつづけながらぼんやりとかんがえた。眠りからおきなおって追いはらうべき必要もなかった。

そやつは悠々と座敷の縁側の前を横切って去った。

それからまたしばらく時が過ぎたとき、ふと上総助は背にした屏風の後ろにうごく何ものかの気配を感じとった。

（先ほどの犬か猫だろうか）

とおもったが、野良犬や野良猫が座敷まであがってくるわけもない。
たしかめようか、とおもったが、ここちよい眠りから覚めるのはあまりに惜しい。
しばらく躊躇しているうちに、もう一度気配を感じた。
おきあがろうとしたが、どうした理由か、体がおもい。身うごきが不自由なのだ。
(妙だ……)
とおもいながら、今度は本気でおきあがろうとした。が、不思議なことに、体はぴくりともうごかなかった。
(夢か、うつつか……?)
黒雲のわくような不安と狼狽をおぼえながら、意識を一点に集中して全力をふるって再度こころみたが、結果はおなじだった。
にわかに恐怖がわきおこってきた。かつて一度も経験したことがない状態だった。
(敵だ!)
と上総助は意識した。
うちつづく泰平の世であるが、伊賀者、甲賀者は御庭番の出現という幕府内部の敵をむかえていた。
「藤林どの、うごきめさるな。声をたてるのも無用でござる」
そのとき屏風の背後から、かすかな声がながれてきた。

(くそっ!)
うごくことはおろか、声をだすこともできなかった。
「術がかかっておる。〈不動呪縛〉だ。藤林どのにも、これはやぶれまい」
屏風の後ろから、また声が聞えた。
さきほど、野良犬か野良猫が庭先を横切ったとき、敵は術をかけたようだ。
(何者だっ、何用でまいった)
今度も言葉にはならなかったが、相手にはそれが通じたようだ。
「藤林どのの想像しておる敵ではない。命のやり取りをいたしにまいったのではござらぬ」
屏風の背後の男がいった。
「ほざくなっ」
今度発した声がようやくわずかに言葉となった。
「嘘ではござらぬ。敵であれば、ただちに藤林どのの命をいただいておる」
風にのって、男の言葉がかえってきた。
「素姓、用むきをいえ」
「幕府のさる筋からつかわされてまいった」
「さる筋とは?」

身うごきのできぬ状態のまま上総助はいった。
「老中とかんがえていただこう」
意外な返事がかえってきた。
「老中の使者が、わざわざ伊賀組組屋敷にまいったか？」
「左様、伊賀者甲賀者と御庭番とのあいだが騒々しい。老中ならずとも気になるところだ」
おもいがけぬ言葉が老中の使いと称する男の口からでた。
「いかにも、伊賀者甲賀者と御庭番とのあいだに、確執がござる」
双方の確執は御庭番新設の一昨年からはじまっており、世間でもだいぶ噂になってきていた。上総助はこれを否定するわけにはいかなかったのである。
「今、幕府政治はいちばんむつかしいところにきておる。八代将軍の新政治がはじまって、端緒についたところだ。幕府内部の争いは、老中にとってもいたって迷惑千万。老中は幕閣政治をつかさどる役目だ。無用の確執、争いがつづけば、新将軍の政治があやうくなると同時に、老中一同が諸政をとれなくなる恐れがある」
きわめて理詰めな論を屏風の背後の男が口にした。
紀州藩主吉宗と尾張藩主継友との水面下のはげしい暗闘ののちに、一昨年吉宗は八代将軍についた。徳川の御三家からはじめて新将軍が登場したのであるが、幕政は当

然まだ安定していない。新将軍と老中とのあいだも、おたがいに遠慮があって、意志の疎通も十分にはおこなわれていなかった。吉宗には幕府歴代の股肱の老中への気づかいがあり、老中たちにははじめて分家から本家をついだ新将軍をどう遇すべきかの戸惑いがあった。まして吉宗は英邁、果断、剛毅をうたわれている人物である。老中らにしてみれば煙たさもおおいにあった。
吉宗はあらたな法令や制度を徐々に創案し、実践にうつしていたが、それにたいする旧来の幕臣たちの抵抗もあらわれていた。そのいちばんの例が、御庭番新設にたいする、伊賀者甲賀者の反発である。
将軍新任早々、吉宗は直属の隠密職として御庭番十七家を紀州藩からつれてきた藩士たちのなかから任命した。幕府の隠密職としては、幕政の初期においては伊賀者、甲賀者らがつとめていた。ところが世が泰平となるにおよんで、隠密職から伊賀者、甲賀者は解きはなたれた。そして彼等は江戸城諸門の番衛と大奥の番衛につかされた。それを不満として、かつて忍術という過酷な技の習得によって隠密職についた伊賀者甲賀者はいつか旧職に復帰すべく、執拗な運動を何代にもわたってつづけてきた。その運動がこのたびの御庭番の新設によって断ち切られたのだった。伊賀者甲賀者と御庭番との闘争がこのときからはじまった。
「それで、何がいいたくて術を弄してここにやってきたのだ。はやく用むきをいった

らどうだ」

前置きの言葉にじれて、上総助がうながした。

「伊賀甲賀と御庭番との争いをやめたらどうだ。幕府内の争いは幕府政治への不信をもたらす」

屏風の背後から返事がかえってきた。

「難問だな。なかなか老中様方へのご期待にこたえるのはむつかしい。双方に立場があり、意地がある。われわれも、御庭番もおたがいにひくにひかれぬ。経緯(いきさつ)はおわかりであろう」

「わかっておる。困難ではあるけれど、幕政のためには双方の争いは禁物だ。どうしてもやめねばならぬ」

「争いをおさめる手立(てだて)をお持ちか？」

「それを藤林どのへ申しあげるために、危険をかえりみずこの屋敷に潜入いたしたのだ」

「手立を聞こう。その前に術を解いたらどうだ」

上総助がそういったが、

「それははなはだ危険だ。こちらの用件がおわるまでは、このままで聞いていただこう」

あっさりといなされた。

「よい返事はできぬかもしれぬぞ」

不機嫌に上総助は応じた。

「紀州藩士から御庭番十七家をえらび、幕府創設期にはたらいた伊賀甲賀者を門番に捨ておくのは、いかにも拙劣なる処置だ。伊賀甲賀者らの無念がわかろうというもの。かといって御庭番は新将軍の創案といわれるだけに、これをあらためるわけにはいかぬ」

「ならばどうしようというのだ」

「御庭番はこのままとして、伊賀者か甲賀者どちらかを隠密職に復帰させることはかんがえられる。双方とも復帰させてやりたいが、隠密職ばかり人数がふえてもこまりものだ。さらに江戸城門番、大奥門番にも人をのこしておかねばならぬ」

まったく予想外の手立であった。

「伊賀者と甲賀者どちらかを復帰させる？」

「左様、のこったほうを、従来どおり門番、大奥番といたす。どうであろう、藤林どの」

「むつかしい案でござるな」

上総助はしばらく沈黙して、相手の言葉を待った。

「左様でござるか」
「伊賀者と甲賀者、そのどちらを隠密職に復帰させようというのか」
上総助は問い詰めるようにいった。
「隠密職といえば過酷な役職でござる。腕がよくなければつとまらぬ。知恵もすぐれていなければならぬ」
「左様」
「伊賀者も甲賀者も、かつてのすぐれた忍者たちの子孫だ。血筋をいえば、甲乙つけがたい。どちらが腕がよいかとなると」
「きそってみなければわかるまい」
「きそってみる気はござるまいか、伊賀者と甲賀者とで。勝ったほうが隠密職に復帰し、負けたほうが門番にとどまる」
「おもいきった方法だな。かんがえておこう」
上総助としては即断するわけにはいかなかった。
「いずれ返事をききにまいろう」
屏風の背後から聞えた声はそれが最後であった。
しばらくすると、一瞬、銅の声が鳴きやみ、上総助の体がうごくようになった。不動呪縛がとけたのである。

すぐに上総助は屏風の背後にまわってみたが、すでにそこには何者もいなかった。

二

日がおちて、闇と静寂が地上をおおった。
晩夏といえども、この時刻となると、さすがに涼しさがおとずれる。青山にある甲賀組屋敷もしずけさとともに、闇の眠りにおちていった。
組屋敷の一角にある甲賀三郎の屋敷もすでにしずかな眠りのなかにあると見えたが、実際には、主人の寝間の有明行灯がほのかにともっていた。行灯の明りが夜具の上の男女のみだらな姿態を浮かびあがらせている。
男は女の浴衣の帯紐をぬきとり、浴衣をはがし、あおむけに寝かせた。つやつやとした光沢と張りにみちた白い裸身が薄明りのなかに浮かび、男の目が情欲にかがやいた。
女は甲賀三郎よりも二十歳も年下の妾おうねである。二年前、三郎が江戸市中で見つけ、一夜ひそかに拉致してきて、組屋敷のなかで飼いならした女である。
おうねは今ではすっかり三郎に馴れ、ほうっておいても、屋敷から逃げだそうとはしない。つれてきた当初は、夜ごと三郎の寝間から女のあわれなしのび泣きがきこえ

たが、現在はおなじ泣き声でも、それは喜悦の音色にかわっていた。

三郎の顔が女の体にふかぶかとうずまっている。はじめは女の胸や首筋にうずまっていた三郎の顔が、しだいに腹部や脇腹におりてきた。男の舌と唇が体を這いまわるたびに、おうねの顔が今にも泣きだしそうにゆがみ、眉根にシワをたててこらえていた。

三郎の顔はさらに下へさがっていった。

女の腰をおおう薄布をはぐと、股間にあわく陰影が浮かんだ。男の顔はその陰影をおおい、舌先がそのほぼ中央の奥ふかくもぐっていった。

女の顔がいっそうゆがみ、眉間のシワがよりふかくなった。そのころから、女の口もとからえもいわれぬすすり泣きがもれだした。

その妙なる音色に耳をかたむけながら三郎は舌ざわりや女の反応ぶりをたのしんでいた。この二年のあいだに、女の体ははぐくまれ、技をしこまれ、ほぼ開発しつくされてきた。それだけに三郎は女の体のツボをことごとくこころえていた。どこに触れればどんな音色をかなでるかも知っていた。

音色は低くつづいて、跡切れるかにみえて切れることなく、ときにとつぜん高い声音を発し、あえぐがごとく、切れ切れな妙音をつづけた。

現在の甲賀三郎のたのしみといえば、唯一これしかなかった。抜群の血筋と資質にめぐまれながら、三郎は忍者としての技倆を発揮する職場にめぐまれていなかった。生まれてきた時代がわるかったとしかいいようがなかった。泰平の時代に生まれた甲賀者の悲劇というほかはない。江戸城大手三門の番衛が甲賀者の役目であり、立身もなければ加増もない。ほかの仕事もない。終生、番人をつづけるのが三郎の一生である。この退屈な暮しのなかで三郎がたのしみをおぼえるものといったら、女色しかなかった。

三郎はおうねの顔がとうとうこらえかねて泣きくずれるのを見て、やおら体を合していった。ふかく突き入ると、おうねはひときわ甲高い音をあげて、一瞬身をそらせて気絶したようになった。気絶したのではなく、そこからくるおしいまでの歓喜に身をゆだねていくのだ。

三郎は緩急自在の交接をつづけていった。おのれの緩急しだいで女を狂乱にみちびくよろこびにひたっていた。

(いい!)

そのとき、三郎は交接の部分に女のしめつけを感じた。それによって快感がたかまってきた。が、これは今まで三郎が感じたことのない強いしめつけであった。

しかもこれがさらに強まってきた。おうねはぐいぐいとしめつけてきた。快感はいやまして、三郎は一気にたかまりだした。

あまりのしめつけの強さに、三郎はかすかな不審をおぼえた。
（こんなことがあるものだろうか？）
おうねの体はすみずみまで知りつくしているはずの三郎だった。女体が一夜にして激変したのだろうかとうたがった。
（……？）
三郎は自分の股間につよい圧迫感をおぼえた。こうなると快感とはことなる感覚である。息ぐるしさが徐々に押し寄せてきた。抜こうとこころみたが、もう抜けなかった。
「おうね、どうしたのだ？」
あわてて聞いたが、おうねは息もたえだえになりながら、口がきけなくなっていた。
三郎は満身の力をこめて、おうねからはなれようとしたが交接の部分がしっかりとつながれていて、はなれなかった。それ以上にはなれようとすると、一物が千切れそうな恐怖におそわれた。
惑乱と恐怖が三郎におそいかかってきた。
自分の頭上に、かすかな気配をおぼえたのはそのときだった。
「甲賀三郎、抜けはしまい。無駄な努力だ」
今度は天井から声が降ってきた。

曲者が天井裏にひそんでいることはたしかだった。
「何やつ？」
誰何したが、その声には相手を威嚇するだけの迫力に欠けていた。
「女の体に術をしかけた。術をとくまでは、はずれまい。だまって、こちらのいうことを聴け」
天井裏の男はおちつきはらって命じた。
「それをいう前に正体を明かせ」
三郎は虚勢をはりながらいった。
「おれは老中の使者だ。神妙に聴くがいい。老中一同は伊賀者甲賀者と御庭番との争いに頭をいためておる」
天井裏の男は三郎が予想もしないことをいいだした。
「老中の使者とは面妖な。されど、争いにはあらそうだけの理由がある」
虚勢をつづけながら三郎は反発した。
「理由はあろうが、あげつらえば切りがない。公儀とても双方のいいぶんを丸のみにはできぬ」
「丸のみができなければ、どのくらい呑んでくれるのだ」
三郎は交接状態のままで応じた。おうねはまるで死んだようになっていた。

「そうさな。ことと次第によっては老中は半分ほどは呑んでくれるかもしれぬ」
「半分とは……」
「伊賀者甲賀者ぜんぶを望みどおりにはしてやれぬ。伊賀か甲賀、どちらかを隠密職にもどすというのはどうだ。そのかわりいずれかはこのまま門番をつづける」
「御庭番は？」
「御庭番はこれまでどおりだ。御庭番をやめさせるわけにはいかぬ。新将軍の面子（メンツ）にかかわることだ」
「伊賀、甲賀、どちらが隠密職にえらばれるのだ？」
「それは伊賀者と甲賀者とでおたがいに決着（けり）をつけてはどうだ。勝ったほうが栄誉を手にする。負けたほうは屈辱をいだいて門番にあまんじる。勝負の結果ならば文句は双方にあるまい」
天井裏の男は甲賀三郎を一カ所に釘付けにしておいて、おもいがけぬ問いかけをしてきた。
「なかなか面白そうだ。が、ことがことだけに面白さだけではきめられぬ。即答はできぬ。一考しておこう」
三郎としてはそうこたえるしかなかった。
「では後日、答をききにまいろう」

「またここにまいるのか」
「今度はなるべく、一人のときにまいろう」
そういいのこして男は天井裏からひきあげたようだ。
しばらくすると、今まで強くしめつけられていた部分が楽になった。三郎の一物もさすがに怒張をうしなって、力なくしおれていた。
女は術から解きはなたれて、ぐったりと力をうしなった。

三

江戸城大奥の庭に、秋風がたちはじめた。
いったん秋風がたつと、季節のうつりかわりははやい。残暑から一気に秋へと駆け足でうつっていく。大奥の庭に萩（はぎ）、なでしこ、女郎花（おみなえし）、藤袴（ふじばかま）など秋の花が咲きみだれるのも遠いことではない。
伊賀者青山采女は大奥の庭へのおもいをこのところつのらせていた。といっても大奥の庭に咲く秋の花々を見たいがためではなかった。采女が今年の春、大奥の庭に侵入して、吉宗を吹き矢でねらってからすでに約半年がすぎていた。
その後の三、四カ月は大奥の出入りに厳重な警戒がおこなわれていたが、ちかごろ

ではさほどではなくなった。

（またそろそろ機会がちかづいた）

采女はふたたび大奥へ侵入する機会をさぐりはじめていたのだ。

伊賀者にとって将軍は主君であるが、吉宗はまねかれざる将軍であった。吉宗が将軍であるかぎり、伊賀者や甲賀者の悲願である隠密職への復帰ははたされぬ。というよりは吉宗が伊賀者らの悲願をうちくだいた。

〈吉宗の命を獲れ〉

このおそるべき密命は今年早々、藤林上総助から采女にくだった。大奥御殿内においてこの目的をはたすべき人物といえば、伊賀者内に采女一人しかいなかった。

それは采女の骨格、体つきが、小柄な細身で、そのうえ華奢ときていた。顔だちもやさしく、色白で、女に見まごうほどであったからだ。采女は自分の持って生まれた骨柄に日ごろ少々ひけめをおぼえていたが、今回はそれが何物にもかえがたい武器になったのである。

（伊賀者全体のために自分一人が捨て石になろう）

そういう固い決意が采女の胸にひそんでいた。

吉宗が菩提寺の寛永寺や増上寺へ墓参に出行するときなど、身辺に十重二十重の警固がつく。沿道や出行先の警備は水ももらさぬ厳重な態勢である。とてもその警備、

警固をつきやぶって吉宗にちかづき、暗殺をくわだてることは至難である。それをおもえば、大奥内で暗殺をはかるほうがいくらかはたやすい。すくなくとも将軍に接近する機会はつかめる。

七月も下旬の宵、大奥のお鈴廊下で、御錠口の鈴が鳴った。このお鈴は将軍の奥入りをつたえる合図であり、この時刻のお鈴は奥泊りをつげるものであった。

将軍の奥泊りは毎夜おこなわれることではなかった。将軍には御精進日がさだめられており、紅葉山の参拝や歴代将軍の忌日命日、近親者の忌日命日など精進潔斎をしなければならぬ日が月のうちに十日ばかりはある。そういう夜の将軍は中奥泊りとなる。将軍は大奥よりも中奥ですごす時間のほうがおおいのである。

将軍が奥泊りをする夜の大奥はそうでない夜よりも、大奥女中たちのいきいきがあわただしく、生気がある。中奥泊りの夜の大奥は、主人のいない屋敷のようにどことなく活気がとぼしい。夜廻りの人数に増減があるわけではないが、奥泊りの夜は夜廻りをする大奥女中たちの意気ごみもちがう。

初更五つ（夜八時）の鐘が鳴ったとき、青山采女は御広敷と長局の境界にある杉戸の前に立った。御広敷につめる役人はむろん御殿向や長局への出入りはゆるされぬ。その杉戸も普段あけたてされることはないのである。

トントン　トントン

采女は人目のないのをたしかめて、杉戸をたたいた。
そして耳をこらした。
トン　トトン　トトン
しばらくしてから長局のほうから杉戸をたたく不規則な音がかえってきた。
そのとたんに、采女の顔色が生彩をおびてきた。
トントン　トントン
念のために、もう一度杉戸をたたいた。
トン　トトン　トトン
やはり期待どおりの不規則な音がふたたびきこえた。
（今夜、将軍奥泊り！）
采女は胸のうちで声をあげた。
長局には伊賀者たちがひそかにおくりこんだ大奥女中の飛鳥がいる。大体五つ前後のころに合図をおくると、返事がかえってくることになっている。
この時刻、将軍はすでに奥入りして、小座敷において御中臈とともに夜をすごしているのだ。
将軍吉宗には御台所（正妻）はいない。正妻理子が宝永三年（一七〇六）に没していらい再婚していないのである。したがって紀州藩邸から大奥へは側室のおこんの方、

お久の方、おくめの方三人が入った。
将軍は奥泊りした夜の翌朝は明け六つ（六時）ごろかならず一度中奥にもどり、そののち総触れ（大奥の朝礼）のために大奥にもどるのである。
采女は、前回、吉宗の奥入りの際をねらって失敗したので、今回は大奥から中奥へもどるところをねらおうときめていた。
今夜、采女は伊賀者詰所の宿直の番である。
丑の刻（夜中二時）ごろまで詰所ですごしてから、風呂敷包をさげて人影のすっかりなくなった御広敷の夜廻りに立った。
伊賀者詰所は大奥玄関にある。そのなため前に添番詰所がある。伊賀者はかまわないが、添番に不審な振舞を見られてはならないのである。添番は伊賀者とおなじ大奥の番衛であるが、伊賀者よりやや格上であり、成り立ちもちがう。
金網行灯の照らすほのぐらい御広敷のなかを采女はすすみ、銅板の枠に縁どられた杉戸のちかくにいたった。
そこであらためて人影のないのをたしかめ、いちばん間ぢかの空部屋に入り、そこで風呂敷包をといた。中から大奥女中の御殿衣装がでてきた。
采女は伊賀者の装束の上からすばやく御殿衣装を身につけていった。帯は付け帯であり、巻きつけてむすぶ手間ははぶかれる。さらに足袋をはき、〈下げ上げ〉という

大奥特有の髷をかぶった。

色白で華奢な采女はこれだけで十分大奥女中に見えた。が、懐中から、紅白粉をとりだして、顔や首筋につけると、間ぢかから見てもよもや男とは見分けのつかぬ見事な大奥女中に変身していった。

采女はふたたび杉戸にちかづき、海老錠に針金をさしこんだ。三、四度針金をうごかすと錠があいた。

杉戸をひらくと、そのむこうに長局の世界がひろがっていた。杉戸からむこうは女だけの世界である。

采女は戸口をくぐり、御広敷から長局へうつった。そこは長局のながい廊下である。杉戸をしめて、采女はほの暗くながい廊下をあるきだした。衣装を女物にかえ、〈下げ上げ〉髷をつけた瞬間から、采女は立居からあるき方まですっかり大奥女中になりきっていた。腰はなよやかな柳腰、足はすんなりとのび、ほそい足首の先の足袋が夜目にも白い。

楚々たる風情である采女の前方から、夜廻りと見える大奥女中が二人、長刀をかかえ、襷をゆってやってきた。

采女はひるまずすすんだ。

二人にちかづいたとき、

「お役目、ご苦労に存じます」

采女が声をかけると、二人は礼をかえして通りすぎていった。

采女はそのまま、長局の勝手口へすすみ、そこから長局の庭にでた。

長局のひろい庭の闇のなかで、采女は一刻（約二時間）ばかりすごした。

刻々と吉宗暗殺のときがちかづいた。采女の懐中には吹き矢がひそませてある。今度こそ、吉宗の喉か眉間に射こむ自信があった。前回は無念にも吉宗にしたがう表使とみられる腰元に扇子で矢をたたきおとされた。今回もその腰元がついているとみなければならぬ。問題はその腰元の注意をどのようにして避けるかという一点につきた。それにさえ成功すれば、吉宗暗殺は成功すると踏んでいた。

しばらくすると、庭の空気がどことなく白んできた。空をあおぐと、東のほうがほの白い。

暁がおとずれた。

采女はやおら、庭の木陰から這いだし、御殿向の庭へむかってすすんだ。

めざすはふたたび、上お鈴廊下である。お鈴廊下には上と下の二つがあるが、ふだんは下の廊下はつかわない。

采女は上お鈴廊下にほどちかい庭の木陰に身をひそめ、吉宗があらわれるのを待った。

そこはいくつもの木や植込みの陰になっており、昼間でも外からは見つけられにくい場所である。

しだいに夜の闇がうすれ、朝の光が徐々に勢力を増してきた。

木陰から目をこらすと、お鈴廊下の輪郭がぼんやりと薄ら闇のなかに見えてきた。前回は夕闇につつまれていたが、今回は暁闇が庭をつつんでいる。

薄ら闇はさらにうすれ、朝の光がますますつよくなった。すでに払暁である。

さらに采女は待った。

お鈴廊下のかなたに、人影が浮かんだ。人影は三つ。一つは図ぬけておおきな男の着流し姿だ。あと二つは女である。

とうとう将軍吉宗が、采女の視界のなかにあらわれた。

あれから半年。采女はついにふたたび吉宗を視界のなかに捕捉した。

ためらうことなく采女は木陰から這いだし、音もなく木陰づたいにお鈴廊下に接近していった。

場所はほとんど前回にちかい場所である。が、前回は吉宗は中奥から大奥へわたる途中であり、今回は大奥から中奥へむかう途中である。方角は前回が南から北、今回は北から南へむかっている。

吉宗は大股ながらゆったりと歩をはこんでいる。刺客の接近を万が一にも予想して

いない、いかにも悠容たる姿が印象的である。

三人はお鈴廊下をためらわずすすんできた。

采女も躊躇なく接近していった。

（吉宗、二度めの見参！）

采女は胸のうちで声を発して、なおもすすんだ。

浅ぐろく、野性的ともいえる吉宗のひきしまった顔がはっきりと見えてきた。いかにも骨格のたくましい、采女とは対照的な体形である。その吉宗にしたがうのは御年寄と表使の腰元である。

采女は吉宗から表使の腰元へ注意をうつした。今回、暗殺が成功するか否かは、この腰元のはたらき如何によるのだ。

采女は廊下にちかい庭石のあたりまですすんだ。

目測数間までちかづいたとき、采女は吹き矢の筒を口にくわえて、矢をふくんだ。

シュッ

おもいきり吹きはなつと、一尺ほどのながさの矢は吉宗より二間ほどはなれたところへむかってとんだ。

「やあっ」

そのとき、廊下から甲高い気合がほとばしった。と同時に、腰元が裳裾をはなやか

にひるがえし、蝶が舞うようにとびたち、扇子をぬいて、吹き矢をあざやかにたたきおとした。

（しめた！）

この瞬間、采女は胸のうちでさけんだ。くだんの腰元は矢をおとすために、吉宗から距離にして二間ばかりはなれた。

采女はすぐさま、第二矢をふくんで、

シュッ

今度は吉宗の眉間をねらってはなった。

矢は一条の糸をひくように吉宗の眉間へむかってとんだ。

見事、矢は吉宗の額の中央からやや下の部分へ吸いこまれていった。采女の眼にはっきりとそううつった。

が、つぎの一瞬、おもいがけぬ事態が生じていた。吉宗のそばにいた御年寄が身をひるがえすと同時に、目にもとまらぬうごきで胸の扇子をぬきとり、発止と矢をたたきおとしたのだった。

采女は一瞬の白日夢を見るおもいがした。現実におこったこととはおもえなかった。

老女と見えた御年寄は老女ではなく、武芸に達した女丈夫であったのだ。前回に教訓を得たこころくばりがおこなわれていた。

（無念っ……！）

ふたたび采女はホゾをかんだ。

「曲者じゃっ、お出合いくだされ！」

「曲者の侵入でござりますぞ」

早朝のしじまをやぶって、腰元と御年寄のさけぶ声がひびいた。

采女はその場に踏みとどまって、もう一度、矢をふくんだ。

シュッ

三度めの矢は再度吉宗の眉間へむかってとんだが、今度は吉宗自身が脇差を鞘ごとぬいてはらいおとした。

今回のくわだてもあえなく失敗に帰した。吉宗暗殺はついに成らなかった。

吉宗は逃げかくれする意志はなく、その場に踏みとどまって、かっと采女をにらみつけた。すさまじい気迫というほかはなかった。

采女も今回は逃走の意志はなかった。逃走したにしても、これからでは間に合わぬ。

一瞬間、吉宗と対峙して、にらみ合った。

（伊賀者殿各位、おさらば！）

采女は朋輩たちにたいし、最後のわかれを胸中でつげた。と同時に、

フウッ

おおきく息をはきだすと、口から炎が吹きだした。炎は自分の御殿衣装にむかって吹きつけられた。たちまちのうちに御殿衣装がぱっと火につつまれた。衣装にはもっとも引火しやすい油がしみこまされていたのである。

一瞬のうちに采女の体が燃えあがり、火だるまになった。

火だるまは巨大な独楽のように地上で二、三度回転して、地にたおれ、のたうちまわりながら燃えつづけていった。

四

青山采女の焼死を、上総助は組屋敷で聞いた。

伊賀組詰所からの連絡でそれを知り、

「よくぞ、見事に死んでくれた」

ともらした。

刺客の身許が伊賀者とわかれば、隠密職への復帰がかなうどころか、伊賀者の全員放逐がおこなわれたとしてもいたし方ない。

(吉宗暗殺はこれでいっそう困難となった)

伊賀甲賀者の存亡を賭けた暗殺計画は頓挫せざるをえなくなった。

上総助はしばらく沈思黙考をつづけた。

ながい年月をついやした伊賀組復興の手立の選択に今せまられていた。

甲賀組と従来どおり手をむすんで、将軍吉宗を亡きものといたし、尾張継反を将軍位にむかえて、伊賀甲賀が隠密職につくか……。あるいは老中使者の要求をいれ、伊賀、甲賀であらそって、その勝者が隠密職に復帰するか……、の選択である。

甲賀三郎はすでに吉宗暗殺など実現できるものではないとして、伊賀と甲賀の決戦をのぞんできていた。決闘状は今月早々、上総助の手もとにとどいていた。

八月十五夜、亥の刻、日本橋上にて決戦いたすべく申入れ候

藤林上総助殿　　甲賀三郎

右文面の決闘状は上総助の居間の手文庫のなかにおさめてある。

しかし上総助はこれへの返事をまだ相手へ報じていなかった。今まで伊賀者甲賀者が手をむすんで御庭番と闘いをくりひろげてきた経過があるので、ただちに伊賀、甲賀で決戦をまじえることにいくらかの躊躇があったのである。

さかのぼれば、天正十年(一五八二)、本能寺の変がおこったさなか、徳川家康はごく少数の家来をつれて堺に滞在中であった。進退に窮した家康は家来の服部半蔵の

先導と、伊賀、甲賀に棲む地侍たちの警固とによって伊賀の山中に分け入り、柘植、加太の難所を無事に通過し、伊勢白子の浜まで逃げのびることができた。これが縁となって、家康は伊賀者約二百人、甲賀者約百人を徳川家で召しかかえた。これいらい、伊賀者甲賀者は徳川家で隠密ばたらきにしたがってきたのである。この間に伊賀と甲賀とのあいだに何度か軋轢、確執はあったが、ともに現在まで幕臣としてすごしてきた。それを今、老中の使いと称する者の助言によって、伊賀甲賀とのあいだで勝敗を決するには納得しきれぬものがあった。

だが、采女の吉宗暗殺の失敗によって、事態はかわってきた。べつの手段をもとめなければならぬ状況がおとずれていた。

思案をいつまでもつづけた。そのあげく、

(甲賀と袂をわかつのもやむなし……)

徐々にかんがえがその方へかたむいていった。

上総助は甲賀三郎との戦いに自信がないわけではなかった。たたかえば勝つ算段はあった。が、なんとしても同士討ちのおもいをぬぐい去ることができなかった。

しかし、相手の甲賀はすでに、伊賀甲賀の決戦を覚悟していた。

(いたし方なし……)

ついに上総助はこころのおもい決断をくだした。

そして、手文庫から硯をとりだした。

諾

甲賀三郎殿　　藤林上総助

もっとも簡単な手紙をしたため、若党に託した。

仲秋待宵はあいにくの雨であった。良夜を明日にひかえて、小望月は見られなかった。

翌日も雨であった。仲秋十五夜は無月となりそうだった。午後になっても、雨はつづいた。

日本橋が雨にぬれている。

日本橋は江戸の中央にして、全国への里程もここからさだめられている。橋の上の往来は貴賤老若のべつなく間断なく、橋の下の船の往来も朝から日暮れまでひっきりなしにつづいている。ここが甲賀三郎と上総助との決闘の場所にえらばれた。えらんだほうが不逞ならば、応じたほうも途方もない。

雨が降っていても、日本橋の往来はさかんである。高下駄に雨傘をさしていく者、

蓑笠を着ている者、あるいは尻端折りをして裸足で駆けていく者、さまざまである。馬や牛も濡れながらいく。

ところが日没も間ぢかなころ、雨があがった。

そしてはからずも、一年のうちでいちばんうつくしいといわれる名月が江戸の空にぽっかりとあがった。良夜名月、欠けたるところのない満月が日本橋を照らしはじめた。

月見の人出が町なかをそぞろあるいている。

上総助は亥の刻（十時）を前にしたころ、日本橋の南の橋詰にあらわれた。橋の南は日本橋通南一丁目であり、橋詰の西が高札場になっており、東は青物市場で、日中は大勢の人々がたむろするところである。

けれどもこの時刻になると、さすがに人通りはめっきりすくなくなった。月見の人出とはいっても、戌の刻（八時）あたりまでが峠である。橋をわたる人影もわずかなものだ。

月光が欄干の擬宝珠をまるで人影のように浮かびあがらせている。

上総助は伊賀者の服装で橋詰から北へむかって橋をあるきはじめた。

長さおよそ三十間ばかりの橋だが、人通りがすくないために、それ以上の長さに見える。幅も昼間見る以上のひろさに感じられた。

橋のむこうは室町通りである。

上総助は仔細に注意しながらむこうまでわたったが、甲賀三郎らしき者の姿は見えなかった。

相手は甲賀者随一の忍者といってよいから、変装をしてくることも十分かんがえられた。意表をついた方法で出現するかもしれなかった。

橋をわたりきって、北の橋詰へでた。こちらは橋詰の東が魚河岸であり、西が品川裏河岸である。橋詰にたたずんで、しばらく時がたつのを待った。

月の光は地上にあふれるようで、目のよい者ならば、かなり遠くまで見とおすことができる。

どこから相手が出現しても、瞬時のうちにむかえ討つこころ準備で上総助は甲賀三郎を待った。が、

（まだこぬ）

三郎の姿はどこにもなかった。

それでも、やがてでてくるという予感が上総助のなかに浮かんできた。

今度は反対の橋詰へむかって上総助はゆっくりとあるきだした。

人通りがすくないとはいえ、あることはある。

あるきながら、三郎はむこうからこちらへむかってやってくるという予感をいだい

ていた。

月見酒でもたしなんだのか、瓢箪をさげた武士がやってくるのが見えた。背恰好は三郎と似ているが、あきらかに別人である。

その武士の後から三人づれの職人の仲間たちが、声高にはなしながらやってきた。これもちがう。

この後、しばらくむこうからくる人影はとだえた。

やがて前方の闇の中から、杖をつく音がひびいてきた。目をこらしていると、座頭の頭巾をかぶり、杖をついたアンマの姿がぼんやりと浮かびあがってきた。

「ええ、アンマ、上下……、ええ、アンマ」

低いが、よくとおる声がきこえた。

アンマは杖で前をたしかめながらあるいてきた。

(くさい……)

上総助の勘にかすかにつたわってくるものがあった。

アンマのすぐ後ろから町人の夫婦がくるのが見え、その後ろにやや腰のまがった老婆がつづいていた。

上総助はアンマに注意を集中してちかづいていった。

「ええ、アンマ、上下……」

闇と月光のなかをアンマの声がながれる。

上総助はアンマが持っている杖に気をくばった。盲目は偽装で、杖は仕込杖ではないかとおもった。

距離はしだいにつまってきた。

(いつ仕込杖をぬくか……)

その間合をはかりながら、一歩、一歩とすすんだ。相手が仕込杖を抜きはなつ瞬前に、上総助は抜き打ちの一刀をあびせるこころづもりをしていた。上総助の脳裡には、はやくも血しぶきをあげて宙にとぶアンマの首が映じた。

距離が二間になり、さらにちかづいた。

アンマの杖の先を凝視しながら上総助はすれちがった。その瞬後、仕込杖が宙に舞うかとおもわれた。が、何事もなく、両人はとおりすぎた。

「ええ、アンマ……」

低い声が橋の上をながれるのを聞きながら、上総助はほっと緊張感をゆるめた。

(甲賀三郎ではなかった……)

そうおもいながら、つぎにくる夫婦者とすれちがった。

そのすぐ後ろに老婆がきた。腰のまがった六十路をだいぶすぎた老婆が目前までちかづいたとき、とつぜんひやりとするものをおぼえた。

腰がまがっているから、老婆も杖をついている。それに今まで気づかなかったのが不思議であった。

老婆の杖が宙に浮いた一瞬、

「やっ！」

気合をほとばしらせて上総助はわずかに腰をひねった。

ほとんど同時に、老婆のまがった腰がぴんと伸び、皺ぶかい顔に気迫がみち、すさまじい瞬発力をみせて老婆の体が宙へとんだ。夜空に高く舞いあがったようにさえ上総助には見えた。

仕込杖の切っ先が空中に円弧をえがいた。

仕込杖が上総助の頭上に舞いおちてきた。

上総助は後方へととんでいた。そのとき老婆の両膝から下を斬りはらったつもりだったが、手ごたえはなかった。

両者の初太刀はいずれも空を切った。まさに腕は互角であった。

「上総助、勝負っ」

「甲賀三郎、覚悟！」

右と左にわかれて、両者は声をはなった。

老婆の顔の奥から精悍さにみちた三郎の顔がのぞいた。

「伊賀と甲賀が手を切るときがまいった」

「時の勢いだ、やむをえぬ」

そういった直後、二つの影は激突し合い、仕込杖と太刀がはげしく斬りむすんで、ふたたび距離をおいて対峙した。

二人の決闘を月光がしずかに浮かびあがらせている。

この時季の夜霧が日本橋川の水面からたちこめ、ながれてきた。

霧のなかに徐々に三郎の体がかくれはじめた。甲賀秘伝〈霧隠れ〉だ。

やがて、三郎のほぼ全身が霧のなかに消えかかった。

上総助はすばやく欄干の上へはねあがり、欄干上を駆けた。

霧の中を疾走して上総助を追ってくる三郎の足音がつづいた。

上総助はまっしぐらにはしった。擬宝珠も飛びこえて疾走した。

ついに前方に欄干がつきた。

上総助はおもいきり高く、空中にとんだ。

その下を三郎がはしった。

上総助が橋の袂に着地したとき、三郎もほぼその地点まできていた。

上総助の太刀が、三郎の仕込杖が、それぞれするどく一閃した。と同時に、上総助は両手にすさまじいしびれを感じ、感覚をうしなった。

不覚にも太刀をはじきとばされていた。

三郎の手からも仕込杖がはなれ、三郎は呆然と橋詰に立ちつくしていた。

「両者ともひけい！」

そのとき霧と闇のなかから声がおこった。

「勝負はこれまでじゃ、双方よさぬか」

ふたたび橋のほうから声がおこった。

擬宝珠かに見えた人の頭がこちらにちかづいてきた。

「双方とも、真の敵をはっきりと見とどけよ。伊賀の敵は甲賀にあらず、甲賀の敵も伊賀にはあらず、両者の敵は御庭番であろう。この勝負は御庭番の罠じゃ」

月光のふりそそぐなかにあらわれたのは、飄然たる農夫姿の老人である。

「服部十蔵さまっ」

上総助がおどろきの声をあげた。

今もなお伊賀者の発祥地伊賀服部郷に閑居している、半蔵の血脈をつぐ老人である。

十蔵は今年春、伊賀者丹波伊予助の死をつたえ、いったんは御庭番にうばわれた徳川継友の誓書を上総助のもとにとどけてくれたのであった。老人はそのとき上総助がひきとめるのをふりきって、伊賀へもどっていった。

「伊賀、甲賀があらそうて、どうなるものぞ」

十蔵は両者を憂えていった。その手に棒切れをにぎっている。上総助の太刀と甲賀三郎の仕込杖を瞬時のうちにたたきおとした得物である。

「御庭番だ……」

上総助は小声でもらした。晩夏の一日、昼寝をむさぼっていた上総助のもとにやってきて、甲賀と勝負をきそえとささやいていった者の正体は老中の使者ではなく、御庭番だったのだと気づいた。

「甲賀三郎どの、おもいあたるフシがござろう」

上総助がいうと、

「たしかにござる」

甲賀三郎はうなずいた。

五

「藤林上総助と甲賀三郎がたたかって、両者ともたおれた。双方相討ちの結果となったそうだ」

という噂がながれている。

御庭番組頭藪田助八の耳にも、その噂は入った。

「公儀にも、藤林と甲賀との死はとどけられ、葬儀もおこなわれました由にございます」

桜田御用屋敷の一室で藪田にそういったのは、おなじ御用屋敷ずまいの高槻小十郎である。小十郎のとなりには、御坊有之助がすわっている。

「藤林と甲賀三郎の屋敷は組屋敷からとりのぞかれたそうでございます」

有之助は藪田にいった。

「こちらのおもいどおりに、ことがはこんだものかどうか」

藪田は低い声でつぶやいた。この罠をかんがえて、高槻と御坊を老中の使者として藤林上総助と甲賀三郎の屋敷におくりこんだのは藪田であった。

この春、本庄三四郎、原田左馬助、根来勘左衛門ら粒よりの御庭番を伊賀国におくって三人ともたおされた。そのため藪田は遠国の探索にでていた高槻と御坊を呼びもどして、目下の仕事に従事させていたのである。

「伊賀者甲賀者のうちに一人くらい、こちらの罠に気づいた者がいたとしても、おかしくはない」

藪田は自分の策があまりにもうまくいきすぎたことに、かえって不審をいだいているのだった。

「伊賀服部郷には、本庄、原田、根来殿をたおしたと見られる豪の者がおるはず」

高槻がいうと、

「その者が服部郷を出国したという報告がきておる」

藪田は気のおもい返事をした。その者が服部十蔵という、半蔵の血筋をくむ忍術の名手であることもわかっていた。

「その者は今いずこに？」

御坊がきいた。

「わかっておらぬ。江戸かもしれぬ」

藪田はこたえた。

「せっかく藤林と甲賀三郎がたおれても、その者が江戸にでてまいってはまずい。藪をつついて大蛇をだしたもおなじ」

「その大蛇が今後どのようなはたらきをいたすか？」

高槻と御坊はいった。

「おとなしく伊賀にもどってくれれば有難いが」

藪田は真実そのようにおもった。現在の泰平の世になれた伊賀者、甲賀者はおそろしくはないが、野性の本能を秘めたまま在地に根づいていた本来の忍者となると、藪田の想像をもこえたところがある。しかも忍者の本宗半蔵の血筋をひいていればなおさらである。

藪田は背筋がさむくなるのをおぼえていた。恐怖とは裏腹の興味を当然のことながら感じていた。

「伊賀者甲賀者を、生かさぬよう、ころさぬよう、このまま江戸城門番、大奥番としてつかっていかねばならぬ。これが幕府の方針であろう。この方針にそって御庭番はうごかねばなるまい」

藪田はおもくるしくいった。新将軍吉宗、御側御用取次加納角兵衛の意を体して行動いたさねばならぬ藪田の立場のくるしさがあった。藪田のいちばんのつらさは、個人としておもうさま伊賀甲賀とたたかえぬことである。

「なにか妙案はござりますか」

高槻がたずねた。

しばらく沈黙した後、

「なくはない」

藪田はつぶやいた。

「お聞かせねがえますか」

御坊がいった。

「御庭番は勝負に勝つばかりが大切なのではない。政治(まつりごと)の後始末もいたさねばならぬのだ」

そういってから、

「硯と筆」

藪田は口にした。

御坊がすぐに立ち、墨をすった硯と筆を持参してきた。

藪田は懐(ふところ)から懐紙をとりだし、筆をとった。

城中に変あり、ただちに来駕(らいが)乞う。

藤林上総助

甲賀三郎

成瀬隼人正正幸様

さらさらと懐紙に文面をしたため、封書にした。

「今夜、これを成瀬屋敷にとどけよ」

藪田はそういって、封書を御坊へ手わたした。

「これによって成瀬がうごきますや否(いな)や」

「成瀬のうごき次第によって、すべてがわかる。ことは一挙に解決するやもしれぬ」

藪田はことの解決をこの封書に賭けたのであった。

一刻ばかり後、御坊有之助は町人姿に身をやつして桜田御用屋敷をでた。

夜空に月はでていなかった。この時季、月は一夜ごとに出がおそくなるのである。それとともに仲秋の満月が一夜ごとに欠けていく。

御坊が麹町通りまできたころ、ようやく縦にやや欠けた十九夜の月が天上にかかった。

御坊は五丁目、六丁目、七丁目……、とあるいた。麹町通りに軒をつらねる商家はもうみな戸をおろし、店頭の行灯（あんどん）の火もおとしていた。

九丁目と十丁目のあいだを右にまがる道がある。すなわち成瀬横丁である。

まがるとすぐ左手にあるおおきな武家屋敷が成瀬屋敷だ。ここの屋敷の主人（あるじ）こそ、三年前、紀州徳川吉宗と壮絶な将軍位争奪戦を演じて一敗地にまみれた尾張徳川継友の付家老成瀬隼人正正幸である。しかも現在の成瀬といえば、御庭番に隠密職への復帰をとざされた伊賀者と甲賀者が力とたのむ老練の策謀家である。

成瀬屋敷のいかめしい門がまえが、月光の下に浮かびあがっている。

御坊は門前までやってきた。

門扉（もんぴ）は人の入来をこばむように閉ざされている。

御坊は袖門（そでもん）へ寄っていった。

袖門の戸を何度もたたき、

「おねがいでござります。至急のご用でまいりました。ご開門をおねがいいたします」

門番にむかって御坊は声をあげた。

一度や二度では門はあかなかった。

三度めに声をあげ、戸をたたいたとき、

「何用だ」

門の内側から太い声がして、袖門の戸がひらいた。

「御殿様への急用にございます。お手紙をおわたしねがいます」

いかにも緊迫した様子で御坊はいった。

殿様という言葉と御坊がさしだした手紙に門番の態度がすこしあらたまった。

「どちらからの使いだ？」

門番はすぐには用件をうけいれず、いぶかしげに御坊の様子をあらためた。

「お手紙に書いてございます。時間をあらそう急用にございます。お殿様にすぐにおわたしねがいます」

必死な面持ちでいうと、

「すぐに殿様にわたすわけにはまいらぬ。お側のお役にわたして、取りついでいただくのが武家屋敷の作法だ」

門番はそういって手紙をうけとった。

「よろしくおねがいいたします」

そういってから、御坊はそそくさと門前を立ち去った。

成瀬屋敷は心法寺の東塀と向かい合っている。心法寺の山門は南にむいており、東側に東門がある。

成瀬屋敷を立ち去ったかにみえた御坊の姿が心法寺東門の陰に見えかくれしていた。御坊はそこから成瀬屋敷の門を見張っていたのである。

夜闇にとざされているとはいえ、月光をとおして成瀬屋敷の門前の様子をうかがうことができる。このあたりから北側は番町の旗本屋敷が広大な面積にわたって展開するところである。夜ともなるとしずかなものだ。

ときたま野良犬の遠吠えがきこえた。

(でてくるか、どうか……?)

御坊は手紙の報せによって、成瀬隼人正が城中へむかうかどうかを見張っていた。

なにせ、死んだとつたえられる藤林上総助、甲賀三郎が差出人になっている。もしこの手紙によって成瀬隼人正が出動したとなると、両者が死んだという噂は嘘になる。御庭番をあざむくための嘘だ。

一度、袖門があいた。

(すわ……)

目をこらしていると、成瀬家の提灯をさげた中間がでてきた。ちかくへ用たしにでかけるものとみえた。

四半刻(約三十分)ほどたったころ、

ギギギ……

音をたてて、成瀬家のおおきな門扉がひらいた。

御坊は身をのりだすようにして前方を凝視した。と……

陸尺にかつがれた黒塗りの乗物が提灯とともに門からでてきた。それにしたがう供はわずか三人である。

(でた!)

御坊は胸のうちで声をたてた。乗物の主といえば殿様級である。供の三人は小姓、側役などの近臣であろう。わずか三人の供をしたがえ微行で成瀬隼人正は江戸城にむかうのである。

(死者からの手紙、成瀬がうごいた!)

やはり、藤林上総助と甲賀三郎は生きていた。衝撃的なおもいが御坊のうちにこみあげてきた。

乗物は成瀬横丁から麹町通りにでて、音もなく足早やに東へむかった。お城の方角

である。三人の供も乗物にそうように早足でしたがった。

麹町通りをどこまでもすすめば半蔵門にいたる。右にまがって濠ぞいにすすむと桜田門である。乗物がめざすところは桜田門であろう。

麹町通りは江戸でももっとも長い目抜き通りである。したがって、幾筋もの脇道や横丁がそこからわかれている。成瀬横丁、薬師横丁、清水谷、亀沢横丁……などだ。

乗物はさらにすすんだ。六丁目のきれるところで善国寺坂が左へわかれる。かつて善国寺があったところが今はひろい火除地になっている。そのあたりは昼間でもあまり人通りのない、寂しいところだ。

善国寺坂の手前まで乗物がきたとき、前方の路上に影法師が三つ立ちならんでいるのが見えた。影法師の主たちは三人、路上のほぼ中央に立っていた。

乗物はすすんでいったが、その三人は道をあける様子もなく、行く手をさえぎるように立ちはだかったままだ。

「急用だ。道をあけい！」

供の三人がでてきて、影法師を叱咤した。

が、影法師は三つとも微動もしない。三人はいずれも黒袴に黒羽織の装束をしている。藪田助八、御坊有之助、高槻小十郎の三人である。

「お待ちあれ。故あって、ここは通せぬ」

藪田を中央にし、その左手に立った御坊が叱咤しかえした。

「何故に天下の往来をせき止められる。こちらは御三家屋張藩の乗物でござる。すぐさま道をあけい！」

供の三人は怒気をあらわして、せまってきた。

「道はあけぬ。ここは通さぬ！」

今度は高槻が傲然といった。

「その方ら何者だ。故あってと申したのはどういうことだ」

今にも抜刀しそうな勢いで供の一人がにじり寄ってきた。

「われらは公儀庭番である。御役目によって、その乗物をあらためる。乗物の引戸をあけよ」

藪田が名乗って命じた。

「その方ら、尾張家の乗物をあらためると申すのか、無礼者っ」

三人が激昂し、それぞれ太刀の柄に手をかけた。

「御三家であれ、乗物をあらためる。早々にあけよ。邪魔だていたすな！」

藪田は力づよくいいはなった。

六

息づまる沈黙が数瞬つづいた。
殺気と殺気がぶつかり、月光すらも冷えびえと凍りつくようだ。
そのとき、乗物の引戸がしずかにひらいた。
成瀬隼人正が半身をあらわし、顔をのぞかせた。
「尾張家家老成瀬じゃ。これより登城をいたす」
成瀬は悠揚たる態度でいった。
「はて、この時刻にご登城とは面妖な。いかなる理由にて、ご登城なされますか」
藪田は成瀬の貫禄に負けることなく応酬した。
「御三家の用向きにて登城いたす。御三家は何刻であれ、城中に用がおこれば登城する。尋問は無用じゃ」
成瀬はこともなげにはねつけた。御三家の格式と威勢をしめしたのだ。
「いかに御三家の御乗物と申せ、不審がある以上はお通しできませぬぞ」
藪田はやんわりと凄みをきかせた。
「何をもって不審と申すか。御三家にたいする無礼はすなわち幕府将軍家への非礼とも相なるぞ。言葉づかいに気をつけよ」
さすがに成瀬は苛だちをかくせなかった。
「御三家尾張殿に不審がござる。ご登城無用でござる。この道の通行相ならぬ！」
藪田がとうとう、成瀬の面をおかして痛罵した。
「無礼者っ、公儀役人といえども許しがたし。御庭番の面々、ひかえよ！」
ついに成瀬が咆哮した。顔面に憤怒が煮えたぎった。
「ひかえるのは、成瀬隼人正、そちの方だ。これを見よ」
藪田はついに成瀬を呼び捨て、懐中から桐箱をとりだした。
その桐箱をあけ、藪田は一通の書面をとりだした。
「尾張家の不審はこれにてあきらか。成瀬殿、これをどう釈明いたす」
藪田はその書面を成瀬に見えるようにかざした。
成瀬は乗物の明かりに照らして、書面に見入った。

誓　書

尾張継友もし将軍襲職いたし候はば、御庭番を廃止し、伊賀者甲賀者を隠密役と致すべきことを誓うもの也。仍て件の如し

享保二年十月五日

藤林上総助殿
甲賀二郎殿

徳川継友（花押）

誓書の文面を読みくだして、成瀬はさっと顔色をかえた。
この誓書は一度うばわれて御庭番の手にわたったが、伊賀者百地日向の娘せつが加納角兵衛の屋敷からとりもどした。さらに今年の春、伊賀において御庭番にうばわれかけたが、服部十蔵によって上総助にもたらされていたはずであった。
その誓書がなんと藪田の懐中からとりだされたので、成瀬は驚愕した。
「このような誓書など尾張家はかかわり知らぬ。釈明いたすもおろかなことじゃ」
顔面蒼白となりながら成瀬は声をあげた。その態度には狼狽の色があきらかに見えかくれした。
「尾張家の付家老どのがかかわり知らぬはずはござるまい。尾張継友公の花押もおしてある。どうしても存じおらぬとおとおしになるならば、これを将軍に上覧いたし、ご判断いただくのがよろしかろう。成瀬隼人正殿、いかようにいたす？」
藪田はここで一押しも二押しもした。
成瀬は切羽つまった様子であった。

「その誓書、尾張家をおとしいれるための偽物でござろう」
成瀬は傲然とつっぱったが、その声音にはどこかに弱々しさがひそんでいた。文書にも文面、文字にも見おぼえがあるからであろう。
「その自信がござるなら、上様にご上覧いたすことご承知なされますな」
藪田はさらに念押しした。
月光に照らされた成瀬の顔に苦渋が見えてきた。
供の侍たちも成瀬の苦悩を察し、これまでの気迫がややにぶったように見えた。
「刈谷、三宮、この誓書は尾張家にかかわりない！」
成瀬は今度は自分の供にたいしていった。
「成瀬どの、上様への上覧、ご承知でござるな」
止めを刺すように藪田がいった。
その刹那……、成瀬はやにわに腰にさした脇差を抜きはなった。
藪田も応じて、太刀の柄に手をかけようとした。
成瀬の顔が一瞬ゆがんだ。と同時に、
「やっ！」
腹のそこからしぼりだすような気合を発し、成瀬は脇差の切っ先を自分のほうにむけ、一気に、喉に突きたてた。

噴出するように血汐が虚空へとんだ。
供の近臣たちがとめる暇もなかった。おもいがけぬ成瀬の振舞であった。
成瀬は喉から脇差をぬき、もう一度声をあげて、今度は左胸を刺しつらぬいた。
「ご家老っ」
「どういたしましたっ」
「何ということを！」
供三人は啞然となって成瀬に駆け寄った。
「わが不始末じゃ。殿にご迷惑がかかっては相ならぬ……」
成瀬は血をながしながら、うめくようにいった。成瀬は伊賀者甲賀者と手をむすんだことを今わの際に後悔したようだった。これが成瀬の最期の言葉だった。
成瀬は血がながれるにまかせ、体を乗物の背にもたらせて、苦痛にたえながら瞑目し、果てていった。
「ご家老っ、ご無念であらせましょう」
「このご無念はかならずはらしまいらせますぞ！」
供の侍たちは成瀬の遺骸にすがりつき、断腸の言葉をほとばしらせた。そして、気をとりなおしたように立ちあがり、藪田らの前に憎悪の顔、憤激の態度でむきなおった。

「尾張家側役、刈谷新伍っ」
「小姓、三宮九郎っ」
「目付頭和田半左衛門！　ご家老のお恨みをはらすっ」
三人は口々に名乗り、抜刀して勝負をいどんできた。
そのとき、善国寺坂の闇をついて疾走してくる人影が月光のなかに浮かんだ。
（敵か、味方か……？）
藪田は目をこらして見入った。
御坊も高槻も、敵の三人も疾走する人影を凝視した。
見る見るうちにその人影は坂を駆けあがってきた。その猛然たる疾走ぶりからは想像もできぬ老人がやがて、乗物の前に駆けつけた。
「しまったっ、おそかった……！」
老人は乗物のなかですでに亡骸となっている成瀬をみとめ、無念そうにもらした。
「藪田助八、偽の誓書でたばかりおったな」
老人がにらみつけていった言葉で、藪田はその老人が何者であるかわかった。
「服部十蔵、すでに老いたようだな。おくれては、きた甲斐もない。耄碌いたしたか」
老人が藪田の持つ誓書を偽物と断言したのは、彼自身が本物を所持しているからに

ほかならぬ……。藪田はそうかんがえた。十蔵がいうとおり、藪田は加納の手にいったんおさまった尾張家の誓書の文面を記憶していて、偽物をこしらえて成瀬に見せたのだった。

「藪田、決着をつけるべきときがきたようだ」

十蔵は坂道を駆けのぼってきて、いささかも呼吸をみだすずいった。藪田の脇にひかえる御坊と高槻の存在は無視していた。

「今ごろ老人がわざわざ田舎からでてくるとは、よほど伊賀者にも甲賀者にも人物がおらぬと見える」

藪田は皮肉をきかせていった。

「わしが負けたら、伊賀者甲賀者は今後、隠密役に復帰することは断念いたすとしよう。藪田、おぬしが負けたら、隠密役から手をひけ」

十蔵は自分では隠密役への復帰をねがっていないながら、伊賀者甲賀者たちのために藪田とたたかう決意をしたのであった。

「おれが負けたら、おれは隠密役をしりぞく。されど御庭番全体の進退については知らぬ。それは公儀がさだめるところ」

「承知いたした。藪田がぬければ、御庭番の屋台骨はくずれたも同然じゃ。それでよかろう」

十蔵は承知した。

そのとき、両者の足もとちかくから、とつぜんおおきな夜鳥が羽音をたてて飛びたった。

両者は一、二歩ずつさがって間隔をとった。

先手をとったのは十蔵である。十蔵はいきなり身をひるがえし、今しがた夜鳥が飛びたった善国寺坂を駆けくだりだした。あたかも怪鳥が翼をひろげて地上をひくく飛ぶように、十蔵は身を前傾させ、目ざましい速さでふたたび坂道を疾走していった。

藪田が十蔵を追走しはじめた。夜風を背に負って、猛虎のように藪田も全速力で駆けた。

十蔵は一刻もはやく藪田を成瀬家の乗物からひきはなしたい意図があったのだ。坂を駆けくだり、十蔵は善国寺跡の広大な野原へ踏み入った。

野原には一面に丈のたかくのびた秋の草とススキが闇と月光のなかに茫漠とひろがっている。草とススキが原をわたる風にそよいでいる。

草をわけて十蔵は原の中央あたりまですすんだ。

藪田は十蔵の技のなかに、伊賀忍法の精髄が見られるかもしれぬと期待した。藪田も根来忍法をつかう立場から、伊賀忍法をやぶりたいとする闘志があった。

藪田が原の中央へむかうと、十蔵の姿がとつぜん闇のなかへ消えた。

月光をすかし見たが、十蔵の姿を見つけることはできなかった。秋草のススキは三尺以上の高さにのびている。その中へ十蔵は身を没してしまった。

こうなると見わたすかぎりの草原のどこに十蔵がひそんでいるかわからなくなった。風の吹く原に、藪田は一人呆然と立った。

こちらからさがしだそうとすればするほど、あせって精神的に不利をこうむる。藪田は相手の攻撃を待つことにした。攻撃にでる以上、姿を見せねばならぬ。

やがて、草原の一カ所がふたつに割れ、それが波のようになって藪田にちかづいてきた。

藪田はそれを目で追い、十蔵が出現する間合をはかった。

ついに草の波が藪田の二間ほど手前まできた。

「やあっ」

藪田が気合をほとばしらせたのと、黒い影が勢いよく草原からとびだしたのが同時であった。

藪田の一刀が抜き打ちに黒い影を真っ二つにしていた。

(やった!)

と思ったが、手ごたえがやや軽かった。藪田が両断したのは、体のおおきな夜鳥であった。

そうとわかった瞬間、藪田の左の側面から巨大な怪鳥じみた影がおどりでて、忍び刀を一閃した。

藪田はその初太刀をかわすのが精いっぱいであった。

が、十蔵は夜鳥までもちいた必殺の一撃をかわされたのがよほど衝撃のようだった。

藪田はすぐさま、後方にとんで逃れた。

両者は草原のほぼ中央で対峙した。

月は藪田の背後にあり、月光が十蔵の老いてはいるが深いシワのなかに闘志をひめた顔貌を照らしだしている。藪田は意識して相手が逆光となる好位置をしめたのだ。

藪田はこれで六分四分の利を得た。真昼の太陽には比較できないが、十九夜の月といえば、かなり明るい。

(しめた)

今度こそ藪田はそうおもった。

十蔵は位置をうつそうと足をはこんだが、それに応じて藪田も移動するので、十蔵の逆光はかわらぬ。

十蔵の態度にこころなしか、いらだちがあらわれた。

藪田はここを勝負どころとこころえた。

今度は藪田のほうが先にうごいた。じりじりとせまり、気力で十蔵を圧倒していっ

た。

「うっ！」

唸るように気合を発し、身をおどらせようとした瞬間、とつぜん藪田の正面におおきな月が浮かんだ。と同時に強烈な月光が藪田をおそい、目がくらんだ。

「伊賀忍法〈月遁の術〉」

勝ちほこったように十蔵はいって、忍び刀を力いっぱい振り抜いた。十蔵は鏡をもちいて、逆光を利用したのだ。

藪田は体を野に転倒させながら、夢中で太刀を一閃した。藪田の手にしたたかな手ごたえがのこった。

十蔵は片手で目をおおいながら朽木がたおれるように地にくずれていった。

「根来忍法〈ススキの絮〉とでもいうておこうか」

すばやく体をおこしながら藪田はいった。藪田は草原のススキの穂をいくつも摘みとっており、それを十蔵の顔に投じたのだった。

ススキの穂は仲秋から晩秋にかけて、白い絮（綿）となって空中に飛び散る。それが目に入ると痛くなって涙がでる。十蔵は両目に絮をいっぱいあびたのだ。

「無念だ……」

その一言をのこして、十蔵は息たえた。

藪田は肩でおおきく息をついた。

（これで御庭番は生きのびるか……）

安堵のおもいが藪田のなかにひろがった。

月光がひろい草原を照らしている。

秋の虫の声がきこえた。

幕府隠密帳

南原 幹雄

学研M文庫

2007年5月22日　初版発行

発行人 —— 大沢広彰
発行所 —— 株式会社学習研究社
東京都大田区上池台4-40-5 〒145-8502
印刷・製本 — 中央精版印刷株式会社
© Mikio Nanbara 2007 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。
★この本に関するお問い合わせは次のところへ。
• 編集内容に関することは —— 編集部直通　03-5447-2311
• 在庫・不良品（乱丁・落丁等）に関することは ——
出版営業部　03-3726-8188
• それ以外のこの本に関するお問い合わせは下記まで。
文書は、〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15
学研お客様センター『幕府隠密帳』係へ
電話は、03-3726-8124
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。
複写（コピー）をご希望の場合は、下記までご連絡ください。
日本複写権センター　TEL 03-3401-2382
R〈日本複写権センター委託出版物〉

な-10-8

この作品は、一九九五年、新潮文庫より刊行されたものです。

学研M文庫

最新刊

霊岸島捕物控
新川河岸迷い酒
一度きりの契りのはずが…時の流れの悪戯か。
千野隆司

幕府隠密帳
忍びの鋼が交錯し、江戸の闇に散る命の火花
南原幹雄

濡れ事師春快
みだれ肌
化粧師として女の性の深淵に迫る男は……
天宮響一郎

三毛猫先生事件帖
愛染桜 花地獄
巨悪の魔の手から女たちを救え！
風間九郎

撃剣
鞘走り暮鐘
血に飢えた妖剣の封印が今、解かれた！
武藤大成

超空母出撃 1
第二次サンゴ海海戦
6万トン級超巨大空母「紀伊」「土佐」出現!!
田中光二